
IS 緑を纏うもの

狂雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 緑を纏うもの

【Nコード】

N3954X

【作者名】

狂雲

【あらすじ】

雨裂霧人、彼はとある事件により両親をなくしてしまう

それから10年霧人は両親を殺したIS、そのISのための学園に
来ていた。生徒として

IS学園で、笑いあり、涙あり、血しぶき（一夏の）ありの学園生
活をどうぞ

メインヒロインは筭です

IS学園生活スタート(前書き)

こんなものを書いてみました
気に入っていただけたら幸いです
どうぞ

IS学園生活スタート

頭上をミサイルが飛んでいく

「霧人！速くこっちに来なさい！」

「待ってよ！母さん！」

三人家族が森の中を駆ける

頭上では白い謎の機体が飛んでくるミサイルを次々と落としていく

「もう少しで避難区域から出る！それまで走り続ける」

父親らしき人が隣に走っている母親らしき人と後ろを走っている少年に声をかける

少年はふとミサイルを落とし続けている機体に目を向ける
するとその機体がこちらを向いた

自分に向かってくるミサイルを落とすためだろう
銃のようなものをこちらに向ける

「父さん！母さん！危ない！！！」

少年は両親に向かって手を伸ばす

刹那

ビームのようなものが目の前、自分の右目と右腕、さらに両親を直撃する

少年は爆風で吹っ飛ばされた

「なんだ・・・痛っ！」

右目と右腕に激痛が走る
右目がまったく開かない。恐る恐る右目を触ってみる
すると再び激痛がはしる

「どっつなってるんだよ・・・これ」

右目を触った自分の左手を見ると血で真っ赤に染まっていた
慌てて右腕も見る
手首から肘までが血で真っ赤になっている

「なんでこんな・・・！父さん？母さん？」

少年はあたりを見回す
あるのはさつきまで自分たちがいたと思われる場所にあるクレーター
それと木々だけである

「父さん！母さん！どこにいるの？返事してよ！」

しかし、返ってくるのは静寂だけ
少年はだんだんと意識が遠くなってくるのを感じた

「父さん・・・母さん・・・どこ？」

それだけ言うと少年はその場に倒れてしまった・・・

青年が体を起こす

「また、あの時の夢か・・・」

最近は見なかったのにな

これから通う学園が原因かな・・・

「とりあえず着替えよう」

「ご飯の準備出来てるわよ、霧人」

「分かったよ、義母^{かあ}さん」

俺は雨裂霧人（あまざき、むと）

今16でこれからとある学園に入学することになる

あの夢はいまから10年前の白騎士事件と呼ばれる日本を恐怖のどん底にまでおとしかけ

世界の男尊女卑を女尊男卑にひっくり返した事件である

この白騎士と言うのはISーインフィニット・ストラトスーと呼ばれる兵器の名前だ

元は宇宙で活動するためのマルチフォーム・スーツだったが今では飛行パワード・スーツとして戦争の抑止力に使われている

「でもホントに行くの？IS学園」

「受験も受けて合格したからね、もちろん行くさ」

「気分を悪くするかもしれないけどあなたの両親、私の義弟、義妹が死んだのは・・・」

「分かってる、でも本人たちから謝罪はしっかりと貰った。むしろ、あっちだつて人を殺してしまつたつてひどく落ち込んでたし」

「もう吹っ切れたの？」

「うん、乗り越えることにした、10年前に」

「そう、なら安心したわ。ごめんなさいね、思い出させて」

「大丈夫だよ、義母さん。心配してくれてありがとう。ごちそうさま」

俺は飯を食い終わり、学園・・・俺の両親を殺したISの専門学校、IS学園に向かうため支度をした

IS学園に向かうためのバスに乗っている

バスの中には仕事でたまたまIS学園行きのこれに乗る人以外がIS学園の制服を着た女子である

そう、ISはなぜか女性しか操れないのである

なので、IS学園の制服を着ている俺を女子どもは不思議そうなお味津々のような目で俺を見ている

俺は自分の右手につけている、黒いグローブに目を落とす

打鉄改、俺の仮の専用機

などと考えているとだんだん眠くなってきたので寝ることにした

「話とはなんだ？霧人」

「ああ・・・」

「・・・？」

此処はとある中学校の屋上である

季節はもう冬も終わる3月の下旬である

「篠ノ之箒」

「な、なんだ」

「俺と付き合って欲しい!」

「・・・!!」

俺は両親を殺したIS・・・それを作った篠ノ之束しののたばねの妹、篠ノ之箒ほじきに告白をしたのだった

惚れた理由は一目惚れだった

篠ノ之箒はISを開発した束さんのせいで重要保護プログラムとか

いうのによって日本を転々としているらしかった

それで俺が通っている中学校に来たのだった

俺の中学校は小中一貫校と言う割と珍しい学校で、生徒会長を決めるのも珍しい方法だった。現生徒会長とある議題で話し合い、勝った方が生徒会長になれるというものだ

資格は1年でも生徒会をしていることだったので小6の時に生徒会に入っていたためあっさりと受けることが出来た

しかも、女尊男卑のせいで最近では女子しか生徒会にいない俺はとも浮いた状態で生徒会の活動をしていた。男子からは英雄なんて呼ばれていた

現生徒会長は今の世界を象徴するかのごとくの人だった。前から生徒会に入っていた俺を常に見下していた。男は所詮クズ・・・それがあの人に口癖だった

なので今までの鬱憤を晴らすためにコテンパンに打ち負かしてやった口で俺に勝とうなど100年早いんだよ

というわけで俺は学校初の1年で生徒会長になっていた

そんな時に箒は転入してきた

最初は周りから興味と軽蔑のまなざしやISについてあれこれと聞かれて困っていた

その時の箒の顔は悲しい顔をしていた

なのでみんなに言っただけで質問をさせないようにした

箒は剣道部に入ってきたときは内心で飛び跳ねていた

だが、箒の剣はただの暴力だった

周りの連中はただ強い、すごいと言っただけで褒めていた

俺はあれではいけないと思っただけで、箒の練習にはいつもついていて

あるとき、箒に面と向かっていった、お前の剣はただの暴力だと

箒はそんなことないと言っていたが俺は退かずに勝負を挑んだ
なぜかと言うと、俺も暴力に沈んでいた時があったからだ
箒の姿がかつての俺と重なる

俺は言った、お前の振るう剣は剣道ではなく剣術だ、と

剣の道に暴力はない、剣の術は暴力しかない

お前にそんなことが分かるのかと箒に言われた

もちろん、俺は剣術をつかえるんだからと言い、俺は剣術「絶刀」
を使った

その後、箒は自分の過ちを認め、俺に泣きついてきた。嬉しさと恥
ずかしさで顔が赤かったが見られてなかったので良しとしよう

何て事をしていたら余計に箒に惹かれてしまった

そして2年も終わるといふ頃急に自分の気持ちを伝えなければなら
ないという衝動に駆られた

だから告白したのだ。この判断は間違ってたと気づくのは3
年になってからだった

「すまない、私にはほかに気になっている奴がいる、だから待つて
ほしい」

「そうか、なら答えを教えてくださいるまで俺は待つからな」

だが3年になった時、箒は別の学校に行ってしまった

結局、箒の答えを聞くことが出来なかった

ガタンっ

「んっ、ついたか」

まさかまた夢をみるとは

バスを降りるとそこにはとてつもなく大きな学園が存在していた

そして校門の前にはうなだれているIS学園の制服を着ている男子がいた……？

「おい、そのの」

「えっおれ？」

「そうお前」

俺は男子に話しかける、そいつは顔は上の上くらい、背は170くらいか、俺は178だ

「あれ、なんであんたもこの学園の制服を？」

「ここの生徒になるからな、お前もそうだろ？」

そう言うとそいつはさっきまでのテンションが嘘みたいに明るくなつた

「そうなのか！俺一人だと思ってたよ！」

すごいテンションだな、おい

「お前、名前は？俺は雨裂霧人」

「織斑一夏だ、よろしく」

やはり男同士、すぐに仲よくなった

「ぐぬぬぬぬ」

「一夏、耐えろ」

「なんで霧人は平気なんだ」

ただいま、教室内である

女子から興味のまなざしで見られ続けている

俺は中学校で生徒会の女子からこれと全く同じまなざしを3年間受け続けたため苦にならない

「慣れる、こんなもの1週間で慣れるぞ、経験者だからな」

「そうなんだ」

「皆さん、席についてください」

つとこの人が担任か？

「今日からみなさんの副担任になる山田真耶やまたまやです」

山田先生がいさつしたが一夏と俺がいるために変な空気が漂っている

「え〜と、では自己紹介してきましょうか」

大丈夫か、この先生は？

「では、雨裂君どうぞ」

さて、どんな紹介の仕方をしようか

「雨裂霧人です、趣味は読書、料理や家事です。これから、お願いします」

「きゃ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜」

おわっ、なんじゃいなまったく

「かっこいい！〜！すごいイケメン！〜！生まれてきてよかった〜」

言いすぎださすがに、俺は席に着く、ふと一夏を見ると青ぞめてい
る、大丈夫かこいつは

「織斑君？織斑君！」

「はっはい!？」

一夏は・・・おそらく自己紹介の内容を考えていたのだろう
山田先生の声に対して素っ頓狂な声をだした

「えゝ、織斑一夏です・・・」

周りからはもつと喋ってオーラが出ている
おや・・・なんであの人がここにいるんだ・・・？
ん？織斑・・・そうかそうだったのか

「以上です」

「ごん!!」

みんな一斉に机に頭をぶつけた

スパアアン

「いったあ」

「まともに挨拶も出来んのかお前は」

「ちっ千冬姉」

スパアアン

「織斑先生と呼べバカ者」

「織斑先生、会議が終わったんですか」

「ああ、山田先生すまなかつたな」

織斑千冬・・・俺の両親を殺した白騎士張本人であり元世界最強のIS操縦者である

「さて、私が貴様らの担任である、織斑千冬だ。貴様らを1年間で使い物にするのが私の役目だ」

「きゃ〜〜本物よ！！本物の千冬様よ〜〜」

「わたし千冬様に会うために北九州から来ました」

遠路はるばるお疲れ様です。え〜とたしか村木さん

「は〜、まったく毎年こういう馬鹿者しか来ないのかこのクラスは」

「織斑先生、お久しぶりです」

「・・・！久しぶりだな・・・雨裂」

「もう、後悔する必要もないですよ、あれは事故ですし」

「お前は何とも思わないのか」

「前にも言いましたよ。乗り越えると、そして乗り越えましたし」

「そうか、お前が超えたなら私も超えるか」

「それがいいです」

1時間目はただの世界史だった

そのため簡単だった

「ちょっといいか？」

「箒」

「えっ？霧人、箒を知ってるのか？」

「ああ、中学の時な」

「一夏いいか？」

そう言つて二人は教室から出て行つた・・・もしかして簿が気に入つてるやつつて・・・一夏か？

授業が始まる直前に二人が戻つてきた

2 時間目はISについてだった

俺は中一の夏にこの打鉄を買つたわけだしそのころから勉強してたから問題ないけど・・・

一夏は全くだつた。青ざめている、絶対分かつてないよこいつ

「ここまでで、分からないことがありますか？」

これは初歩の初歩であるからして分からない奴は普通はいない
一人を除いて

「織斑君？どうしました？」

「え〜と、分かりません」

「どこがですか？」

「全部です・・・」

「ホントですか・・・ちなみにここまでで分からないことがある人は？」

一夏は俺に期待のまなざしを向けるが俺は分かっているため手をあげない

「織斑、受験後にもらつたISの教科書はどうした？」

「あれは・・・電話帳と間違えて捨てました」

スパアアン

「ぐおおおお」

「貴様にはもう一つくれてやる。1週間以内にすべて覚える」

「えっあれを？」

「貴様に拒否権はない」

そんなことで授業は終わった

「ちょっとよろしくて？」

「んあ？」

「なんだ？」

一夏の目の前には金髪ロールで碧眼、真っ白ともいえる肌、碧眼の目には俺たちを見下してる

「まあ、なんて態度ですか？この私が話かけてるのに」

「いや、俺あんたの事知らないし」

「この私を知らない？」「イギリス代表候補生のセシリア・オルコツトだろ」・・・あなたは知っているのですね

セシリアは少し驚いた様子だ

「ちなみに一夏代表候補生とは国家の代表になれるかもしれない奴の事だ」

「なるほどね、つまりはエリートと」

「そう！エリートなのですわ！その私と同じクラスと言うだけで幸運なことですわ」

「そうか」

「いいことだな」

「ばかにしてます？」

「お前が幸運だって言ったんだろ」

「右に同じだ」

セシリアは若干怒り気味だ

「で、一夏に何の用があるんだ」

「・・・そうでしたわ。エリートたる私がISについて教えて差し上げようかと思いましたが、土下座をすれば教えますわ」

「そんなことしなくても、霧人が教えてくれるし」

「なっエリートである私を差し置いてこの男に教えることは。私は今回の受験で唯一教師を倒したというのに？」

唯一？何言ってるんだ

「受験の時か、なら俺も倒したぞ」

「俺も倒した」

「なっ私だけと聞きましたのに？」

「女子ではってことだろ」

綺麗にはもって俺たちは言った

そしてセシリアが何かを言おうとした瞬間チャイムが鳴った

「くっ続きはまた今度ですわ。逃げないでくれます!？」

「どこに逃げれるんだよ」

「さあ？」

授業中織斑先生が何かを思い出したような顔をしてこちらを向いた

「そういえばクラス代表戦のための代表を選ばなければならないな。

誰か候補者はいないか？推薦でもいいぞ」

「織斑君をすいせんします」

「私も」

「他にはいないか？推薦者には拒否権はないぞ」

なに！それは御免こうむる

「俺は立候補します」

これで一夏に押し付けられる。セーフ

「納得がいきませんわ！！」

セシリアか・・・

「このエリートであるセシリア・オルコット以外が代表になるなどあり得ませんわ。珍しいだけの極東の猿などに任せられることではありません」

俺と一夏はその言葉にカチーンと来た

「そもそも、わたくしがこの極東の地にいるだけでも・・・」

「そこまでにしとけよ自信過剰愛国者」

「そうだよここにいたくないなら不味い料理で何年間も1位にいる国にさっさと帰れ」

上が俺、下が一夏である

「なっ私の祖国を侮辱するのですか」

「先に侮辱したのはソツチだ」

「ならば、決闘ですわ！！」

「おう、四の五の言うより早いからな」

「もしあなた方が負けたら私の奴隷にしますわ」

「上等だ、でハンデはどのくらいつける？」

「あら？早速お願いですか？」

「いや、俺がどれだけハンデをつければいいかって聞いてんだよ」

一夏・・・喋り過ぎ、しかもハンデって俺じゃあるまいしお前じゃ無理だろ

「織斑君、本気で言ってるの？」

「男が強かったのは昔の話だよ」

「それは違うだろ」

俺はその話に加わる

「女が強くなったのはISに乗れるからだ。でもここにはISに乗れる男がいる。立場は同等なら分らないだろ？」

周りは静まる

「だがな、一夏。お前はISに乗っている時間が少なすぎる。そんなお前がハンデをつける必要はない」

「でも！」

「むしろハンデをつけることは相手を侮辱することだ。そこまではしたくないだろ？」

「そうだな。ちょっと暑くなり過ぎた」

「話は決まったな。では一週間後、織斑とオルコットがまず戦うという事でいいな」

「」「はい」「」

放課後

「一夏貴様なぜこれほど弱くなっている」

「中学は部活してなかったんだよ」

一夏は箒に剣道で負けていた
事の経緯は決闘を一夏が勝手に決めたので箒と俺にISの操縦やらを聞きに来たからである

そこで箒はまず剣道の腕を見ることになったのだが

「鍛えなおす！」

「え？俺はISについて聞きたいんだけど」

「それなら俺が教えてやる。お前は箒に絞られる」

「まじで！！って箒！待ってくれ。ぎゃああああ・・・」

「ふう」

「お疲れ、箒」

一夏？向こうで死んでるよ。表現でな

俺が箒にタオルを渡すと箒は驚いた顔をした

「ほれ」

「ああ、すまん」

「箒、答えはでたか？」

「・・・！すまん、まだだ」

「そうか、でもそれはお前の気持ちだ、俺はどっのどっの言っつも
りはない」

寮内

「ここが俺の部屋だな」

一夏はいまだに死んでたからおいてきた
二人で一部屋らしいからおそらく一夏と相部屋だろう

「鍵を・・・開いてる」

誰かいるのか？

そつとドアを開けて中に入る奥のベッドに道具が置いてある
女子と同部屋つてまじかよ・・・
しかも相手はシャワーを浴びてるらしい
仕方ないので道具を置き最近買った料理本を読み始める

「ふう、おや？来たのか。私が同じ部屋の・・・」
「箒か？その声、服を着たらどうだ」

俺は本を読んてるため箒の姿を見ていない
箒は少しの間固まっていたがすぐに着替え始めた

「なんで霧人がここに？」
「なんでと言われても山田先生にこの部屋の鍵を渡されたんだ」
「そうか・・・そうだシャワーを使う時間だが、私が7時から8時、
霧人が9時から10時の間で」
「うん、了解した」

しばらくの沈黙

「霧人、なぜお前は私の事が好きなんだ？」
「最初は一目惚れだな」

箒は顔を赤くしてうつむいた

「私はもう寝る」

「そうか、お休み」

「ああ、お休み」

俺もシャワー浴びて寝るか

IS学園生活スタート(後書き)

どうでしょうか？

感想とか来たらしいな

主人公紹介

主人公

雨裂霧人
あまてりきむろ

年齢 16 顔 上の上 右目の周辺に右目を囲むように傷跡がある
身長 178 髪 黒で一夏と同じくらいの長さ

詳細

剣道の名門雨裂家の分家の長男として生まれる、幼い時から剣術の雨裂流と剣道を習っていた

6歳の時、家族と旅行中に白騎士事件に遭遇、その際両親を亡くし自分の右目と右腕にけがを負う

その後病院で白騎士事件の犯人である、篠ノ之束と織斑千冬に謝罪され二人を許すとともに両親の死を乗り越えた

事件後は、本家に引き取られより本格的に雨裂流と剣道を学んだ
実力は小学1年でありながら小学生の全国大会で優勝するほどである
中学の時に箒に出会い一目惚れ、その後何かと世話を焼く、中一の夏休みに束に遭遇、束からISのコアと打鉄をもらう、ISのコアを自分に慣らすついでに打鉄を改造、そのため半専用機のような状態になっている

中二の冬に箒に告白したが答えは聞けずじまいで箒が引越してしまった、しかし今でもあきらめてない

中三は箒の事をつつすら考えながら生活していた
ちなみに生徒会長の座を求めて勝負を挑んできた先輩、後輩を3年間退け続けた

現在は、IS学園で学園寮生活をしている、同居人は箒

流派 雨裂流

戦国時代から続く有名な流派、戦国時代では殺人剣として受け継がれてきたが江戸時代から活人剣として受け継がれてきた。殺人剣時

代は天裂流という名前だった

活人剣だが威力によつては殺人剣にもなりえる

霧人が現在25代目当主であり、最年少当主である

技 『絶刀』 一々十閃 『居合』 斬刀 『奥義』 天裂 『秘技』 千迅

IS 仮の専用機 打鉄・改うちかね・かい

霧人の実力を十分に発揮するために機動性を高めた機体

武装は近接ブレード一振りだけ

機動性以外は普通の打鉄である

クラス代表決定戦（前書き）

今回はクラス代表決定戦のお話です
どうぞ

クラス代表決定戦

「〜と、これがISの大まかな歴史だな」

「なるほど・・・でなんで歴史から勉強してんだ？」

「だって一夏、お前ISについて知らな過ぎなんだもの」

「ぐっ！返す言葉がない」

放課後の教室には俺と一夏しかいない

そして一夏はISの教本と格闘中だ

「明日には、お前の専用機が届くから今日のうちに操作方法も説明しとくか」

「えっ？たしかギリギリまで掛るとか言ってたか？」

そう一夏には特別に専用機が来ることになっているのだ

俺はもうあるし、仮だけど・・・本当の専用機はまだ造り中だからな

「俺が倉研に行つて手伝つてきたから」

「倉研つて倉持技研？よく行けたな」

「なに『ちんたらちんたらIS作つてんじゃねーよ！俺に任せな！』
つて言つたら協力させてくれたよ」

「そのセリフだけで開発スタッフ動かせるなんて・・・」

「ほらちやつちやつと終わらせるぞ。この後は筭の訓練（お仕置き）
だぞ」

「・・・おっ」

そんなにトラウマか、最後声がすごく小さかったぞ

合掌しておこう、心の中で

それから

「よし、あとは実戦形式で教えるだけだな」

「そういえば霧人は専用機を持つてるのか？」

「ああ、一応な」

「一応？」

「ああ、本当の専用機はまだ造り中なんだ」

「なんで？」

「武装は全部決まったんだがな？ISの姿と色、名前が決まらなくて」

「へへ、そうなんだ。霧人でもそんなことあるんだな」

「俺を完璧人とでも思っていたのか……。完璧な人なんていないだろうが」

「……そりゃそうだ」

「箒の訓練、頑張れよ」

「おう！」

自棄っぱい一夏君であった

お前のISを参考にするなんて言ったらお前は何ていうのだろうか
お前なら笑って許可するか

次の日、代表決定戦まであと三日

「これが……」

「お前の専用機、白式だな」

「……これが」

上は一夏、下は箒、真ん中はもち俺です

そう、一夏のIS『白式』びやくしきである

色は名前の通り白で所々に青も見える

「さて、早速乗ってみようか、一夏」
「おう」

一夏が白式に触る、すると待ってましたと言わんばかりに白式がキ
ュインと鳴った

「これが何なのか、どうすればいいかが分かる」

「・・・（普通、俺も一夏もISには乗れない、俺はコアに気に入
られたから乗れるが、一夏はそうではない・・・、ならなぜだ？分
からないな・・・まったく）」

「霧人、つけたぞ」

「お、なら早速移動してみようか」

一夏は俺が教えたとおりに移動および飛行を行う

「飛行は難しいな、ほんとに」

「意外と簡単だと俺は思ったがな」

「うわっ！霧人！いつの間隣に？」

「お前がのろのろと飛んでるから実際に飛びながら教えようと思っ
てな」

俺は打鉄・改を装着して一夏の横に並ぶ

「それが？」

「俺の仮の専用機、打鉄・改だ」

「打鉄って訓練機なの？」

「ああ、東さんからISのコアと一緒にもらったんだ」

「東さんから？いつ貰ったんだ？」

「中一の夏だな」

「そうなんだ・・・箒は知ってるのか？」

「いいや、知らないだろう。俺が専用機持ちっただけもな」

実際に驚いてるし

「さあ、本格的に練習するぞ」

「ああ！」

決定戦当日

「よし、あれだけ練習したんだ、ばっちりだろ？」

「ああ、行けるはずだ！」

「はずだ！じゃなくて勝て」

箒さんは言葉に棘があり過ぎだよ

好きっていうかむしろ嫌ってると思われるぞ・・・一夏限定で

ファーストシフト

「一次移行も済んでるし、あとは油断しないことだな」

「分かってるよ、行ってくる」

そう言っただけで一夏はピットから飛び出した

「あんなに浮かれた顔でよく言う・・・」

俺の呟きは誰にも聞こえなかった

「あら？逃げずによく来ましたわね」

逃げる？買った喧嘩なんだから逃げるわけないだろ

「最後のチャンスを与えますわ、泣いて謝れば許してあげてもいいですわ」

「警告！敵ISからロックされていますー

分かってる、霧人から聞いた通りセシリアは銃口を少し上にあげ俺に狙いを少しつけている

「泣いて謝る？そっちがするんじゃないのか？」

「いい度胸してますわね・・・なら！落ちなさい！」

言葉と共にセシリアが持っているライフルからレーザーが迫るがわかってるから回避は簡単だ！

「初撃を躲すとは、でもいつまで持ちますかしら？」

さらにレーザーを放ってくる、でも躲せる！

「あいつ、言ったことちゃんと覚えてるのか？」

いささか不安だな、ああまで浮かれてると

「ここまでやるとは正直思っていませんでしたわ」

「俺は、まだ本気じゃないぜ」

「それは私もですわ」

セシリアの専用機『ブルー・ティアーズ』これには名前と同じビツトと呼ばれる兵器がある

詳しい名前は難しくて憶えてない

セシリアはそれを展開する

「4つか・・・行けるな！白式！」

俺はセシリアに向かう

「あのバカ、忘れてるのか？」

ビットは4つではなく6つあるということ
を
白式・・・お前が頼りだ

「その程度か？」

俺はビットをすべて叩き落とした

「まさか・・・ここまでやるなんて・・・」

「勝たせてもらうぜ、俺は守りたいものがある、譲れないものがある」

「？何を言ってるんですの？」

「行くぞー!!」

俺はセシリアの放つレーザーを避けてセシリアの懐に入る

「かかりましたわね、ブルー・ティアーズは六機ありましてよ!!」

私の勝ちですわ!!目の前で爆発が起こる

接近され過ぎていたために少しシールドエネルギーが削れましたけどもついいですわね

「油断!!」

いきなり目の前の煙が晴れ彼がほぼ無傷で出てくる

「なっ！何でですか？」

彼は全身を黄色いオーラで包まれていた

「大敵！！」

俺は単一仕様能力『フソフ・ファビリティ零落白夜』をセシリアにあてる

あのビットが六機あることなんて最初から知ってた、でもわざと知らないふりをして油断するときを狙ってたんだ

セシリアに零落白夜を発動した雪片式型を、千冬姉の剣を直撃させる
こいつはシールドバリアーを無視してシールドエネルギーに直接攻撃をして絶対防御を発動させシールドエネルギーを一気に削ることが出来る

セシリアのシールドエネルギーが零になった瞬間

『勝者、織斑一夏』

俺に勝ちだ！！

「うっむ、はめられた、一夏の分際で」

一夏わざとだったか、気付くのに時間がかかったよ

「お疲れ、一夏」

「ああ、でも勝ったぜ」

「休憩時間は一時間だ。次は霧人とだぞ」

「分かってます。織斑先生」

一夏は最近ようやく織斑先生と呼べるようになった
まあ出席簿で殴られ続けりや嫌でも呼べるわな。呼べなけりやただ
のマゾだ

「一夏、お互い全力でな」
「もちろん」

俺はさっきセシリアがいたピットに向かう

「オルコット、何してるんだ？」
「私の勝手ですわ」

ピットに行くといまだにセシリアがいた
俺はお構いなしに打鉄・改の様子を見始める

「守りたいものがあると強くなれるのですか？」

いきなりセシリアにそんな質問をされた

「・・・そうかもしれないな、一夏はだから強いんだろうな」
「あなたは、あるのですか？守りたいもの」
「・・・ない、俺は何もない」
「誇りや家族も？」
「ああ、ない。俺にあるのは強くありたい。それだけだ」
「そう・・・ですの」

それだけ聞くとセシリアはピットを出て行った

「守りたいもの・・・か。俺は・・・どうなんだろうか」

当てはまるのか？特に考えたことがないから分からない

「箒は・・・どうなんだろうか」

つい聞こえてしまった。どうとはなんだ？

私は自分の行動がいまいち理解できてない

気が付くと霧人がいるピットに来ていた

セシリアと何かを喋っていた後にいきなりさっきの言葉が聞こえたのだ

何故だか顔が赤くなるのを感じていた

それを押さえるのに相当時間がかかったのは箒だけの秘密である

「気をつけるよ、霧人」

「おう、ありがとな」

霧人はそれだけ言うとピットを出て行った

とても嬉しそうな顔だった

それほどに私を好いてるのか・・・？いかん、また顔が・・・／

「さて、やるか！一夏」

「いくぜ！霧人」

二人して近接ブレードを手に持つ

「行くぞ！！」

二人同時に動き鏢迫り合いを始める

一旦離れて一夏が大きく振りかぶり縦に振るが俺は身体を少しずらすだけで躲す

隙が出来た一夏に斜めにブレードを振るが一夏も後ろに下がって躲す

さらに接近してまた鏢迫り合いを始める、何度も繰り返した

「さすがだな一夏、剣道をやっていただけある」

「それを言ったら霧人だって剣道をやったただろ？」

「そうだけでもよ、一週間でここまでできるのはすごいよ」

俺も一夏もシールドエネルギーはそこまで減ってない

「これで終わりにするぜ、霧人」

一夏は零落白夜を発動させる

なら・・・全力出しますか

「昇華した剣術『絶刀』みせてやろう」

「昇華した・・・剣術？」

「そうだ、剣術は剣道と違いルールがない。つまりは何をしてもいい、それはただの暴力だと思わないか？」

「・・・確かに」

「俺の家、雨裂はその剣術を剣道へと昇華させた、だが根本は変わらず剣術のままだ」

「暴力をなくした剣術ってことか？」

「そうだ、雨裂流『絶刀』いつまで耐えられるかな？」

「俺をなめるなよ、いくぜ！」

一夏はそのまま突っ込んでくる

「『絶刀』一閃！」

素早く強くブレードをふるう、雨裂25代目当主であり歴代最強とまで言われた俺の剣は音速に近い！

一夏は全くついて行けずに吹っ飛ばされる

「ぐっ！速すぎだろ！？」

「歴代最強と謳われた俺の最速の一閃だぞ？見切られるはずがない」

最初の閃である一閃は閃の中でも一番速い攻撃だ

これ以降の閃は数と威力で決める技だ

「まだ、始まったばかりだぜ！一夏！」

「負けるわけにはいかねえ」

一夏、お前が何を思い何を背負うかは知らない、だがとても重いものであることぐらいは分かる

だがな、俺も負けるわけにはいかない、当主は最強であれ、これを破るわけにはいかない！！

「『絶刀』二閃」

「くそっ！」

間近まで来た一夏に二閃するが、速さはさっきより遅いため回避された

「振った時に風が切れる音がするなんてどんな力だよ」

「生まれて最初に握ったのが日本刀だぞ？お前とは、振るっていたものが違う」

「（くそっ、何とか懐に入って雪片が当たれば）」

「（このブレード・・・持ってくれよ！）『絶刀』三閃」

「なっ？斬撃が飛んできた？」

突然の事に一夏は対応できずさらにシールドエネルギーを減らす

「やはり、このブレードでは、もう無理だな」

「斬撃が飛ぶなんてありかよ？」

「だから、歴代最強なんだよ」

「生身でもISに勝てるんじゃないか？」

「出来ないことはないかもな」

いかん、マジで出来そうな気がしてきた

「さすがに、もう斬撃は飛ばせないから安心しろ」

「安心できないだろ、まだ」

おっと、気付いてたか、残念

「「行くぞ」「」

二人して接近して鏝迫り合い、しかし

「おらっ！」

「おっ？」

一夏は自分のブレードを斜めにして俺のブレードを受け流した

「もらったー！！」

一夏の攻撃が俺に当たる

「やった！・・・！？」

「スベクトルブースト
残像加速」

一夏の目の前にいた俺の姿が消えて俺は一夏の後ろに出現する

「!?!」

一夏はすぐさま後ろの攻撃しようとするが

「エターナルイグニッション
無限瞬時」

俺は一夏の・・・いや、この戦いを見ているすべてから消える
スペクトルブースト エターナルイグニッション
残像加速及び無限瞬時

これらは俺が中学の時に編み出した移動方法

残像加速は細かい動きをその場でして残像を作る、その直後瞬時加
スト
速で相手の背後に回ること成功する

無限瞬時は瞬時加速を常時し続ける操縦者の身体を壊しかねない危
イグニッションブースト
険なものだ、でもこの打鉄・改はこれをして問題ないように改造
してある

「どこだ？ハイパーセンサーが捉えられてない・・・」

困惑しているな一夏

悪いがこれで終わりだ

「・・・?ぐつ!?!?うわあああああ!?!」

俺は無限瞬時のまま一夏をブレードで刻み続ける

一夏のシールドエネルギーが零に近づいたとき俺は無限瞬時を止め
一夏の前に移動する

「ぐつ、はあはあ、え?」

「『絶刀』一閃」

『勝者、雨裂霧人』

わああああああああああああああ
パチパチパチパチパチパチパチ

観客席にいた一年全員が拍手などを送って来た

「一夏？大丈夫か？」

「ギリギリで・・・」

「ならいいや、帰ろうぜ」

「そうだな」

次の日

「クラスの代表は織斑君に決まりました。一つながりでいいですね」

なんで俺じゃないかって？めんどくさいし候補した理由が一夏に押し付けるためだしね

「先生、勝ったのは霧人なのにどうして俺が代表に？」

「俺が辞退した以外に何があるよ？」

「なんで辞退したんだよ？」

「めんどくさい！」

クラスが一斉にこける

「めんどくさいって、それだけ？」

「あと一夏がこれを期に強くなるように」

「それを最初に言え！」

「だが、断る！！」

「なんで？」

「だってさっき思いついたから」

「・・・」

「そういえば、一夏のクラス代表おめでとうパーティーみたいなものやる？」

「やる、やる〜〜」

「もちろんだよ〜」

女子たち大興奮、男子の一夏君のテンションはダークブルー

俺？俺は中間の色で

どんな色か？皆さんにお任せします

授業中

「今日はISの基本的な飛行を実践してもらつ。織斑、オルコット、雨裂やれ」

「「「はい」」」

俺とセシリアはすぐに展開する

俺は0.4秒セシリアは0.6秒

一夏は少しもたついている

「さつさと展開しる馬鹿者」

「つつ、はい・・・」

一夏も展開する

「では、飛行を始める」

三人して一斉に飛び立つ

「織斑！遅すぎだぞ！スペックはブルーティアーズより白式の方が上なんだぞ」

「そうは言ってもいまだにイメージが出来ない・・・」

「一夏さん、自分が描きやすいイメージを浮かべるのが一番ですわ」

セシリアに教わっている一夏・・・俺の説明ではだめだというのは・・・そうか、そうか

「三人とも！降りて来い、急降下と急停止をつかってな。目安は地面10センチまえだ」

まずはセシリアがお手本と言って急降下、急停止をして見事10センチで止まった

「雨裂、出来るギリギリで止まれ」

「なんだその要望は・・・」

小声のため一夏にしか聞こえない

若干高度を上げて一気に降下する、地面にぶつかるほんの0.1ミリで止まった

はっきり言ってよく見ないと地面についてるようには見えない

「やり過ぎたようだ」

織斑先生の呆れた声がする

「織斑、来い」

一夏は勢いよく降下して

地面に当たる瞬間俺は一夏の両足を払い、背中に膝蹴りを喰らわす

「ぐおおお」

「グラウンドにクレーターを作る気かお前は？」

さっきの勢いでは確実に止まらずにグラウンドに突っ込むところだった

「やれやれ、今度は、武装を展開しろ」

俺は0.2秒で近接ブレードを展開する

一夏は0.5秒セシリアは0.4秒で展開する

「オルコット、お前は前の敵ではなく隣の味方を撃つ気か？」

「こっこれは、イメージするのに大切に」

「治せ」

「・・・はい」

相変わらずの威圧感だな

「オルコット、近接武器を展開しろ」

「はっはい・・・」

セシリアは近接武器の・・・インターセプトを出そうとするがなかなか展開できない

「まだか？」

「うっ、インターセプト！」

これは初歩の初歩の武装展開の仕方である

「何秒かけるつもりだ？戦闘なら、負けるぞ」

「懐に入らせなければいいことですわ」

「初心者の織斑に懐に入られただろ」

「うっ・・・それは」

セシリアは一夏を睨んでいた

まったく、騒がしいことで

これからさらに騒がしくなることを霧人は知らない

「ふん、ここがそうなんだ」

IS学園ゲート前。小柄な身体の少女が、その身に似つかわしくない大きなポストンバックを肩から提げて立っていた。左右それぞれに高い位置で結んでいる髪を夜風に揺らせながら、少女はくしゃくしゃの紙を上着のポケットから取り出す。

「本校舎一階総合事務受付・・・どこにあんのよ？」

ぶつくさ言いながら、取り敢えず少女は足を動かす。ここで悶々悩んでいるよりも自分で探した方が速いと判断したのだ。

結果、

「もっと迷っちゃった・・・」

宛てもなく歩き回っている内に本気で迷子になってしまった少女。キョロキョロと周囲を見回してみるが、一度も来たことがない場所なので目印など見つからない。

「はぁ……。ま、いつか。こんだけ奥に来れば誰か一人くらい通り過ぎるでしょ。その時案内してもらおう」

少女はポストンバックを床の上に置き、その上にちょこんと腰を下ろした。

(そう言えばあいつ、元気かな)

ふと、そんな考えが胸中を過ぎった。あいつとは、二人目の男性IS操縦者として全世界に報道された黒髪の青年のことである。その青年がテレビに出てきた時、少女は本気で飲んでいた飲茶を噴き出した。

「……だから……でだな」

ふと、遠くの方から声が聞こえてくる。視線を向けると、複数の生徒達がIS訓練施設から出てくるのが分かった。

「(丁度いいや。場所聞こつと)」

ポストンバックを肩にかけ、少女が声をかけようとする時、

「だ〜から、そのイメージってのが分らないんだよ」

男の声。自分が一番聞きたかった男の声。

「そんなこと言ってもなく、お前のイメージはお前だけのものだから人から教わっても分からないんだよ。だから、鬼ごっことかやってんだろっか」

「まあ、それのおかげで前よりはよくなったけど」

予期せぬ再会に高まる鼓動。少女は一旦心を落ち着かせるために歩みを止めて深呼吸。数回深呼吸を繰り返して、再び視線を向ける。そこには、今まで一度として忘れたことのない、艶やかで、流れるような黒髪があった。

（私だって分かるかな？まあ一年ぐらいしか会わなかっただけだし分かるでしょ！ついでに知らない男の声がするけど）

何の根拠もない、でも絶対の信頼がある確信を胸に抱きながら声をかけるために息を吸い込んだ瞬間

「私の説明でなぜわからないんだ？一夏」

「そうですね、あれだけ丁寧に教えたというのに」

（え、誰あの二人？）

さっきまで痛いほどに高鳴っていた鼓動は急速に落ち着いていき、酷く冷たい感情が胸中に湧き上がってきた。

その後、少女はすぐに総合事務受付を見つけた。

「ええと、これで手続きは全て終了です。IS学園へようこそ、フア凰
ン・リンイン鈴音さん」

少女、鈴音は受付嬢の笑みを無視し、受付に身を乗り出すように身

体に乗せた。

「あの、織斑一夏って何組ですか？」

「ああ、あの噂の子？ 一組ね。鳳さんは二組だからお隣さんね。そういえば、もう一人の男のはクラス代表になれたのにそれを織斑君に譲ったんだって」

そんな噂に興味はない、とでも言いたげな表情で鈴音は質問を続ける。

「二組のクラス代表って決まってるんですか？」

「決まってるけど・・・聞いてどうするつもり？」

受付嬢の問いかけに鈴音は薄い笑みを浮かべた。その額にしっかりと血管を浮かび上がらせて。

「お願いしようと思って。友達を驚かせたいから、代表を譲って・・・」

「なにか、めんどくさいことが起きる予感」

「誰にいつてるんだ？霧人」

寮内である

「明日以降絶対面倒事が増える」

「何を根拠に？」

「勘？」

「なぜ疑問形なんだ？それに勘って」

相変わらず同居人は箒のままである

一夏は一人部屋らしい

「そういえば、霧人」

「どうした？」

「私の説明はいまいち理解できないのか？」

「だって擬音ばかりじゃん。箒は自分の感覚をストレートに言いききなんだよ」

「そうだったのか・・・」

「そういえば、シャワーあびたのか？俺の使用時間だが」

「あっ・・・忘れてた」

「やれやれ、先入れよ」

「すまん・・・覗くなよ？」

「のぞかねーよ」

よく考えれば一夏の部屋でシャワー浴びればいいんじゃないかね？俺というわけで一夏の部屋でシャワーを浴びて就寝しました

クラス代表決定戦（後書き）

こんな感じですよ

ありがとうございました

完成した『緑』（前書き）

今回はクラス代表戦の少し前から代表戦までです
今回ついに霧人の専用機が出てきます
どうぞ

完成した『緑』

「ねえ聞いた？二組に転校生が来たんだって」

「こんな時期に来るなんて少しおかしいよね」

女子たちが何やら騒がしく噂話をしている

「転校生ね」

「どんな奴だろうな？」

「一夏よりは強いだろうな」

「霧人さん？それは私より強いと言ってるのですか？」

「セシリアの場合、一夏は零落白夜のおかげで勝ったからな、普通に戦えばセシリアの方が強いだろ？」

「まあ、そうですね」

何て話をしていると

「一夏、他のクラスの女子の事なんか気にしてる場合か？」

「箒、そりゃそうだけど」

「代表戦までそう時間がないのだぞ？」

「分かってるよ、それは」

箒が加わってきた、最近はこの四人でいることが多い

「でも、専用機持ちはうちと四組だけでしょ？」

「そうそう、なら楽勝だって」

うちの女子は楽観的だな、なんて考えてると

「その情報、古いよ」

いきなり、ドアの方から声が聞こえた

そちらを見ると背は低め、髪は茶でツインテールにしてる女子がいた

「二組の代表、さらに中国の代表候補の鳳鈴音ファンリンインあんた達一組に勝ち
は渡さないわ!!」

何てかっこつけて言い放った

「鈴？お前鈴か？」

「一夏、お前の知り合いか」

一夏は一瞬こつちを見てうなずきさっきの転校生に顔を戻す

「何やってんだお前、全然似合っていないぞ」

「なっ！うるさいわよ」

「おい！」

後ろ！後ろ！志村後ろ！

「なによ！」

スパアアン

「ち、千冬さん」

「ここでは、織斑先生と呼べ、もうショートの時間だ」

「は、はい。一夏後で待ってなさい」

やれやれ、面倒事の原因はあいつか

ちなみにその後の授業で、なぜかぼけーとしていたセシリアと箒が織斑先生に叩かれていた

「お前のせいだぞ！一夏」

「そうですねよ！責任とってもらいますわよ」

「なんでだよ・・・」

「今日来た転校生の・・・鈴音だけか？あいつの事だろうよ」

話しながら食堂に向かう

食堂に着くと

「待ってたわよ！一夏」

鈴音がラーメンを持って立っていた

「何してんだ鈴？ラーメン伸びるぞ」

「わ、分かっているわよ、まったく」

やれやれ、隣の二人が若干怖いんですけど

「一夏！そいつとはどんな関係だ！」

「そうですね！も、もしかして付き合っているんじゃないんですの！？」

「えっ、べ、べつに」

「そうだよ、ただのセカンド幼馴染だよ」

「なに？セカンド幼馴染？」

聞きなれない単語でございませぬ、一夏殿

「箒は、ファーストだし、鈴は小四の時から仲だから」

「一夏、それは幼馴染じゃなくて友達だろうか」

一夏・・・お前の思考回路が良くわからん

「そういえば一夏、あんたクラス代表になったんでしょ」

「おう、成り行きだけだな」

「ならば、私が教えてあげようか？」

「その必要はない（ですわ）」

「うるさいな、あんたら誰よ？」

「私は一夏の幼馴染の篠ノ之箒だ」

「私はイギリス代表候補のセシリア・オルコットですわ」

「だから？私は一夏に聞いているんだけど」

「うーん、鈴ありがたいんだけどもう間に合ってるんだ」

「そ、そう？一夏がそういうならいいけどさ」

・・・俺空気！！寂しいよこれマジ

「そっいや、あんた誰？」

「うん？ああ、俺は雨裂霧人、見ての通り男だ」

「ふーんそう、あつもしかして一夏に教えてるのってあんた？」

「そうだが、それが？」

「ならば、変わってよ」

「・・・クラス代表戦が終わるまでは敵だろ？敵に教えを乞わせるわけにはいかないな」

「・・・言うわね、あんた」

「いや、クラス代表戦後なら教えるの参加してもいいよって事だから」

「・・・そう、ならいいわよ」

俺と鈴音は少し不気味に笑う

その後俺は注文してた日替わりランチをものの数分で食べる

第三アリーナにて

「一夏、大分操作慣れてきたな」

「さすがにこんだけやってたらな」

「一夏」

鈴音の声が聞こえたのでそちらを見るとやはり、鈴音がいたしかも、専用機『甲龍』（シェンロン）に乗っている

「ここは関係者以外立り禁止だぞ！」

「わたし関係者だし」

筈が吠えるも鈴音はあっけらかんと言い返す
まあ確かに一夏の関係者だな

「それがあなたの専用機なのね分かったわ」

それだけ言うと鈴音は帰って行った

「何がしたかったんだあいつは？」

「ISの見せ合いつこだろ」

「寮内にて」

「いつも誰に言ってるんだ？」

俺の呟きに筈は毎回対応する

「暇なのか？ 篤」

「なんでそうなる？」

「俺のどうでもいい呟きにツッコムんだから」

「こつちを向いて話すからだ」

気が付かなかった

「そういえば隣が騒がしいな」

「一夏の部屋だな」

よく耳をすます

「なんで約束覚えてないのよ！！」

「覚えてたろ！ なんでおこるんだよ」

「意味が違うのよ！ 意味が！」

あまりにうるさいので部屋から出て一夏のところに行こうとしたところいきなり鈴音が体当たりしてきて俺たちの部屋に入ってきた

「な、なんだ？ いきなり」

「いきなりすぎて俺にも分からん」

鈴音は泣いていた

とりあえず泣き止むまで待つことにしてお茶を淹れた

「・・・あれ？ なんであんならがいんの？」

「俺たちの部屋だが」

お茶を渡す

「あれ？おかしいな」

「気が動転してたんだろ」

「・・・なんで男女で相部屋なの？」

「知らないぞ、そんなこと、でもお前も同じことしようとしたんじゃないのか？」

「そうだけど」

「そういえば、約束がどうか言ってたが」

俺が言うと鈴音の肩がビクッと震えた

「私が中国に戻るときに言ったのよ、私の酢豚を毎日食べてくれる？って」

「告白したわけだ、で朴念仁の一夏はそれをおごってくれると勘違いしたと」

「そうよ」

そうなんだ後半適当なのに

「それで頭に来て逃げたと」

「そう・・・」

まったくあいつの鈍感さにはあきれるな

「めんどくさいのを好きになっただな」

「そう思うわ」

話を聞いてもらえたからすっきりとした顔になった鈴音は

「ありがとう、私の事は鈴でいいわ」

と言って戻って行った

「代表戦当日である」

「なんだ？それ」

一夏に突っ込まれました

「切り替えて、さあ一夏頑張ってい！！」

「おう、いつてくるぜ」

一夏は気が付かなかったようだ

俺の手に付けてるグローブの色が『緑』であったことを

「さあ鈴、張り切って行こうぜ」

「そうね、ボッコボコにしてやるわよ」

「その前に、鈴、すまねえ」

「なあ何を急に」

「約束の事とかをな」

「いいわよ、分かった、許してあげる」

「サンキユ、じゃあいくぜ！！」

俺は負けねえ、絶対に勝ってやる

霧人が言うには鈴のISには衝撃砲と呼ばれる武装があるらしい
こいつは相当強力で喰らうわけにはいかない
厄介なのは銃弾も銃身も見えないことだ

「いくわよ！一夏」

鈴は両肩の比固定浮遊部位を少し傾ける
来る!!!

俺は即座に右に回避行動をとる
その後さつき俺がいたところを風が通り過ぎる

「へえこれを躲すなんてやるじゃない、一夏」
「次はこっちの番だ」

俺は鈴からの攻撃を避けつつ距離を詰める
鈴は距離を詰められないように攻撃をするがセシリアとの訓練で回
避行動はばっちりだ
いつきに距離を詰めた

「しまった」
「もらった!!!」

攻撃が当たる瞬間、アリーナが大きく揺れた

『なッなんだ!?!』

全員が驚きの声を上げる

「山田先生!あの煙の中は?」
「今調べてます!」

緊張してるのか声が少し震えている
俺は、アリーナを凝視し続けている

すると煙からビームが一夏達に向けて放たれた

「何て出力のビームだ!？」

「あれは……IS?」

煙が晴れるとそこには二メートルほどの大きさの黒いISが立っていた

「織斑先生!俺たちに発進許可を！」

「無理だ、ロツクがかかっている」

くそっ!あいつらだけで勝てるのか?

「なんなのよ?こいつは！」

「俺が知るかよ!？」

何だこいつは!?!いきなり出てきていきなり攻撃してきやがった

「一夏!なにぼけーとしてんのよ」

「わるい……?」

攻撃してこない?俺たちの会話を聞いているのか?あいつはしかも、こいつの動作は人間とは思えない

「なあ鈴、もしかしてだがあれって人乗ってないんじゃないかな」

「はあ?そんなわけないでしょ、ISは人がのってないと動かないわよ」

「でもあの動きは人の動きとは思えない」

「確かにそうだけど」

なら、やりようがある

「鈴、あいつに向かって衝撃砲を全力で撃ってくれ」

「あいつに効かないの？」

「ああ、それでも構わない」

鈴が衝撃砲のチャージを始める

「いつでもいいわよって何してんのよ？」

「いいから、放て！」

鈴の前に移動し指示をだす

知らないわよと言って鈴は衝撃砲を放つ

その勢いに乗って俺は瞬間加速イグニッションブーストを使う

いつきに接近して零落白夜でISを思いつきり斬る

攻撃はISの右腕と体の一部を削ったが

ISは左手で俺を殴り飛ばした

「ぐわっ！」

「一夏！」

「大丈夫だ」

これで・・・

警告、敵ISにロックを受けています

「なっ！？」

ISの方を見ると極太のビームが迫っていた

「くっ」

突然の事に目を瞑ってしまった

「『秘技』千迅」

ビームを一気に切り裂き奴の左腕を斬撃で切り刻んだ

「・・・あれ？」

「無事か？一夏」

目の前に『緑』があつた

ISを見ると両腕がなくなり完璧に撃沈していた

「霧人・・・それは？」

俺の白式にそっくりでというか、色以外白式だ
色は薄い緑色である

「おれの本当の専用機、『緑式』（りよくしき）だ、お前の白式の
パクリだ」

「さっきの技は？」

「雨裂流『秘技』千迅、俺が開発した技だ」

「すげー威力」

「そりゃな、一閃の速さで刀を千回振るう技だ、木刀で鋼鉄斬ること
ができる」

「霧人の実力でだろ」

「というか、俺以外誰もできなかった」

何て話をしているうちに先生方が奴を回収していた

「結局なんだったんだか」
「ううむ、さっぱりだ」

次の日

「なんで鈴がここに？」

「霧人が代表戦後訓練参加していいって」

「霧人さん！！」

「いいじゃないか、別に」

訓練に参加するぐらい

「鈴は中距離で尚且つパワータイプだから訓練させやすいんだよ」
「射撃なら私がいいますのに」

「セシリアは遠距離だから回避ぐらいにしか役に立たないんだよ」

ぐらいしか・・・とセシリアは遠い目になってしまった

「近接なら私が！」

「確かにそうだけど近距離専用の機体なんてそうはいないからな」
「ぐっ」

「だからいいじゃないか、鈴が加わっても」
「よろしく」

二人は沈黙だった

「そういえば、霧人、お前のIS緑式の装備は？」
「見せてやるうか」

IS名 緑式
武装

日本刀
あまのみちのしるし
天叢雲劍

レーザーライフル
やたのかがみ
八咫鏡

ソード&レーザービット
やさかにのまがたま
八尺瓊勾玉

「簡単に言えば全距離対応機だな」

「・・・すげーな」

「八咫鏡って言ったっけ？」

「ああ、ライフルだろ」

「名前の由来って？」

「装備を三種の神器に例えたときにそうなっただけだ」

「そうなんだ、なあ、この日本刀ってさ」

「俺の剣技に耐えられるようにしてある、前の近接ブレードなら千
迅は使えなかったからな」

「恐ろしいなホントに」

「さて、説明は程々に二対二の模擬戦をするか」

俺と鈴、一夏とセシリアでペアを組み模擬戦をした

結果は、一夏がセシリアの足を引っ張り俺たちの勝ち

次は、俺とセシリア、一夏と鈴のペア

ビットによるレーザーの嵐に手も足も出ずに一夏達敗北

最後に俺と一夏、セシリアと鈴のペア

「一夏！八尺瓊勾玉で攪乱させる、とどめをさせ」
「了解！」

「鈴さん！ああもう、じゃまですわ！」
「うっさいわね、あんたはビットでも出しておきなさいよ」

セシリア、鈴のペアは最悪でした相性が

「霧人、ほんとに強いな、全然勝てないよ」
「お前は近接だけだからな、俺は一閃から十閃さらに、千迅の斬撃を飛ばせるしな」

「でも、ほんとに霧人、あんた強いわね」
「なんであんなにビットを使いこなせるんですの？さらに操りながら移動や攻撃を出来るなんて」

「BT偏光制御射撃は使えないけどな」
フレキシブル

「寮「もういいぞ、それ」お早い突っ込みで」
止めよう、うんそうしよう

「そついえば、篝、あの答えまだ聞いてないが」
「・・・！」

あの様子じゃまだか？
でも最近の行動を見るに一夏の事をただの幼馴染として見ている気がする

「・・・」

「なに時化した顔してるんだ？」
「・・・ああ、羨ましいな・・・って」
「専用機が？」
「ああ、そうだ」
「姉に言えば作ってもらえるんじゃないか？」
「・・・そうなのだが・・・」

沈黙が続く

「切り替えよう、聞きたいことあるか？」
「・・・そうだな、姉さんとはいつ会ったんだ？」
「中一の夏だ」
「その時に？」
「打鉄とISのコアをな」
「なんでISに乗れる？」
「ISのコアあった人格に気に入られた」
「ISのコアの・・・人格？」
「そう、ISのコアの人格だ、初めて触った時にその人格と話をし
て気が合ってたな」
「名前とか・・・あるのか？」
「なかったから、二人でつけた、俺の名前をいじって、霧裂雨人っ
て決めた」
「雨と霧を変えただけか」
「ああ、それで同調して乗れるようになったわけだ」
「そうか・・・ありがとう」
「礼を言われることはしてない、お休み」
「ああ、おやすみ」

完成した『緑』（後書き）

こんな感じですよ

ありがとうございます

ついでに並行して書いているIS 天才以上完璧未満もよろしく

大騒動？いつもの事だ（前書き）

今回は普通の授業と転校生のお話
どうぞ

大騒動？いつもの事だ

ロッカールームにて

「なあ霧人」

「どうした？一夏」

次の授業がISの実習なため着替え中です

「このISスーツさ、着替え辛くないか？」

「言えているな、毎朝、毎朝大変だよ」

「・・・毎朝？」

「ああ、ほら」

「制服の下に着てんのか」

「その方が楽だぜ」

「ふうん、そうか」

「一夏、早くしないと遅れるぞ」

「わ、分かったよ」

ギリギリだったと言っておこう

俺はもたもたしていた一夏を結局おいてきた

一夏は結局出席簿アタックを受けていた

「今日は、専用機持ちで一対一対一をやってもらっ」

ええ〜めんどくさい

ブン！ バシっ！

「チっ！文句は受け付けんぞ！」
「なにも喋ってません！」

俺は出席簿を白刃どりで止めている
てか、舌打ちしたよ！？教師がそんなんでいいの？

「織斑、雨裂、オルコット、鳳。早くしろ」
「」「」「はい」「」

全員で展開して、浮上する

「雨裂君のISって、織斑君のと似てるよね」
「色と武装以外同じだもんね」
「静かに見てろ、お前ら」

織斑先生の一言でみんなが一斉に黙る

「霧人さん、今日こそ勝たせてもらいますわ」
「そうよ、あんたの無敗伝説ここで砕くわ」
「だてに訓練はしてないぜ、霧人」
「すでに・・・三対一が確定しているのはなぜだろう・・・」

泣きたくなってきたよ
いいのか？織斑先生？・・・え？構わない・・・
死亡フラグだよ・・・立ったよこれ

「貴様らに負ける気などしないわ！ふははははは！」
「」「」「自棄になった！？」「」

俺は、三種の神器を展開する

ちなみに八尺瓊勾玉は右肩、左肩に浮いているブースターの中と背中
中の腰あたりについている

普段はブースター替わりになっている、展開してもその下にブース
ターがついてるので機動力が下がることはない

右肩にある勾玉はレーザーライフル仕様で左肩にあるのはレーザー
ソード仕様、腰についてるのはシールドエネルギーを必要としない
シールド仕様なので防御面は完璧なのだ

ソード仕様は天叢雲剣に装着することで天叢雲剣の強度、切れ味を
あげることができる

俺に負けはない！！ふはははははは 相当自棄

「げっ！いきなり全武装展開した!?!」

「うそっ！そんな高度な技が出来るなんて!」

「自棄とは恐ろしいですわ!」

「いくぞ!」

俺は一夏に狙いをつけて一気に接近する

「くそっ!」

「はああああ!」

俺は一夏と鏝迫り合いをしながらライフルビットをセシリアへと向
ける

鈴が衝撃砲が放ってくるがシールドビットは俺の千迅10回分耐え
られる代物だ、ちょっとやそつとじゃ壊れやしないぜ

俺は、ソードビットを天叢雲剣に装着する

「えっ？霧人、何だそれ？」

「見ての通り、刀にビットを装着しただけだぜ？」

「そんなこと出来るのかよ？」

「出来るからやってる」

いまだに少し茫然としている一夏を蹴飛ばす

俺のライフルビット六基に翻弄されているセシリアに近づくと

「くっ！霧人さん！霧人さんは何でビットの扱いがここまで上手な
んですの！？」

「イメージだ、イメージ」

天叢雲剣に装着したビット三基を外しセシリアに向ける

ソードビットに対応できずシールドエネルギーを削られたセシリア
を思いつき蹴飛ばす

最後は、いまだにシールドビットに苦戦している鈴に近づくと

「くっ！霧人！このビット何なのよ！」

「シールドビットだが？」

「違うわよ！分かってるわよそんなこと！何でこんなに固いのよ！」

「盾が脆かったら意味がないだろ」

「そうだけでも！」

「いいから、お前も落ちろ！！！」

ライフルビットで動きを止めさせソードビットで青龍刀を無効化し
て蹴飛ばす

三人とも同じ場所に吹き飛ばす

そう、地面に一夏が下で鈴が一番上のサンドイッチ状態になった

「ふん！三人で来るからそうなる」

「雨裂・・・やりすぎだ・・・」

織斑先生はあきれていた

「いたたた」

「霧人、容赦なさすぎ」

「だから、お前らが悪い」

食堂で三人から非難の声が上がったがあれはこいつらが悪い

「俺はむしろ被害者だ、なあ箒？」

「うん？・・・ああそうだな」

「箒さん！裏切りましたわね！」

「いや・・・裏切ったも何もないだろう」

箒に同感だ

寮内

「ふむ、こんなところか」

「ありがとうな、霧人」

箒に勉強を教え終わったところだ

「しかし、霧人は相変わらず頭がいいな」

「まあね、義母さんから勉強は欠かすなと言われてるから」

「なあ霧人」

「どうした？真剣な顔をして」

「お前の両親はあの白騎士事件で死んだとニュースであつたよな」

「・・・ああ、そうだな」

箒は俺と反対側を向いて話しているからどんな表情かは見てとれない

「私は白騎士を開発した・・・」
「その先は言わなくてもいい、お前が誰の妹だろうと関係はない」
「・・・だが」
「お前がISを開発したわけではない、お前が母さんたちを殺したわけではない」
「・・・」

うつむいていた顔を箒は上げたがこっちは相変わらず向かなかった

「それに俺は束さんからの謝罪も受けたしな」

「・・・いつだ？」

「ようやくこっち向いたな」

「・・・」

「事件の次の日、病院でな」

「・・・それで？」

「・・・許したよ」

「!・・・なんで・・・なんで許せる!!」

「・・・最初は許せなかった、親殺しとして謝罪だけで済むものか
と思ったよ」

「だったらなぜ!!」

「避難区域にもかかわらずあの場所にいた俺たちも悪かった、それ
に向こうも殺す気があったわけではなかったわけだしな」

俺は箒を見る、箒は怒りと驚きの表情をしていた

「ただ運がなかった、俺はその時の束さんの顔を見たらなぜかそう
思ってしまった」

「・・・なぜ・・・？」

「わからない、・・・俺はそれが今でもわからない」

箒は若干納得できない顔をしていた

「そついえば、箒お前は束さんの事どう思ってるんだ？」

「……!?!」

箒は聞かれたくないことを聞かれたを言わんばかりに顔を歪めた

「……あの人はいつも身勝手だ」

「言えてるな」

「勝手にISを造って勝手に事件起こして、勝手にいなくなる」

「……」

俺はただ箒の言葉に耳を傾けていた

「私たちは、勝手に重要保護プログラムなんてもの勝手に決めて日本中転々と移動させられ

そのうちに母さんの心は壊れてしまった!」

「……」

箒は過去を思い出したのか、声が涙ぐんできた

「それにこの学園に来たのもあの人の妹と言うだけでだ!」

箒は泣き始めてしまった

「あの人の……あの人のせいで……私たちの人生は滅茶苦茶だ

!?!」

俺は叫んだ箒を抱きしめた

「……！？霧人？」

「……それでも、お前の大切な家族じゃないのか、確かに、人生が変わったかもしれない、つらい目にもあったかもしれない。それでもお前と血のつながった姉妹だろ？」

俺は、箒の頭をなでる

「……ちなみになぜこんなことしてるんだらうと心の中で思い顔は真っ赤だ

「それに……これはお前たちに失礼かもしれんが、重要保護プログラムのおかげで俺は箒に会えた」

箒の肩が一瞬ビクッと動く

「……」

俺は何をしゃべっていいのか分からなくなり、箒をただ抱きしめて、頭を撫でていた

「……ありがとう」

「……おう、……すまん」

「あやまるな」

「そうか」

「……会話が続かない！！恥ずかしい！さっきの事が

「……ねよう」

「そうだな」

俺はすぐさま布団をかぶり、眠りについた

「・・・ありがとう、霧人」

箒の咳きは箒にしか聞こえてなかった

次の日

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！しかも二名です！」

「は・・・？」

「「えええええっ！？」「」

いきなりの転校生紹介にクラクラス中が一気にざわつく

それも仕方ないだろう。この時期に、鈴のときだって騒がれたのに、また転校生だ

つか、何故二人も？分散させるよ

「失礼します」

「・・・」

クラスに入ってきた二人の転校生を見て、ざわめきが止まるでも仕方ない
だって、そのうちの一人が

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします」

男子だったからだ

「お、男・・・？」

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を

」

うーん？なんだろう、動作が・・・変だ、男らしくない

「きゃ・・・」

「はい？」

「きゃあああああ　　っ！」

女子の歓喜の叫びが響きわたる

危なかった。耳を塞いでなかったら鼓膜が破れてたんじゃないか？

「男子！三人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「地球に生まれて良かった～～！」

やかましいから黙れ

他のクラスの迷惑だろうが

「黙れ、騒ぐな。静かにしろ」

織斑先生の一言で一気に静かになる

静かになったところで今度は沈黙が広がる

全員の視線はもう一人の転校生に向けられている

沈黙の理由はそれだけではない

その転校生の雰囲気がかかり重い

身長はデュノアと比べてかなり差があるが全身から放つ冷たく鋭い

気配がまるで同じ背丈であるかのように見えてしまう

「・・・挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

千冬さんの言葉は素直に聞く転校生
教官？

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も
一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

どうやら、千冬さんはあの転校生と知り合いみたいだな
転校生はこちらを向き

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

の一言だった

「あ、あの、以上・・・ですか？」

「以上だ」

できる限り笑顔でボーデヴィツヒに聞く山田先生だが、その一言に
撃沈

「！貴様が」

ん？ボーデヴィツヒがつかつかと一夏に向かって行くぞ？

バシッ！　ちなみにこの音は俺が転校生の腕を止めた音だ

「・・・何をする？」

「それはこちらのセリフだな、いきなり人をたたこうとするとは」

いきなりだった。しかも無駄のない平手打ち。だが、なんとなく敵意を感じたため先に行動した

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

さっきまで黙っていたのが嘘のように一夏に罵倒している

さすがの俺もこれにはかなり驚いた

「いきなり何しやがる！」

思考が回復した一夏はボーデヴィットに文句を言う

「ふん・・・」

ボーデヴィットは何事もなかったかのように一夏の前から立ち去って空いている席に座ってしまう

「まったく貴様らは・・・ではHRを終わる。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でIS模擬戦闘を行う。解散！」

・・・いや織斑先生どう考えても貴方がらみの問題だったでしょうに

「おい織斑、雨裂。デュノアの面倒を見てやれ」

了解しましたよ

「君たちが織斑君と雨裂君？初めまして。僕は」

「ああ、いいから。とにかく移動が先だ。女子が着替え始めるから・・・霧人！なんで先に行こうとしてんだよ！」

ちっ！バレたか

「なにしてる早く来い」

「ええ、俺が悪いのか？」

と文句を言いながらデュノアと一緒に走ってくる一夏

「とりあえず男子は空いているアリーナ更衣室で着替え。これから実習のたびにこの移動だから、早めに慣れてくれ」

「う、うん・・・」

「一夏、とりあえず手を放してやれ。それじゃあ階段で転ぶぞ」

階段を見えた辺りから一夏にそう言う

本当に転ばれたら面倒だし、速度も落ちる

それだけは避けたい。なぜなら

「ああっ！転校生発見！」

「しかも織斑君、雨裂と一緒に！」

そう、HRが終わったからだ

こいつらに捕まったら最後、質問攻めのおかげく授業に遅刻、鬼教師の特別カリキュラムが待っている。一度経験したからな・・・それだけは絶対に嫌だ

「いたっ！こっちよ！」

「者共！出会え出会えい！」

くそっ、いつもよりしつこいんじゃないか？
つか、さっきよりも増えてるし

「織斑君や雨裂君の黒髪もいいけど、金髪っていうのもいいわね」
「しかも瞳はエメラルド！」

「日本に生まれて良かった！ありがとうお母さん！今年の母の日は
河原の花以外のをあげるね！」

なんで河原？そっちの方が面倒くさいだろ
っ！かもっといいもん買ってやれよ

「な、なに？何でみんな騒いでいるの？」

「・・・男子が俺たちだけだからだろ」

「・・・？？」

俺の言葉に首を傾げるデュノア

「いや、普通に珍しいだろ。IS操縦できる男って、今のところ俺
たちしかいないんだろ？」

「あっ！ ああ、うん。そうだね」

「それとアレだ。この学園の女子って男子と極端に接触が少ないか
らウーパールーパー状態なんだよ」

「ウー・・・何？」

「おい、そんな古くてくだらない例えしないで早く走れ。追いつ
かれるぞ」

「古くてくだらないってウーパールーパーに謝るんだ、霧人！」

知るか

例えを出したお前が謝りやがれ

「あはは 二人とも仲良いね」

「そりやどうも」

「しかしまあ助かったよ」

「何が？」

「いや、やっぱり学園に男二人はつらいからな。何かと気を遣うし。もう一人でも男が増えるっていうのは心強いもんだ」

「そうなの？」

俺に聞くな

「ま、何にしてもこれからよろしくな。俺は織斑一夏。一夏って呼んでくれ」

「俺は雨裂霧人。霧人でいいわ」

「うん。よろしく一夏、霧人。僕のこともしャルルでいいよ」

「とりあえず速度をあげよう、女子から逃げるぞ！」

ロッカールームにて

「「はあはあ」」

「シャルルはともかく一夏、情けないぞ」

一夏とシャルルは息を荒げている

「霧人はっていつの間に着替えてるんだ！」

「逃げる際にこっそり着替えた」

「ええ〜」

「さつさと着替えるよ、二人とも」

「ああ」

「う、うん」

一夏が着替えだす

「わあっ!?!」

「?」

いきなり、シャルルが変な声を出す

「荷物でも忘れたのか? って、なんで着替えないんだ? 早く着替えないと遅れるぞ。シャルルは知らないかもしれないが、うちの担任はそりゃあうるさい人で」

「一夏はそれでよく怒られてっからな」

「うるせえやい。ちょっと遅くなっちまうんだ」

いや、その理由はなんなんだよ?

「ほら、シャルルも早く着替える」

「う、うんっ! き、着替えるよ? でも、その、あっち向いてて……ね?」

「???? いやまあ、別に着替えをジロジロ見る気はないが……って、シャルルはジロジロ見てるな」

「み、見てない! 別に見てないよ!?!」

両手を突き出し、慌てて顔を床に向けるシャルル

「まあ、本当に急げよ。初日から遅刻とかシャレにならないというか、あの人はシャレにしてくれんぞ」

経験者は多くを語るってか？

「・・・・・・・・」

一夏が着替え出して数秒

何故か視線を感じる

ちなみに俺は一夏の方を向いている

「シャルル？」

「な、何かな！？」

「うわ、着替えるの超早いな。なんかコツでもあんのか？」

「い、いや、別に・・・・って一夏まだ着てないの？」

一夏はまだISスーツのズボンしか着ていない

「これ、着るときに裸ってというのがなんか着づらいんだよなあ。引つかかって」

「ひ、引つかかって？」

「おう」

「・・・・・・・・／／／／」

「よし、シャルル。さっさと行くぞ。一夏を置いて」

「えっ！？ちよつと！？」

俺はシャルルを連れて先に更衣室を出た

「まったく、一夏の奴。なんであんな下品なことを平気で言っかな」

そんな話、誰も興味ねえっての

「シャルルも嫌だったら厳しく言ってもいいんだぞ」

「う、うん」

「そういえばそのスーツ、見たことないな」

「これはデュノア社製のオリジナルだよ。ベースはフランクスだけど、ほとんどフルオーダー品」

「デュノア？デュノアって・・・」

「うん。僕の家だよ。父がね、社長をしてるんだ。一応フランスで一番大きいES関係の企業だと思う」

「ほー。そうなんだ」

「う、うん」

「?どうした?」

「いや、ちよつと驚いちゃって」

何が？俺、変なこと言った？

「ううん。大半の人はその話を聞いて驚いたり、凄いなって誉めてきたりするんだけど」

ああ、なるほど

「まあ、確かに驚くし、凄いなと言えば凄いが、シャルルが社長って訳じゃないしな」

「そ、そうだね」

「だが・・・一応シャルルのことはいろいろと知りたいがな」

「あ、ありがとう・・・」

うん。ちよつとは元気になったみたいだ

会社の話をしているシャルルは顔が暗くなったように見えたからな。この話は禁止だ

「おおーい！霧人、シャルル！」

「うし、早く行くぞ」

「う、うん」

一夏の声が聞こえた瞬間、俺とシャルルは走り出した

「ずいぶんとゆっくりでしたわね」

俺とシャルルが一組整列の端に加わると隣にいたセシリアにそんなことを言われた

ちなみに一夏は千冬さんに怒られている

「スーツを着るだけでどうしてこんなに時間がかかるのかしら？」

何故かセシリアの喋り方に棘がある

「一夏のせいだな」

「う、うん」

「あら、そうでしたの？」

シャルルの肯定もあつたおかげかセシリアはすぐに納得してくれた

「そういえば、一夏さんはどうしてあの女性に叩かれようとしたのかしら？」

「いや、わからん」

「なに？一夏はまたなんかやったの？」

後ろを振り向いたら鈴がいた

ああ、後ろは二組の列だから当たり前か

「一夏さん、今日来た転校生の女子にはたかれそうになりましたの」
「はあ？アイツはなんでそうバカなの？」

「安心しろ。バカは私の目の前にも二名いる」

ギギギギッ

ときしむブリキの音で首を動かすセシリアと鈴

バシーン！

そして容赦なく出席簿アタックが響いた
可愛そうに

「では、格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

「はい！」

一組と二組の合同実習なので人数はかなりの人数がいる
出てくる返事もいつも以上に気合いが入っていやがる

「くっっっ…何かというとすぐにポンポンと人の頭を…」

「…一夏のせい一夏のせい一夏のせい…」

叩かれた場所が痛むのか、セシリアと鈴はちよつと涙目になりながら頭を押さえている

セシリアはともかく、鈴は完全に八つ当たりだ

「そんなに痛いのか？」

「痛いわよ！アンタ喰らったことないの？」

「条件反射で防いじゃうんだよね」

「お前たちには戦闘を実演してもらおう。さっさと準備をしろ」

「ど、どうしてわたくしたちが!？」

「専用機持ちはすぐに始められるからだ」

「うっ……」

「お前ら少しやる気を出せ。 アイツに良いところを見せられるぞ?」

なんか最後の方、二人にしか聞こえないように喋っていたが、なんだ?

「やはりここはイギリス代表候補生、わたくしセシリア・オルコットの出番ですわね!」

「まあ、実力の違いを見せる良い機会よね!専用機持ちの!」

一体なにを言われたんだよ?

やる気MAXになっただやがる

「それで、相手はどちらに?わたくしは鈴さんとの勝負でも構いませんが」

「ふふん。こっちの台詞。返り討ちよ」

「慌てるなバカども。対戦相手は 」

……おう?上から音が……

ってISがおってきたー!

一夏の上に

「あ、あのう、織斑くん……ひゃんっ!」

「ん?この声は……」

聞き覚えのある声に俺は近づいて見てみる

すると、何故か一夏がISを展開した山田先生を押し倒した体勢に

なっていた

「そ、その、ですね。困ります・・・こんなこと・・・」

「・・・えっ？いや、これは・・・」

「今すぐどこくことを推奨するなおれは」

俺の後ろから一夏めがけてレーザーが通る

「ぬおっ！」

「あら・・・外してしまいましたわ」

「セシリア、落ち着け」

しばらくお待ちください

「さて、小娘ども。さっさと始めるぞ」

「え？あの、二対一で・・・？」

「いや、さすがにそれは・・・」

「安心しろ。今のお前たちならすぐ負ける」

負ける、と言われたのが気に障ったのか、セシリアと鈴はその瞳に闘志ををたぎらせている

つつか、もっと言い方がなかったんだらうか？

今のお前たちでは相手にならん、とか・・・一緒か

「では、はじめー！」

号令と同時にISを展開したセシリアと鈴が飛翔する。それを目で一度確認してから、山田先生も空中へと躍り出た

「手加減はしませんわ!」

「ソッコーで終わらせるわ!」

「い、行きます!」

いつもの山田先生じゃないな。目が鋭く冷静なものに変わっている

「さて、今の間に・・・そうだな。ちょうどいい。デュノア、山田先生が使っているISの解説を試してみせろ」

「あつ、はい」

空中での戦闘を見ながら、シャルルがしつかりとした声で説明を始めた

だが、シャルルには悪いが俺は戦闘の方を集中する

先制はセシリア・鈴だったが、山田先生は軽く回避した

そして山田先生の反撃が始まった

両手に持っている五十一口径アサルトライフル《レッドバレット》が二人を襲う

命中精度が高く二人に確実に当たっている

セシリアもビットで反撃するが避けられ、鈴の弾雨の衝撃砲も避けられる

そして、山田先生の射撃がセシリアを誘導させ、鈴とぶつからせたところでグレネードを投擲。爆発が起こって、煙の中から二つの影が地面に落下した

「くっ、うっ・・・まさかこのわたくしが・・・」

「あ、アンタねえ・・・何面白いように回避先読まれてんのよ・・・」

「り、鈴さんこそ！無駄にはかすかと衝撃砲を撃つからいけないのですわ！」

「こっちの台詞よ！なんですぐにビットを出すのよ！しかもエネルギー切れるの早いし！」

「ぐぐぐぐぐつ……！」

「ぎぎぎぎぎつ……！」

どんだけ仲悪いんだよ、お前らは

ほら、他の奴らもくだらないがみ合いにくすくす笑いが起こってるぞ

「さて、これで諸君にもIS学園教員の実力は理解できただろう。以後は敬意を持って接するように」

確かにこれで山田先生の見る目が変わるだろうな

「専用機持ちは織斑、雨裂、オルコット、デュノア、ボーデヴィツヒ、凰だな。それぞれグループで実習を行う。各グループリーダーは専用機持ちがやること。いいな？では分かれる」

織斑先生が言い終わるや否や、一夏とシャルルと俺に一気にニクラス分の女子が詰め寄っていく

「織斑君、一緒に頑張ろう！」

「わかんないとこ教えて〜」

「デュノア君の操縦技術見たいなあ」

「ね、ね、私もいいよね？同じグループにいれて！」

「雨裂君！お願いします」

「楽しみ〜」

「この馬鹿者どもが・・・出席番号順に一人ずつ各グループに入れ！順番はさっき言った通り。次にもたつくようなら今日はISを背負ってグラウンド百周させるからな！」

その一声に、それまでわらわらとアリのよつに群がっていた女子達は、蜘蛛の子を散らすごとく移動して、それぞれの専用機持ちグループは二分とかならず出来上がった

「最初からそうしろ。馬鹿者どもが」

ふうつとため息を漏らす千冬さん。お疲れさまです

「・・・やったあ。織斑君と同じ班つ。名字のおかげねっ・・・」

「・・・うー、セシリアかぁ・・・さっきボロ負けしてたし。はぁ・・・」

「・・・鳳さん、よろしくね。あとで織斑君のお話聞かせてよっ・・・」

「・・・デュノア君！わからないことがあつたら何でも聞いてね！ちなみに私はフリーだよ！・・・」

「・・・」

と、織斑先生にバレないようにしながら、各班の女子はぼそぼそおしゃべりしていた

まあ、ドイツ転校生ラウラ・ボーデヴィツヒの班はまったくくない

つつか、改めてボーデヴィツヒを見てみると、張り詰めた雰囲気。

人とのコミュニケーションを拒むオーラ。俺たち生徒への軽視を込めた冷たい眼差し。さっきから一度も開くことのない口

なんかこいつを見ているとムカついてくる理由はわからないが

他の女子はみんなちよつとうつむき加減で押し黙っている

「ええと、いいですかーみなさん。これから訓練機を一班一体取りに来てください。数は『打鉄^{うちがね}』が三機、『リヴァイヴ』が二機です。好きな方を班で決めてくださいね。あ、早い者勝ちですよー」

山田先生がそう言うとボーデヴィツヒのグループ以外は一斉に動き出す

すげー気まずそう

昼休み

俺たちは屋上にいた

一夏が屋上で昼食を食べようと誘ってきたのだ。もちろん、箒やセシリア、鈴のいつものメンバーとシャルルも一緒だ

「あのー僕もいていいの？」

「何の問題もないだろ」

「そうだな」

俺はそう言っつて弁当を取り出す

「あれ霧人？弁当作るの？」

「作るよ、趣味に料理あるしな」

「そういえば言っつたな」

「そ、そういえば箒。俺の分の弁当を持っつてきてくれたんだろ？」

「あ、ああ・・・」

箒は一夏に弁当を差し出す

「じゃあ、早速。・・・おお！」

弁当を開けると一夏が驚く

「これは凄いな！どれも手が込んでそうだ」

「確かに凄いな。朝早くから頑張ってた甲斐があったな」

「な！霧人！」

「ああ、すまん」

俺が弁当を作りに来たらすでに箒が弁当を作っていた。弁当を作っているとき、かなり奮闘していて終わるまで俺の存在に気づかなかったんだよな

誰の分を作っていたのかと思っていたが、一夏のために作ってたんだな

「箒、なんでそっちに唐揚げがないんだ？」

「！こ、これは、だな。ええと・・・」

答えられねえよな。成功したのが、それ（一夏の分）だけだなんてな

「わ、私はダイダイエツト中なのだ！だから、一品減らしたのだ。文句があるか？」

「文句はないが・・・別に太ってないだろ」

「一夏。ダイエツトは別に太っているからするものだけではないんだぞ。美容や健康のためにすることもある」

「その通りよ。何であんたはダイエツト＝太っているの構図なのかしらね」

「まったくですわ。デリカシーに欠けますわね」

「いやでも実際ダイエットなんか必要ないように見え」

隣にいる箒を見ようとすると一夏だが、顔を思いつきり手で押し返される

「ど、どこを見ている、どこを！」

「どこって・・・体だろ」

「いやダメだろ」

その言い方は完全にアウトだ

「コホン。さて与太話はこのくらいにして昼食にしよう。いつまでも談笑してられるほど昼休みは長くはない」

「じゃあまあ、いただきます」

唐揚げをほおばる一夏

「おお、美味しい！箒は本当に食べなくていいのか？」

「・・・失敗した方は全部自分で食べたからな・・・」

ちなみに俺も食べさせられたよ

ほとんどが真っ黒に焦げていたものをな

上手かったけど

「本当に美味いから箒も食べてみるよ。ほら」

そう言って一夏は唐揚げを女子の一口サイズに切って、箸で持ち上げる

「な、なに？」

「ほら。食ってみろって」

「い、いや、その、だな・・・」

筈はかなり動揺している。まあこれは仕方ないだろう

「あ、これってもしかして日本ではカップルがするっていう『はい、あーん』っていうやつなのかな？」

「そうだな。一夏はまったく意識していないみたいだな。大した奴だよ」

納得したように微笑むシャルルに俺も賛同する

「さてと美味しくいただくかな」

二人をほっぽって飯を食う

「妬いてるの？」

ギョー！！

「なんでもないわ」

ふん

「一夏！はい、酢豚食べなさいよ酢豚！」

「一夏さん！サンドイッチもどうぞ！一つといわずにびんご全部！」

ずずいっと鈴とセシリアが押し寄せている

しかも、かなりの気迫だ

「さあ！」

二人とも一夏に料理を差し出している

「一夏、ご愁傷様」

「え？なんで？」

「セシリアの料理はな、必ず変なものが入ってるんだ」

一夏を見ると、とても変な顔をしていた

寮内

「……」

「霧人？」

「なんだ？」

「ずっと不機嫌だが……」

「気にする必要はない」

「いや、気になるのだが」

まあもういいか

「そつだ、篝、明日俺に弁当作ってくれ」

「唐突だな、……いいぞ」

「……そつか、楽しみにしてるぞ」

俺は篝の逆を向いて寝た

恥ずかしいな！！おい

大騒動？いつもの事だ（後書き）

こんな感じですよ

ありがとうございました

学年別トーナメント前だったのに騒ぎやがって(前書き)

今回は学年別トーナメントに行く少し前の騒動の話です
どうぞ

学年別トーナメント前だったのに騒ぎやがって

授業中

「・・・・・・・・・・」

何このだんまり・・・原因はボーデヴィツヒの妙な威圧感です
何だよまったくこれじゃおちおち眠れもしねえ

ブン！ バシィ！

「真面目に勉強している生徒をいきなり出席簿で叩こうとするなんて！！」

「たとえ表面上真面目でも心で下らないこと考えていただろ」

「誤解です、考えてませんよーいやだなくはははは」

「・・・（雨裂君、なんでこの雰囲気であんなに喋れるんだろう・・・）」

女子からそんな感じの声が聞こえたような気がするがまあ気のせい
だろう

休み時間

「いやー暗かったねー授業が」

「霧人、なんでそんなテンション高いんだ？」

「うん？まあ人にはテンションが高い日と低い日があるんだよ」

「いや、そうかもしれないけど・・・」

まああの雰囲気ではテンションが上がるわけないよな

しかし、幕の弁当かゝたのしみだな

「霧人、ずいぶん嬉しそうだね」

「シャルルか、まあ気にすんな」

「いや気になるから」

さてテンション戻すか

「しかし、ボーデヴィツヒの奴はクラスの雰囲気破壊するために来たのかって言うぐらいだったな」

「急に戻ったな・・・しかし、ほんとにそうだよな」

「一夏は叩かれそうになつたしね」

「・・・おお、一夏その時のお礼まだだぞ」

「え？・・・わかつたよ」

「明日の昼おごるで決定」

「選択肢なし!？」

「ああ、ない」

そんな俺たちのやり取りを見てシャルルは小さく笑っていた
何かしぐさが女子っぽいよなシャルルって

そついや昨日の夜具合が悪いとかなんとか言つてたけど・・・
実は全部聞こえちゃつてたんだよね〜一夏達の会話

さつきは女子っぽいって言つたけどほんとに女子だからな

一夏のやつラッキースケベ連発だな

三年間で考えるって言つてたけどどうすんだろ？ホント

しょうがない、少し手伝つてやるか

ちなみにその後の授業も何とも言えない空気に包まれていた

放課後

「鈴も随分気合入ってるな」

「当たり前でしょ、優勝して一夏と付き合っただから」

「よくも付き合えると堂々と言えるな」

そう、鈴は一夏に学年別トーナメントで優勝したら付き合っただけと宣言したらしい

一夏は軽く承諾したらしいが・・・それって

「一夏のやつ絶対勘違いしてるよな」

「・・・多分ね」

「まあ、買物だとしてもデートになるわけだし」

「おお、そんな手があるなんて！」

いや、気が付いてなかったんかい

しかしなぜかその宣言が変に広まってしまい

学年別トーナメントで優勝したら一夏、俺、シャルルの誰かと付き合えるというものになってしまっているようだ

「俺や一夏、シャルルが優勝したらどうなるんだろうな？」

「一夏は可能性薄いけどあんたらはやりかねないよね」

「まあ、本人の意思だから大した問題にはならないだろう」

そうでありたい

「「あっ」

「ん？どうした？」

アリーナに着くと

「なんであんたがいんのよ！セシリア」

「それはこちらのセリフですわ！鈴さん」

「いや、訓練のためでしょ二人とも」

セシリアが入念にビットを操作していた

「霧人さんはどうして？」

「鈴の訓練と自分の訓練をかねてな」

「そうだ、一対一やりましょうよ」

「そうですね、それが三人のためになりますし」

「この前みたいなことにはならないことを願うよ」

三人ともISを展開し開始すると言ったところで

目の前にいきなり銃弾が飛んできた

「ふん、それがブルー・ティアーズと甲龍、それに緑式か。緑式はともかく前の二つはデータの方が強そうだな」

「何あんた、いきなり。殴ってくださいって言ってるの？」

「鈴さん、知能の低い猿に何を言っても無駄ですわ」

さすがに言いすぎなんじゃない？

「ふん、たった一人の種馬を奪い合う屑どもがつけ上がるなよ」

「セシリア、あいつ今どうぞ好きなだけ殴って下さいって言ったわよね？」

「そうですね、ここにいない人の侮辱など！！」

「ふん、貴様らごときクズなど話にならん」

「霧人さんは見ていて下さい、私たち二人で充分ですわ」

そう言って三人は戦い始めた・・・俺空気過ぎ（涙）

ボーデヴィツヒのISはシュヴァルツエア・レーゲン
武装はワイヤーブレードとレールカノン、プラズマ手刀に・・・A
IC？

ああ、アクティブ・イナード・キャンセルか

慣性停止結界、対象を任意に停止させることができ、1対1では反
則的な効果を発揮するが、使用には多量の集中力が必要であり、複
数相手やエネルギー兵器には効果が薄いのだが

あの二人には厳しいな

あの二人が完璧に連携をすればはつきり言っただけにけりはつきそ
うだが

ボーデヴィツヒの操縦技術の高さで二人はむしろやられている
これ以上は危険だな

「この程度か、やはりクズはクズだな」

「なにを！！」

「まだまだ、これからですわ！！」

しかし二人はワイヤーブレードに捕まり振り回され同じ方向へ投げ
飛ばされる

「「きゃああ！！」」

「くらえ」

「やらせるかよ！！」

ボーデヴィツヒがレールカノンを構えたが俺はすぐに二人の前に移
動して八咫鏡をボーデヴィツヒにはなつ

「くっ！！」

とっさにボーデヴィツヒはかわして距離をとった

「霧人、べ、別にあんたが出なくても勝てるわよ」
「無理だな、AICの弱点に気が付いてないお前らでは」
「そんなことありませんわ、まだ行けます」
「ここで無理すれば出れるトーナメントも出れなくなるぞ？」
「うっ……」
「下がってる」

二人は大人しく下がって行った

「さて、待たせて悪かったな」
「ふん、いいのか？一人で」
「ふん、自分はレベルが違つと、俺たちよりもはるか上の存在だと
そう言いたいのか？」
「貴様らごときが何人いようと私には勝てない」
「……くだらねえ、織斑先生からお前はいつたい何を教えてもら
つたんだ？」
「なんだと……？」

ボーデヴィツヒから殺気があふれるが気にせず続ける

「お前が教官と呼んで敬愛している織斑先生から軍でいつたい何教
わつたんだつて言つてんだよ。ただの暴力か？」
「圧倒的な強さだ」
「ほう、だがなお前はそれをはき違えている！」
「なんだと！！」
「貴様は力に溺れて織斑先生の教えたことすら覚えていない」出来
損ない』だ！！」
「黙れええええええ！！」

ボーデヴィツヒはワイヤーブレードを飛ばしてきたが軌道は単純
あっさり躲して天叢雲剣を展開してボーデヴィツヒに切りかかる
ボーデヴィツヒはプラズマ手刀でこちらの攻撃を防ぐが俺は間をお
かずに切り続ける
さらにソードビットを展開して全方向攻撃をかける

「ぐっ！なんだこの速さは！？」

「その程度か？織斑先生から教わっておきながら？」

「貴様っ！！！」

ボーデヴィツヒが左手をこちらに向ける

AICを発動させたが俺は瞬時加速をつかい後ろに下がる
その後再び瞬時加速をつかいボーデヴィツヒの背後に回る

「ばかな！？」

「隙だらけだな！！！」

天叢雲剣にソードビットを装着してボーデヴィツヒを切りつける

「ぐっ！くそ！」

ボーデヴィツヒはワイヤーブレードを飛ばしてくるが相変わらず動
きが単調だ

「『絶刀』六閃」

斬撃を六つとばしワイヤーブレードをすべて叩ききった

「ばかな！」

「これで！！！」

とどめを刺そうとしたが

「貴様らいいかげんにしろ!!」

織斑先生が怒鳴り声をあげた

「おっと、織斑先生か・・・命拾いしたな」
「・・・」

ボーデヴィツヒは俺を一睨みすると何も言わず降りて行った
俺もゆっくりと降りる

「貴様らは・・・まったく」

「友達がやられているのをただ見ていると？」

「そうは言わないがやり過ぎだ二人とも、決着は学年別トーナメントでつける」

「はい」

「では、それまで、私闘は禁止する、全員速やかに教室に帰れ」

織斑先生は手を叩く、静まり返っていたこの場に大きな音が響き、戦いに見とれていたのか呆けていた女子たちが我に返り大急ぎで帰って行った

保健室

「霧人が乱入しなくても勝てたのに」

「包帯姿でよく言う」

鈴とセシリアは包帯を腕に巻いている

「包帯は腕だけですわ、それにこの程度」

「はいはい、そうですか」

俺が早めに乱入したからその程度で済んだのにふてぶてしい奴らだな

そんなにボロボロの姿を一夏に見られたのが恥ずかしいか

「二人とも・・・それだけで済んだからむしろ霧人に感謝しないとダメだよ？」

「うっさいわね、シャルル、だから助けてもらおう必要なんてなかったって言うてるでしょ」

頑固だなこいつら

一夏達が不毛な言い合いをしているのを見てると別な音が聞こえてきた

「なんだ？」

ドドドドドドドドドドドド

走ってくる音だなここに

・・・ここに？

そして保健室のドアが吹っ飛んだ・・・間違いなく吹っ飛んだ

「……………織斑君！雨裂君！デユノア君！……………」

「なにこれ？」

ドアから伸びる腕、腕、腕

どこのホラーか？

「……………これ!!」「……………」

「なになに」今月開催する学年別トーナメントでは、より実戦的な模擬戦闘を行うため、ふたり組での参加を必須とする。なお、ペアが出来なかった者は抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする。締め切りは」

「ああ、そこまででいいから!とにかくっ!」

「私と組もう、織斑君!」

「私と組んで、デュノア君!」

「私と組もうよ、雨裂君!」

「え、えっと……………」

シャルルの方を見てみると、数秒間だけ困惑した表情で一夏を見たのがわかった。そして一夏と視線が合うと、助けを求めているのがわかってしまうと思ったのだろう、すぐに視線をそらしてしまった

それを見て一夏はわああと騒ぐ女子全員に聞こえるように大きな声で宣言した

「悪いな。俺はシャルルと組むことにしたから諦めてくれ!」

「俺は筭と組むぞ」

間髪入れず俺も宣言する

「……………ええ……………」

「でもしょうがないか……………」

「篠ノ之さん……………羨ましいな」

女子たちはとぼとぼと歩いて行った

「「一夏さん!!」」

「私と組みなさいよ! 幼馴染でしょ」

「いいえ! 私と組んで下さい! クラスメイトですし!」

「えつと〜・・・うんと〜」

「お前ら勝率下げたいのか?」

「どういうことよ霧人?」

「一夏と相性が一番いいのはシャルルだ、お前らの場合一夏の動きに合わせる事がそう簡単にできないからな」

「「そんなこと・・・」」

「それにもし一夏と組んで負けた場合どうするんだ? こいつは燃費の事なんてあまり考えてないからすぐガス欠になって二対一の出来上がりだ」

「ぐぬぬぬぬ」

「いいかせません・・・」

勝利! VぶいぶいV

「お前らはお前らで組め」

「気にくわないけどそうするしかないのね」

「ええ、仕方なく」

こいつら言葉で簡単に勝てるな

「さて、筭と話しつけてくるわ」

「おう、じゃあな」

「「霧人さん」」

「ん?」

「「ありがとう」」

小声だったけどしつかりと聞こえた

「おう、早くよくなれよ」

寮内

「というわけで学年別トーナメント一緒に出るぞ」

「ああ、私もお願いしようと思っていたところだ」

「一夏じゃなくて、おれにか？」

「ああ、おまえにだ」

「なんで？」

「・・・一夏はまた厄介なことになりそうだったからだ」

「そうか」

顔ではポーカー気取ってるが内心踊っています

俺>一夏になっているのか？

うれしすぎるぜ~~~~

「なら、あしたから連携の訓練するか」

「そうだな」

「俺ちよつと用事あるから」

「そうか、なら行って来い」

「おう」

一夏達の部屋

「どんどんどん」

「霧人か？口で言わなくてもいいだろ」
「誰が来たかすぐにわかるだろ？」
「ああ、ちよっと待ってくれ」
「だが断る」

ガチャ

「おい!!」
「うるさいな、見られたくない光景でもあるのかよ？」
「いや、ない・・・いやある？」
「なんで疑問形なんだ、まあいい、シャルルはいるか？」
「ああいるけど」
「話がある」
「そうか、でも今は・・・」
「男装をしていない・・・か？」
「え・・・？なんでそれを？」
「昨日のお前らの会話がまる聞こえでな」
「そうなのか」

「夏はすんなり通してくれた

「よお、シャルル」
「む、霧人」
「あわてなくていいさ」
「何とも思わないの？昨日の会話を聞いていたなら」
「だって、ISのデータ盗んでないだろ？」
「そうだけど」
「ほいつ」

俺は手に持っていたUSBメモリをシャルルに渡す

「これは・・・?」

「俺が中二の頃に考えてた第三世代機の設計図」

「ええっ!」

「夏もシャルルも相当驚いていた」

「それなら、別にもういらぬから、それを社長にくれてもうあんなの指図は受けないうって言ってやれ」

「ほんとにいいの・・・?」

「じゃなきゃ渡したりはしない」

「なんで?僕は・・・」

「友達助けるのに理由があるか?」

「え?」

「困つてたら理由が何であれ助けるのが友達だろ?」

俺は笑顔100%で答える

「ふふっ、ありがとう」

シャルルは泣き出してしまった

あとは一夏に任せるとしよう

「じゃ、おやすみ」

「お、おう」

これでシャルルの枷が外れただろう

学年別トーナメント前だったのに騒ぎやがって(後書き)

「作者と」

「霧人の」

「「雑談コーナー!」」

パチパチパチ

「なにこれ？」

「雑談コーナー」

「いや知ってるけど、急に何？」

「面白いかなって」

「もうあきらめるよ」

「それがいい、作者は神ですから」

ぽかっ!!

「調子のり過ぎました」

「わかればよろしい」

「ホントによかったの？USBメモリわたして」

「おう、あたぼうよ」

「かっこいいな、おい」

「それでも、シャルルにフラグはたてないんだな」

「君ハーレム造りたいの？」

「いやです」

「でしょ？だから」

「ボーデヴィツヒはどうすんの？」

「一夏に押し付けるよ、もちろん」

「ネタ晴らし入ってるけど」

「いや、みんな想像はついてるでしょ、ヒロインは篝っていつてるし」

「そういえばそうだったな」

「さて今回はこんぐらいにするか」

「篝の弁当たのしみ」とか言ってその描写がないけど」

「だって、ただののろけじゃん」

「その一言でカットって」

「いいんだよ、まだ、初心者だし、そこらへん上手く描けないんだよ」

「駄文だしな」

「そうそう、お気に入りに入れてくれる人にはほんとに感謝だよ」

「ないてたもんな」

「こんな駄文ですがこれからもよろしくお願いします」

「それでは！ありがとうございます」

学年別トーナメント(前書き)

今回はタイトル通りです

霧人の活躍はあまりないです

どうぞ

学年別トーナメント

観客席

「しかし、一回戦目から一夏達とは」

「私たちはこの次だからな」

しかも一夏達の相手がボーデヴィツヒたちとは、

「まあ、あの二人ならボーデヴィツヒにも勝てるだろう」

「シャルルは相当頭が回るし一夏は作戦を忠実に行うからな」

あの二人の相性は結構いいからな

あとは一夏の白式の燃費の問題が解消されればなんの問題もないんだが

お、試合が始まるな

「一夏、行ける？」

「ああ、もちろんさ」

ラウラ・ボーデヴィツヒ・・・千冬姉と何かあったらしいけど

・・・第二回モンド・グロツソ、俺が誘拐されて千冬姉が優勝できなかったこと

おそらくラウラが言っていた汚点とはそのことだろう

だからって俺だって悔しかったわけじゃない

悲しかったわけじゃない

だからこそ強さを間違えているラウラをほっとくわけにはいかない

「シャルル」

「なに？一夏」

「ラウラは俺がやる、最初は手を出さないでくれ」

「・・・分かったよ、でも無理はしないでね」

「分かつてる」

ラウラ、お前の強さは千冬姉の強さとは違う
それを分かせてやる

「ふん」

いきなり奴と当たれるとはな

織斑一夏・・・教官の唯一の汚点

奴を完膚なきまでに叩き潰し教官の目を覚ましてやる

教官に・・・あんな顔はいらないのだ

そして、あの男の次は、雨裂霧人貴様もつぶしてやる

教官から教わったことをはき違えているだと？教わってもいない貴
様に何が分かる

今度こそ負けはしない

絶対にな

「いきなり貴様と当たるとはな、手間が省ける」

「奇遇だな、俺も同じことを考えていたよ」

試合が始まるまで・・・5・・・4・・・3・・・2・・・1

「叩き潰す！！」

ボーデヴィツヒと一夏が激しくぶつかり合った

シャルルはボーデヴィツヒと抽選で当たってしまった可哀想な女子と闘っているが、はつきり言ってただのイジメに等しい

ご愁傷様と心の中で合掌しといた

「一夏、苦戦してるな」

「でも、シャルルがすぐに向かうだろ」

一夏は近接しかないからAICの餌食になりやすいんだよな
つまりボーデヴィツヒは一夏の天敵なんだよな

お、シャルルが一夏の援護に入った

シャルルの動きは一夏と違い変幻自在かつ柔軟な思考で頭の回転も
速い

ボーデヴィツヒにとってこれほどやりづらい相手はいないだろう

シャルルは自分の得意技の高速切替ラビット・スイッチと砂漠の逃げ水ミラージュ・デ・デザートを使いボーデヴィツヒを翻弄している

ボーデヴィツヒとシャルルの距離が開けば一夏が斬りかかる

完璧ともいえるコンビネーションだ

接近していた一夏をボーデヴィツヒが殴り飛ばした、その隙をついたシャルルが瞬時加速で一気にボーデヴィツヒに近づく

「瞬時加速だと！？データにはなかったぞ！」

「うん、だって今初めてしたもの」

そう言ってシャルルは左のシールドの裏から何かを出した

「パイルバンカー？」

「そう、第二世代機の最高の攻撃、痛いどころじゃないよ」

確かあれはリボルバー機構の装備によって、炸薬交換による連続打

撃が可能となっており、第2世代では最高クラスの威力を持つシャルルの切り札、連発できるし一発の威力も高い、喰らい続けたら確実に負けるだろう

あれを第三世代機に入れたら・・・恐怖以外の何でもないな

負けるのか？私はこんなところで

負けたくない、負けるわけにはいかない

私は・・・！

「願うか・・・？汝、自らの変革を望むか・・・？より強い力を欲するか？」

力・・・欲しい、私はすべてを叩き潰す力が欲しい！！

DamageLevel・・・D
MindCondition・・・Uplift
Certification・・・Clear
《ValkyrieTraceSystem》・・・boot

「あああああああああ！！」

それは、絶叫に近かった

ボーデヴィツヒのISにいきなり紫電が走り、衝撃波が発生した突然の事だったのでシャルルはふっとばされてしまった

「VTシステム・・・」

「霧人、お前はあれが何なのか知ってるのか？」

「Valkyrie Trase System過去のモンド・グロツソの受賞者の戦闘方法をデータ化し、そのまま再現・実行するシステム」

「なんだと……」

「そして……あの姿は……」

ボーデヴィツヒのISは黒い謎の物体に包まれ、その物体がある姿を形どつた

その姿は……

「織斑先生……雪片」

第一回モンド・グロツソ総合優勝者「ブリュンヒルデ」と呼ばれた織斑千冬とその時のIS「暮桜」に搭載されていたたった一つの武器雪片だった

「《雪片》……!」

怒りが込められた言葉を言う一夏

《雪片式型》を中段に構えていた一夏に、ボーデヴィツヒだったものが懐に飛び込んできた

そのまま、居合いに見立てた刀を中腰に構え、必中の間合いから放たれる必殺の一閃

「ぐっつ!」

一夏の雪片式型が弾かれる

そしてボーデヴィツヒだったものはそのまま上段の構えへと移る

「一夏!」

「！」

縦一直線の鋭い斬撃が襲いかかる

一夏はなんとか避けることが出来たが、軽く当たっていたらしく、刃に触れた左腕からじわりと血がにじんでいた

さらに、今の緊急回避で全ての力を使い切ったらしく、白式が光とともに消え去ってしまう

「一夏！下が」

「・・・がどうした・・・」

「一夏？」

シャルルの声が聞こえていないらしく、下を向いて何かを呟く一夏

「それがどうしたああっ！」

何を思ったのか一夏は生身のままボーデヴィツヒだったものへと駆けっていく

「うおおおおっ！！！！」

「待って、一夏！」

シャルルは一夏を引き留める

死ぬ気かあいつ！

「離せ！あいつ、ふざけやがって！ぶっ飛ばしてやる！」

熱くなる理由はなんとなくわかるが、行かせる訳にはいかないとシャルルは一夏の腕を離さないようにする

「どいてくれ、シャルル！邪魔をするならいくらシャルルでも」

「一夏っ！！」

「っ！」

シャルルは一喝を入れて一夏を落ち着かせる

「落ち着いて、一夏。一夏はあれが何かわかるの？」

「あいつ・・・あれは、千冬姉のデータだ。それは千冬姉ものだ。千冬姉だけのものなんだよ。それを・・・くそっ！」

「一夏」

俺は一夏達の隣に来た

「霧人、どうして？」

「緊急事態だしなべつにいいだろ？」

俺はいまだに興奮が押さえてない一夏の方を向く

「一夏、確かに怒る理由はわかるがな、そう暑くなりすぎるな、シスコン」

「んな、こ、こんな時に！」

「こんな時だからこそ、冷静に行かなければならない」

俺は一夏のけがを見る

「冷静さを欠けばその傷のように負わなくてもいいものを負っ羽目になる」

「・・・そうか、分かったよ」

一夏は落ち着いた顔に戻った

「でも、許せないものは許せないぜ」

「その状態では何もできないけどな」

「いや、方法ならあるよ」

シャルル、まさか

「コアバイパスを？」

「うん、それなら」

なるほど、シャルルのISのエネルギーを一夏のISに移すことで再び戦闘することが出来るということだ

しかし、ボーデヴィツヒだったものはそんなものお構いなしにこっちに少しずつ近づいている

「俺が時間を稼ぐ、何なら俺がやってもいいが？」

「いや、俺がやる」

「別にお前じゃなくてもいいだろ？」

「違うぜ霧人。全然違う。俺が『やらなきゃいけない』んじゃないんだよ。これは『俺がやりたいからやる』んだ。他の誰かがどうだとか、知るか。大体、ここで引いちまったらそれはもう俺じゃねえよ。織斑一夏じゃない」

やっぱり言うと思ったよ

まだ、付き合いは短いがこんなやつってのはあった時からだいたい把握はしていた

「あんまり遅いとマジで終わらせちまっぜ？」

俺は緑式を展開する

「さて始めるか、力に溺れたEins einsames schwarzes Kaninchen（一人ぼっこの黒兎）」

天叢雲剣を展開してボーデヴィツヒだったものと鏢迫り合いを始める

「なかなか強い力だが・・・この程度!!」

俺は雪片を受け流し、ソードビットを天叢雲剣に装着する

「行くぞ!!」

何度も剣と剣をぶつけ鏢迫り合いをする
すると

「待たせた!!」

「遅いぞ、それで行けるのか？」

一夏は雪片式型と右腕だけを展開していた

「シャルルのエネルギーもそんなになかったんだが・・・これでも行ける!!」

「なら、終わらせろ」

「おっつ!!」

一夏は真っ直ぐに、意識をただ一点、正面の敵のみにと閉ざしていた
った

「.....」

ポーデヴィツヒだったものが刀を振り下ろす。速く鋭い袈裟斬りだでも、そいつは織斑先生じゃない
それは

「ただの真似事だ！」

ギンツ！

一夏は腰から抜き放って横一闪、ポーデヴィツヒだったものの刀を弾く
そしてすぐさま頭上に構え、縦に真つ直ポーデヴィツヒだったものを断ち斬った

「ぎ、ぎ・・・ガ・・・」

一夏の一闪で黒いESが真つ二つに割れる
そして、ずるつとポーデヴィツヒが吐き出されるように出てきた
その姿は弱弱しく力を求め続けたポーデヴィツヒはそこにはいなかった

「まあ、殴るのは勘弁してやるよ」

なんとなく、一夏の明日の運命が決まったような気がした

保健室前

「まあ、お前のけがも大したことなくてよかったな」

「ああ、そうだな」

俺と一夏がそんな話をしていると

「あ、二人一緒にいたんですね」

「山田先生、どうしたんです？」

「今日から、男子の大浴場が使えるようになったんです」

「ホントですか!!」

一夏、目輝きすぎ

「ええ、なので三人して入って下さい」

「え？ああ、はい分かりました」

シャルルが女子だということを知らないからな俺ら以外

「霧人」

おうつ？寒気が襲ってくるよ!?

「まさか、三人して入るわけではないよな？」

「いやだな、篤さん？俺が先に入って満喫するに決まってるじゃありませんか（汗だく）」

「ならいいんだ」

こわ!!一夏、君はやっぱり明日死ぬ運命にあるようだ

「霧人、一緒に入らないのか？」

「ばかか、シャルルの事があるだろうが」

「そうだけど」

「裸見たお前ならまだしも俺は完璧アウトだろ」

「あ、あれは不可抗力だ」

「ともかく俺は間だ死にたくないんだ」

ちなみに小声なので誰にも聞こえてません

「さてと支度してくるかな」

「そうするか」

大浴場へ

「うんうん、やっぱり風呂はいいな」

疲れが抜けていい気分になる

しかし、さっきの事件のせいで学年別トーナメントは中止でもデータを取るため一回戦はやるらしい

つまり俺、篝ペア対鈴、セシリアペアの試合もあるってことだ

まああの二人の相性ほど最悪なものはない鈴は俺がやればいいしセシリアは篝が接近戦をすれば造作もない

・・・こんな考えは明日でいいか

今はこの時間を満喫しよう

「い〜い湯だな〜」

贅沢だよな〜IS学園・・・

「父さん、母さん、あんたたちの人生奪ったISに乗ってる俺を・・・
・どう思ってる?」

答えはない

「父さんたちは今でも千冬さんを憎んでるか？それとも俺と同じようにもう許してる？」

俺は右目の周辺を触りながら呟き続ける、他の肌とは違い右目周辺の肌は少し触り心地が違う

白騎士に乗っていた千冬さんは撃った荷電粒子砲によってついた傷の後は全く消えない

「なんで、あの日だったのかな」

いままで一人になることが少なかったから、考えてこなかったが今になって急にたくさんのがでてくる

・・・いや、考えるのはよそう
もう過ぎたことだ

明日を懸命に生きるって決めたんだから

次の日

朝のホームルーム、シャルロットの姿はなかった

それにボーデヴィツヒもいない

朝、起きてからその姿を見ていない

昨日の様子を考える限りでは負傷で休みではないだろうし、事情聴取かなんかだろう

「み、みなさん、おはようございます・・・」

教室に入ってきた山田先生は何故かふらふらとしている

「今日ですね・・・みなさんに転校生を紹介します。転校生といいますが、すでに紹介は済んでいるといたしますか、ええと・・・」

山田先生の話にクラスみんなは一斉に騒がしくなる

今のこの時期に転校生がまた来るわけだから当然と言えば当然だでも、『すでに紹介は済んでいる』？
もしかして

「じゃあ、入ってください」

「失礼します」

やっぱりか、この声は最近聞いている声だ

「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めてよろしく願います」

ぺこりと、スカート姿のシャルロットが礼をする

一夏を始めクラス全員がぼかんとしたままだ

俺は？山田先生が話してた時から予想はついていたから問題なかったよ

「ええと、デュノア君はデュノアさんでした。ということでは
ああ・・・また寮の部屋割りを組み立て直す作業が始まります・・・」

山田先生の憂いはそこにあっただか

「え？デュノア君って女・・・？」

「おかしいと思った！美少年じゃなくて美少女だったわけね」
「って、織斑君、同室だから知らないってことは」

ザワザワザワツッ！

教室が一斉に喧噪に包まれ、それはあっという間に溢れかえる
一夏・・・さらば

「ちょっと待って！昨日って確か、男子が大浴場使ったわよね!？」

びきい！

何この音

「一夏あー!！」

鈴がIS展開してこっち来た!!

「死ね!!!!!」

問答無用、弁解の余地もなしにISアーマー展開、それと同時に両
肩の衝撃砲がフルパワーで開放される

『哀れ高校一年生男子、同学年女子に殺害される。死体は原形をと
どめておらず、クラスメイトは口々にに悲しみの声を漏らす』

「ミンチでした」「トマトケチャップでした」「地面に落ちた柿で
した」「あるいはイチジクでした」「破裂した缶コーラでした」
何て記事が出来るそう

ズドン!!

鈴は容赦なく衝撃砲を放った、俺が横にいるのに

「お、お前は私の嫁にする！夫婦なのに、名字で呼ぶのは変だから名前で呼べ！これは決定事項だ！異論は認めん！」

「・・・嫁？婿じゃなくて？」

「一夏がツッコミを入れる

まで、ツッコムところはそこじゃない

「あ、あつ、あ　　！」

ぱくぱくと口を動かして、声にならない声をあげている鈴

「アンタねええええつ！！！！」

ジャキン！と再び衝撃砲が開く

ジャキン！

「一夏さん・・・覚悟は出来ていますわよね？」

次にセシリアが一夏に狙いを定める

「ま、待ってくれ！今のは・・・」

俺はその光景をにやにやしなから・・・

スウ

「あの筈さん？なんで俺は日本刀を突き付けられてるんでしょうか

？」

「霧人、お前は・・・」

「入ってませんよ！！俺は昨日一人でした！！ほんとです」

「霧人は一緒に入ってないよ」

サンキューシャルル！じゃなかったシャルロット

箒は納得して刀を収めた

・・・って、シャルロットさん？なぜあなたはパイルバンカー、盾殺し（シールド・ピアース）を展開してるんですか

「一夏」

「お、おう？」

「一夏は平気で女の子とキスできるんだね」

「だから、待ってくれ！あれは」

「・・・言い訳無用！！」「」

「ぎゃああああああああああああああああああああ」

南無南無

これはクラス一同の心の感想だった

学年別トーナメント（後書き）

「作者と霧人の雑談コーナー！！」

「今回はゲストをお呼びしています」

「それでは早速来てもらいましょう」

「スーパー朴念仁こと織斑一夏君です」

ぱちぱちぱちぱち

「どうも」

「くらいなくもつとシャキッとしようよ」

「あの後でシャキッとできませんよ」

「おいおい、小説内では永遠の16歳で作者は17だからって敬語はいらんぞ」

「なんだそのどうでもいいプチ情報は」

「さあ切り替えて、今回はどうでしたか？」

「駄作でした」

「俺ばかりひどい目になってます」

「一夏君それはどの小説でもそうだよ」

「霧人の発言には突っ込まないの？」

「事実を述べてるからね」

「あっさり認めたな」

「さて、一夏君、何か疑問に思ったことは無いか？」

「霧人の名前の由来って？」

「由来か、なんかかつこいい感じがしたんだよね」
「それだけ!？」
「あと雨を裂くと霧になるじゃん」
「そっち先に言えよ」
「ぶつちやけ適当に思い付いた名前だから」
「死ね!！」

どかああああん

「しかし、一夏は相変わらずだよな」
「進行係の作者吹っ飛んで行ったけどいいのか？」
「いいんだ」
「いいんだ、相変わらずって？」
「朴念仁が」
「どういうこと？」
「なんでそこまで鈍感かな？」
「知らないよ、そんなこと」

「まあ、話が続かなくなったので」

「」「」今回はこれで終わります!！ありがとうございます!！」
「」
「今、作者の声聞こえなかったか？」
「幻覚だ」
「いや、いるからここに」

専用機持ちバトルロワイヤル(前書き)

今回は原作と関係なし

しかも短いです

どうぞ

専用機持ちバトルロワイヤル

グラント

「今回は専用機持ちで模擬戦・・・バトルロワイヤルをしてもらう」
「なんで言い直したんですか？織斑先生
言ってる途中で思いつきましたよね？それ

「バトルロワイヤルって具体的にはどうすれば？」
「簡単だ、協力一切なしでただつぶし合え」

教師の言葉とは思えないよ、つぶし合えて・・・

「まあ、ここは軽くひねっておきましょうか」
「そうですね」

誰を？

「なんだか緊張するな」
「軍でもやったことはある、造作もないな」

ラウラ（あの事件の後みんなと和解した）たくましく見えるよ
「よし、やってやるぜ！」

無駄に暑いね、一夏

「最後まで残った奴には、学食一週間ただ券をくれてやるよ」

「「「「「なに!?!」「」「」「」
「それでは始めるぞ」

全員してESを展開
円を描いて空に移動する

「負けるわけにはいかないわね」

「これは見逃せませんわ」

「張り切って行こうかな」

「一週間ただ飯食うチャンス」

みんなやる気十分だな

しかし、俺のやる気もクライマックスだぜ!!

「「覚悟はいいな? 貴様ら」」

ラウラとセリフがまる被りしたがまあいいや
しよっぱなから全力で行くぜ!!

「開始!!」

始まりと同時に鈴は一夏に、ラウラはシャルロットに向かって行った
すなわち

「今日こそ勝たせてもらいますわ!!」

気合十分なセシリアが俺の相手

俺は天叢雲剣を展開、一緒にライフルビットも展開する

セシリアはビットを出していた

勝機はすでに俺にあり!!

「すでにティアーズを出しているとはな、余程負けたいらしい」
「今回こそは!!!」

セシリアがティアーズを動かすが俺はライフルビットでティアーズを狙う

セシリアはティアーズの操作しかできない
つまりは!!!

「動きがないがそれは倒してくださいと言ってるのか?セシリア」
「くっ」

セシリアの意識がこっちに向いた瞬間ティアーズをすべて落とした

「なっ!ティアーズが!」
「こっちに意識を向けるからそうなる!!!」

俺はセシリアに一気に近づく

セシリアはスターライトMK?でこっちを狙うが
ライフルビットの餌食となりセシリアは素手になってしまった

しかし、セシリアは近接武器、インターセプトを展開

俺に向かってくるが、セシリアの接近戦は素人に毛が生えたレベル
であり

接近戦の得意の俺には通用しなかった

インターセプトを天叢雲剣で叩き斬りライフルビットと天叢雲剣で
シールドエネルギーを零にした

「また・・・」

「相手が悪かったな」

さてとバトルロワイヤル、つまりは乱入してもオツケーって事だよな
俺はラウラとシャルロットの方へ向かう

「邪魔するぜ!」

その声と同時にライフルビットで牽制する

「うわっ!」

「ちっ!」

二人は何とか避けていた、不意打ちだったんだけどな

「さて、全力だぜ?」

「もちろん」

「当たり前なことを」

ソード、シールドビットも展開する

先に動いたのはシャルロットだった、俺に銃弾の嵐を降らせる、しかし、シールドビットによってすべて防がれてしまう

ラウラは俺に攻撃を仕掛けているシャルロットを狙おうとする
しかし、そこへ俺が八咫鏡で狙い撃つ

ラウラはAICを使って攻撃を無効化するが俺のソードビットの餌食となりさらにシャルロットが俺に攻撃が効かないと知るとラウラに標的を変え、銃弾の雨を降らせた

ラウラのシールドエネルギーがみるみる減っていく
しかし、シャルロットも今隙だらけだ

「チエックメイト!」

八咫鏡とライフルビットで二人に攻撃をかける

この攻撃でラウラのシールドエネルギーは零、シャルロットはエネルギーが半分まで減った

さっきの攻撃によりシャルロットはまだ体制を整えきれてない
再び攻撃をかけようとした瞬間シャルロットがいきなり吹っ飛んだ

「鈴か！」

「そうよ、ここであんたに今日こそ勝つてやる!!」

いまだにそれを言うのか、俺のシールドビットに傷一つつけられな
いくせに

ソードビットで鈴に攻撃を仕掛け、隙を作らせる

・・・できた!!

しかしその隙はシャルロットに取られてしまった

「終わりだよ!!」

「なっ!きゃあああ」

シャルロットは問答無用と言った感じでシールドピアースを鈴にぶ
つけている

・・・俺がいる事忘れてるんじゃないかな!!

「『絶刀』十閃!!」

十個の斬撃を鈴たちに飛ばす

「えっ!?!うわっ!!」

「はっ?きゃあああ」

二人とも墜落

そういや、一夏どうしたんだ?

あ、落っこちてる

ということとは・・・

俺シヨリ!!

その後一週間俺は学食を楽しんで食べた、まる

専用機持ちバトルロワイヤル(後書き)

何か霧人チートみたいになってるな
てか今回一度も名前出てない、霧人
こんな感じです
ありがとうございました

レゾナンスでデート!?(前書き)

今回はレゾナンスのお話です
ぞんぞん

レゾナンスでデート!?

（寮内）

暇だな

今日はせつかくのお休みなんだがやることがない

・・・あ、臨海学校があるんだっけか
水着新しいの買わないとな

え〜と、確かレゾナンスって店があるんだっただよな
支度支度

「ここか、レゾナンス」

広いな〜さすがすべてのものがここにあると言われていただけある
さっき一夏とシャルロットとそれを追跡しているセシリア、鈴、ラ
ウラを見かけたが・・・無視しよう
え〜と、水着コーナーはつと

「霧人？」

「ん？ 箒か」

案内板を見ていると箒が横に来ていた

箒は制服姿だった・・・残念

（作者が箒に似合う服を書けないだけである）

「箒はここへ何しに？」

「ああ、水着を買おうと思ってな」

「奇遇だな、俺もそうなんだ」

「・・・なら、一緒に行くか？」
「・・・もち」

今日はなんと素晴らしい日だろうか！

心の中でガッツポーズをしているのは俺だけの秘密だ

「しかし、ほんとにいろんな店があるよな」

「そうだな、おかげであれがないから遠出するしかないということもないな」

「箸はほかによると来ないのか？」

「生活用品や文房具ぐらいだな」

「そうか、俺も買わないとな」

などと他愛無い話を続けて

水着売り場に着いた

「じゃあ、10分後またここで」

「うむ、そうだな」

まあ、トランクスタイルのものでいいし、色はどうしようか
ふと、緑式の待機状態のグローブが目に入った

緑、緑・・・お、緑式と同じ色のものがある

うん、サイズも合ってるし、値段もいいな

これにしよう

さてと、集合まで時間があるがとりあえず戻ろう

「きゃあああああああ」

「・・・山田先生？」

・・・無視しよう、俺は何も聞いてない
集合場所で待っているよ

「うん？霧人」

「鈴か、一夏を追っかけてたんじゃないのか？」

「なっ、なんであんたが知ってるのよ！」

「バレバレだったよ、それに不審者みたいだったし」

山田先生筆頭に鈴、シャルロット、セシリア、ラウラがいた

「シャルロット、お前一夏といたんじゃないのか？」

「ああそれは織斑先生と一夏で買物させようって山田先生が」

「まあたまにはいいんじゃないかと思ひまして」

山田先生何て優しいんだ、優しすぎてクラスのみんなに若干馬鹿に
されてるけど

「霧人さんは何をしてるんです？」

「箒の事を待ってる」

言った瞬間みんなして固まった
地雷ふんだかも

「まつ、まさか！」

「」「」「デート！！？」「」「」

ウルサツ！！

鼓膜破れるかと思ったよ

「シャルロット、お前も同じことしてだろ」

「うっ、そうだけど」
「あんたら付き合ってたの!?!」
「いや、ただだけど」
「「「「まだあ!?!?!」」」」
「ああ、告ったし」
「「「「「マジ?」」」」」

山田先生、口調がみんなと同じになってる

「このリア充!?!」
「だからまだだつて」
「爆発しなさいな!?!」
「落ち着けお前ら」
「何と言つてプロポーズしたのだ!?!」
「恥ずかしいから言えるわけないだろ」
「いつ告白したの?」
「中二」
「「「「まだ返事貰ってないの!?!」」」」
「ああ」
「何とも思わないの?」
「心の整理がついたら答えだすつて言つてたから」
「まだ待つてんの!?!」
「ああ」
「「「「「(驚愕)」」」」」
「お、筈だ、それでは山田先生、お前らまた学校で」

俺は筈のそこに行った

「終わったか?」
「ああ霧人は」

「俺も終わったよ」

そのあと生活用品や文房具を買いに行った

「なんか食つか？」

「そうだな・・・」

筭が周囲を見渡していると一点で止まった

「クレープか？」

「・・・ああ／＼」

なぜ赤くなる？

「何味がいい？」

「イチゴ」

「了解」

俺はクレープを買いに行った

「よく考えたらあそこって相当有名なクレープ屋なはずだが随分空いてたな」

まあそのおかげで時間がかからなくて助かったが・・・
何だあいつら

「なあいいだろ？」

「何度も言っている、断る」

「釣れないこと言うなよ」

「貴様らなどと遊ぶ時間はない」

「だからってそのクレープ買ってる男のことまつのか」

「君が命令して買わせてるんだろ？そんな弱い男なんかほっといて遊ぼうぜ」

「買わせてなんかない、それに貴様ら以上に強い」

「・・・つけあがるのもいい加減にしろよ」

「そうだぜ、いくら女尊男卑だからってこれ以上は許されないぜ」

「・・・なら」

「お前らの態度も許されないがな」

「ああ！？なんだっ！？ゲフアツ」

イラついたので二人のうち一人の顎に蹴りを入れたやった

「なっ、なんだてめえ」

「貴様に教える名前などない」

「んだと！ぐぎゃああ」

男の一番の急所を蹴り上げてやった
あまりの痛みに気絶したようだ

「少し待たせたかな？」

「いや、問題はない／＼」

なんか無自覚で好感度あげてるみたい

「ほら、イチゴ味」

「ああ、ありがとう」

その後若干いい雰囲気になりながら俺たちは学園に戻った

レゾナンスでデート!? (後書き)

「うえ〜い」

「黙れ、この駄作者！」

ボグシヤア

「すみません、今回話がなかなか思いつかなくて」

「だからってこんなのあるかあ!！」

「でも嬉しかったでしょ？」

「.....」

「沈黙は肯定とみなします」

「今日のゲストはシャルロットさんです」

「どうも」

「駄作者である自分のせいでなかなか出番少ないですがどうです？」

「仕方がないんじゃない？」

「霧人！お前には聞いてない」

「一夏は相変わらずだからね」

「いきなり何のお話!？」

「霧人のヒロインは決まってるけど一夏はどうするの？」

「ノーコメントで」

「そもそも終わり方どうすんだよ」

「自分で考えるしかない」

「もう一個の天才以上完璧未満とかぶんなよ？」

「かぶるかも」

「おい」

「まあ仕方がないんじゃない？」

「駄作者ですから」

「自分で言ってるて虚しくならない？」

「事実だからね」

「駄目だこいつ」

「とまあいつもの確認は金輪際しないようにして」

「なんで？」

「ウザがられるかもしないし」

「そうだね」

「「「「今回もありがとございました」」」」

「「「また来週！」」」

臨海学校初日と二日目と三日目(前書き)

今回は臨海学校一日目と二日目の最初ぐらいです
ぜひ

臨海学校初日と二日目ちよっと

「バスの中」

「海！！見えたあ」

バスの中で女子がそう叫ぶと他の女子も一斉に海を見る
広々とした真つ青な空の下にその空と同じくらい広く青い海が広が
っていた

海か！中二の夏からまったくだったな

・・・目の前で一夏達が騒がしいが無視しよう
あと隣のこいつらどうにかなんないかな？

俺の隣が筈その隣がラウラなんだが・・・なにそわそわしてんだ？
まったくわからん

「貴様ら静かにしろ、もうじきつくぞ」

織斑先生の一言に一夏達も女子たちも静かになった
言葉通りほどなくしてバスは目的地である旅館前に到着
四台のバスからES学園一年生がわらわらと出てきて整列した
つか一年生ってこんなにいたんだな。知らなかった

「それでは、ここが今日から三日間お世話になる花月荘だ。全員、
従業員の仕事を増やさないように注意しろ」

「」「」よろしくお願いしまーす」「」

千冬さんの言葉の後、全員で挨拶をする

この旅館には毎年お世話になっているらしく、着物姿の女将が丁寧
にお辞儀をした

「はい、こちらこそ。今年の一年生も元気があってよろしいですね。あら、こちらが噂の……?」

女将がふと、俺と一夏の方を見て千冬さんにそう尋ねる

「ええ、まあ。今年は二人男子がいるせいで浴場分け難しくなってしまうって申し訳ありません」

「いえいえ、そんな。それに、いい男の子じゃありませんか。しっかりしてそんな感じを受けますよ」

「感じがするだけです。挨拶をしろ、馬鹿者」

ぐいっと一夏の頭を押さえる。俺はやられる前に頭を下げる

「お、織斑一夏です。よろしくお願いします」

「雨裂霧人です。よろしくお願いします」

「うふふ、ご丁寧にも。清洲景子です」

そう言っただけであって女将はまた丁寧なお辞儀をする
女将ただけあって気品のあるものだ

「それじゃあみなさん、お部屋の方にどうぞ。海に行かれる方は別館の方で着替えられるようになっていきますから、そちらをご利用なさってくださいな。場所がわからなければいつでも従業員に訊いてくださいまし」

女子一同は、はいと返事をする。とすぐさま旅館の中へと向かう

「ね、ね、ねー。ムック〜におりむ〜」

「その呼び名やめてくれっ!?!」

「うおっ!？」

変な呼び方をしながら飛びついて来たのはのほほんさんだった最近、よくこうやって飛びついてくるびっくりはするがそんなに衝撃はこない

「じゃあザツキーとおりむっって部屋どこ? 一覧に書いてなかった」。遊びに行くから教えて」

その言葉で周りにいた女子が一齐に聞き耳を立てるのがわかった普通は男子が女子の部屋に行きたがるものなんだが、俺と一夏は残念ながらそんな気持ちは一切持っていない

「いや、俺も知らない。霧人は?」

「同じく、廊下にも寝かされるとか?」

「わー、それはいいね。私もそうしようかな。あー、床つめたーいって」

「寝ごごち悪そうだな」

ちなみに俺たちと女子を一緒の部屋で寝泊まりさせるわけにも行かないということ、俺と一夏の部屋はどこか別の場所が用意されるらしいらしいというのも、山田先生がそう言ってただけで明確には聞いてないからだ

「織斑、雨裂、お前らの部屋はこっちだ。ついてこい」

千冬さんのお呼びだ。急がないとまた出席簿アタックを喰らってしま

俺はのほほんさんにじゃあなと言って別れた

「それで、織斑先生。俺たちの部屋ってどこになるんですか？」
「黙ってついてこい」

俺と一夏は黙って千冬さんの後をついていく

「ここだ」

「え？ここって・・・」

「教員室だな・・・」

ドアにばんと張られた紙は言った通り『教員室』と書かれている

「最初は織斑と雨裂の二人部屋という話だったんだが、それだと絶対に就寝時間を無視した女子が押しかけるだろうということになってだな」

はあ、とため息をついて千冬さんが続ける

「結果、私と同室になったわけだ。これなら、女子もおいそれとは近づかないだろう」

「そりゃまあ、そうだけど・・・」

わざわざ遊ぶために鬼の寝床に入ろうとする勇者はいないだろう

「一応言っておくが、あくまで私は教員だということを忘れるな」

「はい、織斑先生」

「それでいい」

部屋の中はISの学園の部屋よりもいい感じの部屋だった
しかも窓を開けると海が一望できる

「さて、今日は一日自由時間だ、遊んで来い」

「はい」

「了解です」

「返事はいだ、馬鹿者」

「・・・はい」

まあ切り替えて遊ぼう

「うん、やっぱり近くで見るとひろいよな」

「おう、しかも真つ青だしな」

「きゃ〜〜、織斑君たちかつこいい〜」

「すごく筋肉が引き締まってる〜」

うん、どうでもいい感想です

てか一夏って意外と筋肉あるのな

「お前意外と鍛えてるんだな」

「そういう霧人だって」

「そりゃ、IS乗るんだからな」

うん？一夏の後ろに・・・

「とりゃ」

「おわあ」

鈴か、小さすぎて見えなかったよ

「霧人！一言多いわよ！」

しまった、この女子読心術使えるんだってことは、表情に出てたつて事か

「いや、すまん、事実だから」

「むきー」

「つーか鈴！降りろ」

「あ、霧人さん、一夏さんは？」

「こじ」

「え？な！鈴さん！降りなさい」

「いいじゃない、いい監視塔よ」

「俺は人だ！塔じゃない」

しゅしゅ、鈴は降りた

「なら、一夏！どっちが早く泳げるか勝負よ！」

「駄目ですわよ！一夏さん、オイル塗って下さらない？」

「おう、いいぜ」

「ぐぬぬ」

「女子が出しちゃいけない声だな」

「うっさいわねそうよ、霧人！あんた付き合いなさい」

「いいぜ、絶対俺が勝つがな」

俺たちは勢いよく走りだし二人同時に海に飛び込んだ

「プハア」

鈴が顔を出しクロールを始める

「（あれ、霧人が出てこない？溺れたとか？）
「ぷはあ」

浜辺から鈴より十五メートルぐらい離れた海から俺が顔を出す
そう、俺はイルカのごとく水中を泳げるのだ

「（な！あんなの反則よ！！）」
「（鈴の声なんて聞こえない）」

俺は鈴と同じクロールで鈴との差を広げようと泳ぎだす

結果

「むきーー」
「百年早いんだよ、はっはっはっ」

俺が勝ちました
そんなことしてると

「いや〜大変だった」
「あ、一夏」

「一夏！今度こそ勝負よ！」
「おう、いいぜ」
「・・・鈴、溺れんなよ」

「溺れるわけないでしょ？私は前世人魚だったんだから」

お前、俺に負けたよな

「ザツキー、ビーチバレーしよう」
「ビーチバレーか、いいぜ」

2対2か

俺のペアがのほほんさんというのが若干不安なんだが

ちなみにのほほんさん、本名のほとけほんね布仏本音

一夏が名前を覚えられずこのあだ名をつけている

俺は面白いからのほほんさんと呼んでいる

「ふっふっふっ。七月のサマーデビルと言われたこの私の実力を・
・見よ！」

いや意味わからん、とツツコミたかったが、いきなりのジャンピン
グサーブ

しかも、スピードといい角度といい申し分ない

「だが、甘い！」

「なんですと!?!」

俺はそのサーブをレシーブでのほほんさんの真上に上げる

「いつくよ」

おお、意外といいレシーブ

「受け取れ、七月のサマーデビル」

「なんと！」

女子に向かって手加減なしのスパイクを放つ
もちろん腕に向かって

「くっ、狙われた!?!」

しかし、対応できずボールは場外へ

「ザッキー容赦ないね〜」

「サマーデビルとかいう二つ名持ってるんだからできるんだろっな
〜と思ったただけだ」
「ぐぬぬぬ」

だから、それ女子が出していい声ではないでしょ

「じゃあ今度はこっちから・・・な!」

少し緩めのサーブ

「なんの!」

「よし、ぶちかましてやりな!」

いやいや、言葉遣いが荒いって

「サマーデビルの一撃で沈みなさい!」

「ほい」

「ばかなあ!?!」

鋭い一撃だったか顔に来るって分かってたし
のほほんさんがまたいいレシーブ上げたので

「させない!?!」

ブロックか、しかし

「ちよんつと」

「んなあ」

軽くたたく、そのボールはブロックの上を通り
もう片方が対応できずに地面につく

「くつ、なんとという手練れ！プロか？」

「いや、素人だから」

何て話をしていると

一夏とシャルロット、ラウラがこっちに歩いてきた

・・・ラウラ、ふらふらしてんだけど大丈夫か？

「あ、おりむくたちもやろうよ」

「お、いいな」

「うんやろうか」

「・・・かわいい・・・かわいい」

一人に戦力外通知出した方がいいと思います

「じゃあまず俺が抜けるかな」

・・・うん案の定ラウラはぼけーとしててあのサマーデビルのスパ
イクの餌食になった

「じゃあのほほんさん、そっちに入って俺がこっちはいるから」

一夏と同じになるとなんか卑怯な気がするからな

「行くよー!!」

シャルロットの一声と同時になかなかいい鋭さのサーブが来る

「よし、チャー」

「了解、シユー」

「最後、メン！」

一夏めがけて全力スパイクを放つ

「おわっ！」

対応しきれずボールは場外

どんなもんよ

などと楽しく遊んだ

〈食堂〉

「ふむ、上質な刺身だな」

さすが、海の近くだけあって海産物がほとんどだな

俺は反対側に箸、それ以外ほぼ名も知らな女子ばかりの場所にいる
なんでこうなった？

一番先にここに来て適当のここに座ったら

箸が反対側にきて、その後いまだ「ーーーーー」とすごい大声
でかつ大人数が俺の近くおよびその周辺の席に座って行った

ものすごい速さだったな

一夏は隣にシャルロットとセシリアがいる
くそ、知り合いが隣で羨ましい
俺は箒以外知らん！しかも箒はただ、黙々と飯食ってるだけだし
・・・考えるのがあほらしくなってきた
食おう

（部屋）

「ふ〜いや〜旨かった」

「まっただな」

なんて二人で談笑してると

「ん？お前たちだけか？女の一人も連れ込まんとは詰まらんやつら
だ」

「・・・連れ込んでたらどうしたんです？」

「さあ？どうするだろうな？」

楽しんでるよ、この人

「まあいい、織斑、久しぶりに」

「ああ、はい」

「なにすんの？」

「マッサージさ」

ほお

二人がマッサージを始め、俺は暇なので持ってきた、『天才シェフが認めた料理百選』を読み始めた

てか、織斑先生、気持ちいいんだろうがその艶やかな声やめてくれませんか？

気が散るんです

・・・うん？外に人の気配・・・4人、いや5人か
俺は入口に近づき

ガラッ

「「「「「きゃあああ！？」」「」「」

シャルロット、ラウラ、鈴、セシリアが床と熱烈なキスをして
笥は少し離れたところで立っていた

「何してんのさ？」

「べつべつに？ただここの前を歩いてただけだけど」

「なら、なんで襖開けただけでこっちに倒れてきてんの」

「いきなり開くから驚いただけですわ」

「だからってこっち向いて倒れんのおかしくないか？歩いてただけ
なら倒れないと思うけど」

「いろいろあるんだよ」

「なんだ、いろいろって？」

「いろいろは、いろいろだ！！」

「もうわかったよ、言い訳は」

「お前たちが、ちょうどいい、入れ」

「「「「「え？」」「」「」

「織斑、雨裂、風呂入ってこい」

「「「はい」」

なんだろう、俺等に聞かせたくない話か

・・・恋愛関係の話し？

まあいいや

「霧人！速くいこうぜ」

「お前どんだけ風呂好きだよ！」

さて、からかってやるか

「ここにジュースがある、何がいい？」

「……………」

「おいおい、葬式か通夜か？いつものバカ騒ぎはどうした」

「い、いえ、その……………」

「お、織斑先生とこうして話すのは、ええと……………」

「は、はじめですし……………」

「まったく、ほれ。ラムネとオレンジとスポーツドリンクにコーヒ
ー、紅茶だ。それぞれ他のがいいやつは各人で交換しろ」

そう言ったが、順番に箸、シャルロット、鈴、ラウラ、セシリアと
受け取った全員が渡されたもので満足だったのだろう交換会は開か
れなかったようだ

「い、いただきます」

全員が同じ言葉を口にして、そして次に飲み物を口にすると
女子の喉がごくりと動いたのを見て、私はニヤリと笑った

「飲んだな？」

「は、はい？」

「そ、そりゃ、飲みましたけど……………」

「な、何か入っていましたの!？」

「失礼なことを言うなバカめ。なにちよつとした口封じだ」

そう言っつて私は冷蔵庫から新たに取り出したのは、星のマークがキラリと光る缶ビールだ

プシュツ！と景気のいい音を立てて泡飛沫が飛び出す

それを唇で受け取っつて、そのまま私はゴクゴクと喉を鳴らした

「……」

「ふむ。本当なら一夏に一品作らせるところなんだが　それは我慢するか」

いつもの規則と規律に正しく、全面厳戒態勢の『織斑先生』と認識している女子全員がまたしてもぽかんとしている

特にラウラはさつきから何度もまばたきをして、目の前の光景が信じられないかのようだった

「おかしな顔をするなよ。私だつて人間だ。酒くらいは飲むさ。それとも、私は作業オイルを飲む物体に見えるか？」

「い、いえ、そういうわけでは……」

「ないですけど……」

「でもその、今は……」

「仕事中なんじゃ……？」

ラウラはぽかんと開いた口から何も言葉が出てこないようだ
代わりに、ブラックのコーヒーをぐくりと嚥下する

「堅いことを言うな。それに、口止め料はもう払ったぞ」

そう言っつてニヤリとする私は、全員の手元をざつと流し見る

そこでやっと女子一同が飲み物の意味に気づいて「あっ」と声を漏

らした

「さて、前座はこのくらいでいいだろう。そろそろ肝心の話をするか」

二本目のビールをラウラに言って取らせ、また景気のいい音を響かせて千冬が続ける

「お前らあいつのことどう思っている？」

「あたしは・・・えっと・・・より男前になっているがいいなあ・・・て」

モゴモゴさせて、小さい声で言う鳳

「わ、わたくしは・・・なんて言えばいいんでしょう・・・か、格好いいからでしょうか・・・」

さらに鳳よりもモゴモゴさせて喋るオルコット

「僕　あの、私は・・・優しいところ、です」

ぼつりとそう言ったのはデュノアで、声の小ささとは裏腹に真摯な響きがあった

「ほう。しかしなあ、あいつは誰にでも優しいぞ？」

「そ、そうですね・・・。そこがちょっと、悔しいかなあ」

シャルロットは照れ笑いをしながら熱くなった頬をぱたぱたと仰ぐ、三人はその様子を羨ましいのか悔しいのか、じいーっとシャルロットを見つめた

「で、お前は？」

さっきから一言も話していないラウラに、千冬さんが話しかけるとビクツと身をすくませながら言葉を紡ぎ始めた

「つ、強いところが、でしょうか・・・」

「いや弱いぞ」

「いえ、自分にはない強さが・・・あるので」

・・・ん、そういえば

「篠ノ之、お前はどっ思ってるんだ？」

「昔より剣の腕が落ちてるのですこし気にくわないというか」

うん？他の奴らと比べて随分落ち着いてるな

「篠ノ之、お前もしかして、雨裂のほうか？」

「な　つ／＼」

「そうか、たしか中学の時一緒になったことがあったらしいな」

「はい・・・」

「その時からか？」

「少しですが・・・」

「なるほど」

ふむ、やはりこいつらはからかいがある

「あいつは、家事全般が出来るし、マッサージも上手い、付き合える女は得だな。欲しいか？」

「「「「くれるんですか!？」」「」「」

「やるかバカ」

私がしてやったり顔で言うと、女子一同はええ〜・・・と声なき突っ込みが聞こえた

「女ならな、奪うくらい気持ちで行かなくてどうする、ガキども」

「」「」「」「」「」「」

「さて、話はこれで終わりだ」

しっしっ腕で帰れと示す

さて、どうなることやら・・・

〜次の日〜

「さて、今日は専用機持ちの」

「織斑先生」

「どうした、オルコット」

「どうして箒さんがいるのですか？」

「ああ、それは「ちーちャーん」・・・あのバカ」

森の方からドドドドドという音と共にどこかで聞いたことのあるような声が聞こえた

やがて、森の奥から姿を現したのは、頭にウサ耳のカチューシャをつけた

「束」

織斑先生が一言つぶやいた

そう、彼女は篠ノ之束

箒の姉であり、俺の両親を殺した白騎士の開発者

「さあさあ、ちーちゃん、この束さんとの愛を深めるためのハグを・
・・」

「黙れ」

「頭から出ちゃいけない音がくくく!?」

織斑先生が束さんにアイアンクローをかけている

束さんの頭からメキメキという音が出ている

しかし、その後何事もなかったように束さんはそれをすり抜けて

「やあやあ、あつくん久しぶり」

「お久しぶりです、束さん」

「いやー二年で随分男前になったね」

「束さんは変わらずお綺麗で」

「いや〜褒めても何も出てこないよ〜」

「挨拶もいいが、自己紹介しろ」

「しょうがないね〜、私が天才の篠ノ之束さんだよ、はろ〜」

変わらんこの人、十年前も二年前も今も

「やあ!」

「どうも」

箒、反応薄すぎだろ

そりゃたしかにまだわだかまりがあるだろうが

「箒ちゃんも大きくなったね、特に胸が」

ガンっ!

「殴りますよ」

「いったく、殴ってから言った、しかも、木刀で」

うん、どこにそんなもの持ってた？

「姉さん、私の」

「オーケーオーケー、全部言わなくても分かってるよ」

そう言つと東さんは上を向いた

「さあ！とくとご覧あれ！！」

そう言つてみんなの視線が上を向く

俺はなんとなく下を向いてみた
すると

どっこおおおん

と轟音を立て地面から鉄の塊が出てきた

「ふっふっふっ、みんな騙されたね？」

「どうでもいいことをするな」

「しょうがないな、これが篝ちゃんの専用機『紅椿』（あかつばき）だよ」

「これが、私の専用機」

「そうさ、この紅椿は最先端の第四世代機！既存のISをはるかに凌駕する機体さ！」

「だっ、第四世代機！？」

「そう、第四世代機はなんと展開装甲と呼ばれる装甲によつてどんな時、どんな場所にも適応できるという優れものを搭載したISな

のです」

「そんなことができるのか・・・？」

「この束さんに不可能はないのだよ！」

みんなが啞然と紅椿を見ていると

「あと、この展開装甲は白式の雪片にも搭載してまゝす」

「ええ!？」

てことは

「白式も第四世代機つてことですか？」

「そうだよ、てかあつくん君はとぼけるのがうまいね」

「何のことでしょう?」

「あつくんの緑式だっけ?あれも紅椿と同じ展開装甲じゃないか」

「「「「「ええっ!？」」「」「」」

黙ってたのに・・・

「この束さんと同じことを考えるなんてあつくんも天才だね」

「まあまだ試作なんで紅椿ほどとはいきませんが」

「それでもすごいことだよ、とまあ話はこころへんにしておいて

そう言うと束さんは箒をみて

「紅椿のフォーマットとフィッティングするから箒ちゃん乗って、乗って」

「姉さん、乗れないんですけど」

紅椿は直立状態で乗れることが出来ない状態になっていた

「おお、忘れてたよ、ならあつくん運んであげて」
「俺ですか？」

「そつだよ、同じ第四世代機持ちなんだから」

それなら一夏も同じだけど

まあ役得、役得

そのあと紅椿の性能テストの結果に驚いたりしている

「織斑先生!!」

「山田先生、どうしたんです？」

「実は・・・」

「何があつたんだろう？」

「あの慌てよう、ただ事ではあるまい」

しばらく教師二人が話をしててそれが終わった後

「緊急事態だ」

織斑先生の凜とした声と緊張に包まれた雰囲気是相当緊急なのだ
と認識した

臨海学校初日と二日目ちょっと（後書き）

とこんな感じですよ

ありがとうございます

白は敗れ傷つき緑は海に沈む（前書き）

今回はまあだいたい想像つくでしょう
どうぞ

白は敗れ傷つき緑は海に沈む

とある室内)

織斑先生の話によるとアメリカとイスラエルの共同製作で造られた

IS、銀の福音シルバリオ・ゴスベル

さらにアメリカが極秘に開発していた戦争用IS、大量虐殺の太陽ホロコイスト・ソーラー
この二機が実験中謎の暴走、基地やらを破壊し、逃走したらしい
ちなみに二機とも操縦者がいない状態で暴走したらしい

銀の福音はブルー・ティアーズと同様に射撃特化型の機体であり、シルバリオ・ゴスベル
特殊射撃による広域殲滅を目的としたISであり 主砲の銀の鐘はシルバリー・ベル
全砲身36門の同時展開を可能にしこれにより広域攻撃をする

大量虐殺の太陽も特殊射撃による広域殲滅を目的としているISで
あり主砲太陽の沈黙はバツクパツクソーラー・サイレントに搭載されているソーラーシス
テムによりエネルギーを大量に貯蓄しそれをバツクパツクに搭載さ
れている砲身8門により銀の鐘以上の破壊力で殲滅するといった戦
争においてこれほど厄介なものはないだろう
このソーラーシステムは常時起動しており太陽の沈黙使用中でも貯
蔵するためインターバルは10秒ほどしかない

「なんですの？このでたらめなISは？」

「このソーラーシステム、死角がないよ」

「このバツクパツクを集中的に攻撃して機能を殺すしかないな」

「とりあえず銀の福音が先にここに来る、この福音の対応を考えると
太陽が来る前に落とさなければならぬということは一撃で落とす
しかない」

「なら、一夏の零落白夜だね」

「ああ・・・って俺!？」
「当たり前だろ、なにいつてんだ」
「お前意外誰がやるというんだ？」
「霧人がいるだろう?」
「まあやれんこともないが一撃は無理だぞ」
「うぐう」
「やりたくないなら、やらなくていいんだぞ」
「・・・やるよ、やってやる」

まったく一夏の奴、最初からその気持ちでいるよまったく

「では、高速機動を行える装備を使えるものは？」
「私の強襲用高機動パッケージ「ストライク・ガンナー」がありませんわ」

「ならばそれを「ちよ〜〜と待ったー」・・・束」

天井裏から頭だけだして束さんが織斑先生の言葉を遮った

「ちーちゃん、ちーちゃん。もつといい作戦が私の頭の中にナウ・プリンティング!」
「出て行け・・・」

頭を押さえ出す千冬。

「聞いて聞いて!ここは断・然!紅椿と緑式の出番なんだよっ!」
「なに?」
「紅椿と緑式のスペックデータを見てみて!パッケージなんかなくても超音速機動ができるんだよ!」

Orz 隠してたのに

「なるほど、これなら」

「で、ですが織斑先生！」

「オルコット、お前その装備はインストールしたのか？」

「うっ」

「してないのだな、ではこの作戦でいく」

「さてと、飛ぶぞ緑式」

「来い、白式」

「行こう、紅椿」

三人して一斉にISを展開する

「もう一度作戦の説明をするぞ。織斑が篠ノ之の背中に乗り、雨裂がその背中を押して速度を上げる、一気に接近、零落白夜を叩き込む。万が一失敗した場合は一度撤退、それが不可能ならば戦闘に入つて隙が出来次第撤退だ、いいな？」

「……はい……」

真剣な面持ちで返答する2人。だが、約1名の声だけ、妙に喜色に満ちている

「しかし、偶々私達がいたことが幸いしたな。私と一夏が力を合わせれば出来ないことなど無い、そうだろ？」

「だろうな。でも篤、先生達が言ったとおり、これは訓練じゃなくて実戦なんだ。何が起きるか分からないから、十分気をつけて」

「そんなことは分かっている。何だ、怖いのか？」

「いや、そう言う訳じゃ」

「安心しろ、お前はちゃんと私が運んでやる。大船に乗ったつもりでいればいい」

こんな感じで、箒は妙に気分を高揚させている。専用機が手に入った嬉しさかどうかは定かではないが、少なくとも、その態度はこれから闘いに赴く者のそれではない

「箒、間違えるなよ」

「霧人、何も間違えはしない、安心しろ」

わかってねえ、全然分かってねえ

一夏にプライベート・チャンネルを開く

「どうした？」

「箒が目に見えて浮かれている、あの状態じゃどんなミスするか分かったもんじゃない、だからいつでもフォローできるようにしてきてくれ」

「了解」

太陽の事もあるから一撃で終わらせ無ければならない
全力で行かせてもらおう

単一仕様・・・使うときか・・・

「いくぞっ!!」

俺たちは福音へ向けて飛び立った

「一時衛星リンク確認。情報照合完了。目標の現在位置を確認。一撃で決めるぞ、一夏！」

「ああ！」

一夏が雪片の柄を握る手の力を強めると、暫時衛星から目標の情報を照合させた筈が紅椿を加速させる。加速と同時に展開された脚部と背部装甲は展開装甲の名に相応しい。筈は更に加速し、ついに二人のハイパーセンサーが目標の姿を捕捉した

（（あれか！））

3人の心の声が重なる。そのIS銀の福音はその名に相応しく全身の装甲が銀に輝いていて、日光を受けて輝いていた。何よりも異質なのは、頭部から生えた一对の巨大な翼。それは大型スラスタと広域射撃武器を融合させた特殊装備らしい

「目標との接触は10秒後、集中しろ！」

筈の音が聞こえた時には、既に一夏は意識を握った雪片と、目の前を飛翔している福音に集中させていた。一夏の集中に応えるように、雪片は輝きを増していく。福音と3人の距離は見る間に縮まり、

「うおおおおっ！！」

福音が攻撃範囲内に入った瞬間、一夏は瞬間加速を発動させ、福音に向けて突っ込んだ。雪片の輝く刃が福音に触れた、と一夏が確信した刹那、福音は最高速度のまま体勢を反転、後退する形で3人と相対する。突然、福音が反転したことに一夏は面食らうが、引くには遅すぎるのでそのまま福音へと突撃した

「敵機確認。迎撃モードへ移行。銀の鐘、稼働開始」

抑揚のない機械音声がオープン・チャンネルで聞こえると同時に、福音は身体を一回転させて一夏が振るう雪片を回避。逃すまいと、一夏も雪片を振るが、全てを紙一重で避けられ、零落白夜発動限界が迫っていることに焦りを覚えて大振りの一撃を出してしまう。その隙を逃すほど、福音は優しくはない

「!」

頭部から生えた大型スラスタ、その装甲の一部が開き、そこから砲口が覗く

「La・・・」

甲高いマシンボイスを放ち、福音は3人の視界を覆うほどの光弾をばら撒いた

「ちっ！シールドビット!!」

俺はすぐさま3人にシールドビットを展開させる
光弾がシールドビットに当たり轟音をだすがまだシールドビットは壊れない

「決めるしかない・・・いくぞ!」一騎当千!!」
「シールドエネルギーを現残量で固定、スペックを2倍に引き上げます」

機械音声が緑式から聞こえ機体が軽くなるのを感じる

これが緑式の単一仕様能力、エネルギー残量を固定しどんなに攻撃を喰らおうともエネルギーは減らない。さらに抑えていたスペック

を開放することで戦闘力を上げる
卑怯ともいえる能力だ、ON / OFFは俺の意思で決定できるため
永久的に発動することもできる

「速攻で終わらせるぞ!!」

「ああ」

「分かっている」

一夏がまず攻撃を仕掛ける様々な角度から剣を振るがいともたやす
くかわされてしまう
その合間を縫って俺のライフルビットが福音を狙うがこれまでかわ
される

「一夏!下がれ」

「くそっ!」

一夏が下がったところを俺と箒で斬りかかる
三本の刀が変則的に福音を襲うが福音もビームソードをだして応戦
し始める
埒が明かないのでソードビットを天叢雲剣に装着させる

「『絶刀』一閃!」

最速で剣をふるう

だがビームソードで防がれてしまった、いや、防いだというよりた
またま軌道上にあったと言った方があっていているようだ
タイミングを見て一夏が再び攻撃をするために接近してきた
今度は3人で一斉に攻撃を仕掛ける
さすがに対処できないらしく、福音は一気に距離をとった

「これを待つてたんだ!!」

俺は無限瞬時で福音に近づき攻撃を仕掛け一夏に飛ばす

「いまだ!やれ!」

「ああ、おりゃあああああ!!」

決まると思った瞬間頭部のスラスタが動いた

「まずい!一夏達、かわせ!」

「くっ!?!」

福音は再び銀の鐘を放った

しかし、俺の忠告を聞いていた一夏達は難なくかわした
今、福音は隙だらけだ

「やれ、一夏!」

「うおおおおおおお!!」

一夏が福音に向かう・・・かと思っただが一夏は福音の下を通り光弾
を切り捨てた

「何をしている!?!せつかくのチャンスに」

「船がいるんだ!海上は先生たちが封鎖したはずなのに
くそっ、密漁船か!」
ああ

一夏が光弾をかき消した瞬間、雪片式型の光の刃が消え、展開装甲
が閉じる

エネルギー切れの証拠だ

「馬鹿者！犯罪者など庇って・・・そんなやつらは　　！」

「箒！！！」

「ッ　　！？」

「箒、そんな　　そんな寂しいことは言うな。言うなよ。力を手にしたら、弱い奴のことが見えなくなるなんて・・・どうしたんだよ、箒。らしくない。全然らしくないぜ」

「わ、私、は・・・」

明らかかな動揺をその顔に浮かべ、それを隠すかのように手で覆うその時に落とした刀が空中で光の粒子へと消えた

具現維持限界リミットダウン　それは、エネルギー切れということだ

それに気づいた一夏は刀を捨てて一直線に箒へと向かう
俺も向かうが距離が離れすぎている！

「箒いいいつ！！！」

最後のエネルギー全てを使っただけの瞬時加速

そして福音は再び一斉射撃モードへと入り、箒に照準を絞っていたエネルギー切れのISAアーマーは恐ろしくもろい。なので連射攻撃を一度に受けたらひとたまりもない

それがわかっている一夏は必死に瞬時加速をした
結果、福音と箒の間に割って入ることができた

「ぐあああつー!!」

箒を庇うように前に立った瞬間、あの光弾が一斉に背中に降り注いだ

「一夏あつー!!」

「う・・・あ・・・」

ちい！くそつ、俺は福音に標的を変え『絶刀』三閃を放つ

まだ、射撃体勢に入っていた福音はよけられずもろに喰らった

俺は『一騎当千』を解除して箒に近づく

「わ・・・わたしは・・・」

「箒！」

「つー！む、霧人・・・」

「呆けてるんじゃない！！一夏を回収して撤退する」

「あ・・・ああ・・・」

福音の動きを確認するがいまだに動かない

箒が海面に浮かんでいる一夏に近づいたとき

緑式が新たな敵ISを補足した

大量虐殺の太陽か!?

反応した方を見ると金色のISが8個の砲身を箒に向けていた

「つー!!箒!!」

俺は瞬時加速で箒に近づき、箒を突き飛ばす

その瞬間、太陽の砲身から極太のビームが照射され、体中が焼ける
激痛が走る

シールドビットを展開していたが威力がでかすぎて溶けて爆散して
しまった

太陽のエネルギーを使っただけあるようだ
俺は何か身体を動かし箒にプライベート・チャンネルを開く

「一……夏を……連れて……戻れ」

「霧人!? 霧人!!!」

いかん、もう……意識が……

俺はいまだに照射されているビームに身を焦がされながら海中深く
へと沈んでいった

「霧人!!! 霧人!!!」

箒の声がただその場に響いていた

白は敗れ傷つき緑は海に沈む（後書き）

こんな感じですよ

実は明日から修学旅行なので

土日に更新することが出来ません
なので今回こっちだけ書きました

白と緑はさらなる高みへと昇る(前書き)

今回は二人が復活するところで
ぜひ

白と緑はさらなる高みへと昇る

とある客室

「・・・」

旅館の一室、壁の時計は四時前を指している

霧人は海中に沈んだまま行方不明になっている

ベッドに横たわる一夏は、もう三時間以上も目覚めないままだった
その傍らにいる私はずっとうなだれている

リボンを失って垂れた髪がまるで私の気持ちを表してるようだった

「（私のせいだ・・・）」

一夏は先ほどの戦闘による怪我で体中に包帯が巻かれている

「（私がしっかりしていれば霧人は・・・一夏はこんな目には
！）」

ぎゅうつとスカートを握り締める、拳が白く色を失うほどに強く、
強く握りしめた

「（私は・・・どうして、いつも・・・）」

いつも、力を手に入れるとそれに流されてしまう
それを使いたくて仕方がない
わき起こる衝動を、どうしてか抑えられない瞬間がある
霧人に間違えるなど・・・言われたはずなのに・・・

「(何のためにいつも修行をしてきたんだっ……!)」

どんなに後悔してももう遅いことなど分かってる

「(私は……もうISには……)」

一つの決心がつこうとした瞬間

「あー、あー、わかりやすいわねえ」

こちらに一切の許可なく鈴が入ってきた

「……」

「あのさあ、一夏がこうなったのって、霧人が帰ってこないのもア
ンタのせいなんでしょ？」

ISの操縦者絶対防御、その致命領域対応によって一夏は昏睡状態
になっている

全てのエネルギーを防御に回すことで操縦者の命を守るこの状態は、
同時にISのは除を深く受けた状態になる

それ故に、ISのエネルギーが回復するまで、操縦者は目を覚ませ
なくなってしまうのだ

「……」

「で、落ち込んでますってポーズ？　っざけんじゃないわよ！」

突然烈火のごとく怒りをあらわにした鈴は、うなだれたままの私の
胸ぐらを掴んで無理やり立たせる

「やるべきことがあるでしょうが！今！戦わなくて、どうすんのよ

「わ、私・・・は、もうISは・・・使わない」
「ッ　　！！」

バシンッ！

頬を打たれ、私は支えを失い床に倒れる

「甘ったれてんじゃないわよ・・・。専用機持ちっつーのはね、そんなワガママが許されるような立場じゃないのよ。それともアンタは　　」

鈴の瞳が私の瞳を直視する

そこにあるのは真っ直ぐな闘志。怒りにも似た、赤い感情

「戦うべきに戦えない、臆病者が」

その言葉で私の心の奥の闘志に火がついた

「　　ど・・・」

口から漏れたか細い言葉は、すぐさま怒りを纏って強く大きく変わる

「どっしろというんだ！もう敵の居場所も分からない！戦えるなら、私だって戦う！」

言葉だけではない、これは私の気持ちだ

「やっとやる気になったわね、・・・あーあ、めんどくさかった」
「な、何？」

「居場所なら分かるわ。今ラウラが　　」

言葉の途中でドアが開く。そこには真っ黒な軍服に身を包んだラウラが立っていた

「出たぞ、ここから三十キロ離れた沖合上空に目標を確認した。ステルスモードに入っていたが、どうも光学迷彩は持っていないようだ。衛星による目視で確認したぞ」

ブック端末を片手に部屋に入ってくるラウラを鈴はにやりとした顔で迎える

「さすが、ドイツ軍特殊部隊。やるわね」

「ふん……。お前の方はどうなんだ。準備は出来てるのか」

「当然。シャルロットとセシリアはどうなの」

「ああ、それなら」

ラウラがドアの方へと視線をやる。そして、それはすぐに開かれた

「たった今完了しましたわ」

「準備オツケーだよ。いつでもいける」

専用機持ちが全員そろうと、それぞれが私を見る

「で、アンタはどうするの?」

「私は……。私は」

ぎゅっつと拳を握る。しかし今度は後悔ではない!

「戦う……。戦って勝つ!今度こそ負けはしない!」

「決まりね」

「じゃあ、作戦会議よ。今度こそ確実に落とすわ」
「ああ！」

霧人、一夏・・・私は・・・もう間違えない！

「霧人も海中から出してやらないとね」

「勝ち逃げなんて許せないもんね」

そう言えば霧人は模擬戦で負けなしだったな

ざあ・・・、ざああん・・・

「(ここは・・・?)」

遠くから聞こえる波の音に誘われるまま、俺はどこもつかぬ砂浜の上を一人歩いていた
足を進めるたび、さく、さく、と足下の白砂が澄んだ音を立てる

「(夏なのか・・・?今は)」

ここがどこで、今がいつなのか分からない

「。く」

ふと、歌声が聞こえた

俺はなんだか無性に気になって声の方へ足を進める

「ラ、ラ、ラララ」

少女はそこにいた

波打ち際、わずかにつま先を濡らしながら、その子は踊るように歌い、謡うように踊る

そのたびに揺れる白い髪。輝き、眩いほどの白色

それと同じワンピースが風に撫でられて時折ふわりと膨らんでは舞った

「（ふむ・・・）」

俺はなぜか声をかけようとは思わず、近くにあった流木へと腰を下ろす。その木は随分前に打ち上げられたのか、樹皮は剥げ落ち、色も真っ白になっていた

時折吹く風は心地よくて、俺はただただぼんやりと目の前の光景を眺めた

「（なんだ・・・？ここは）」

俺は目を覚ますと森林に来ていた

木の上では雨が降っているらしく時折雫が落ちてくる

そのせいかあたりはうつすら霧に包まれている

とにかく動かなければいけない気がしたのでなんとなく歩き出す

しばらく歩くと目の前に大きな岩が転がっていてそこに誰か座っていた

しかし、その人物を俺は知っていた

そいつは男だ、どこに売ってるのか分からないような緑のコートを着て、そのコートと同じ色のズボンを穿いている

俺は岩の上に乗るそいつの隣に腰を下ろす

「よお、霧人」

「久しぶりだな、雨人」

そつだ、こいつは俺のIS、緑式的人格
名前は霧裂雨人、俺がつけた名だ

「なんで俺がここにいる？」

「強くなりたかったら俺のところに来いって言ったんだから、お前
が心のどこかでそう願ったんだろ」

「やはり、そうか」

「大量虐殺の太陽に負けたのが悔しいか？」

「当たり前だ、あんなに訓練して、代表候補生たちに勝ち越してた
つてのにあんな奴に負けたんだ」

「まあ、負けた原因は筭だがな」

「それは関係ない」

「ひゅ〜、惚れた女には甘いんだね〜」

「.....」

「そんなに怖い目で見んなよ、せつかくのイケメンが台無しだぜ？」

「まったく、お前という奴は.....」

「なあ霧人」

「どうした？」

「お前が欲する力とはなんだ？」

「俺が欲する力.....決まってんだろ」

俺は.....

「.....」

海上二〇〇メートル。そこで静止していた銀の福音は、まるで胎児

のような格好でうずくまっている
膝を抱くように丸めた体を、守るように頭部から伸びた翼が包む
？

不意に福音が頭を上げる

次の瞬間、超音速で飛来した砲弾が頭部を直撃、大爆発を起こした

「初弾命中。続けて砲撃を行なう」

福音から五キロ離れた場所に浮かんでいるIS「シユヴァルツエア・レーゲン」とラウラは、福音が反撃にうつるよりも速く次弾を発射した

その姿は通常装備と大きく異なり八〇口径レールカノン《ブリッツ》をそれぞれ肩に装備している

「（敵機接近まで・・・四〇〇〇・・・三〇〇〇　くっ！予想よりも速い！）」

あっという間に距離が一〇〇〇メートルを切り、福音がラウラへと迫る

その間もずっと砲撃を行っているものの、福音は翼から放たれるエネルギー弾によって半数以上を打ち落としながらラウラへ接近していた

「ちいっ！」

砲撃仕様はその反動相殺のために機動との両立が難しい

対して、機動に特化した福音は三〇〇メートル地点からさらに急加速を行い、ラウラへと右手を伸ばす。

避けられない！

しかし、ラウラはにやりと口元を歪めた

「セシリアー!!」

伸ばした腕が突然上空から垂直に降りてきた機体によって弾かれる青一色の機体 強襲用高機動パッケージ「ストライク・ガンナー」を装備した「ブルー・ティーズ」によるステルスモードからの強襲だった

「敵機Bを認識。排除行動へ移る」

「遅いよ」

セシリアの射撃を避ける福音を、真後ろから別の機体が襲う

それは先刻の突撃時にセシリアの背中に乗っていた、ステルスモードのシャルロットだった

ショットガン二丁による近接射撃を背中に浴び、福音は姿勢を崩すが、一瞬のことで、すぐさま三機目の敵機に対して銀の鐘による反撃を開始した

「おっと。悪いけど、この「ガーデン・カーテン」は、そのくらいじゃ落ちないよ」

リヴァイブ専用防御パッケージは実体シールドとエネルギーシールドの両方によって福音の弾雨を防ぐ

防御の間も得意の高速切替でアサルトカノンを呼び出し、タイミングを計って反撃を開始する

「・・・優先順位を変更。現状からの離脱を最優先に」

全方位にエネルギー弾を放った福音は、次の瞬間全スラスターを開いて強行突破を計る

「させるかあっ!?!」

海面が膨れあがり、爆ぜる

飛び出してきたのは「紅椿」とその背中に乗った「甲龍」だった

「離脱する前にたたき落とす!」

福音へと突撃する紅椿。その背中から飛び降りた鈴は、機能増幅パツケージ「崩山」を戦闘状態に移行させる

両肩の衝撃砲が開くのに合わせて、増設した二つの砲口がその姿を現す。計四門の衝撃砲が一齐に火を噴いた

「!?!」

肉薄していた紅椿が瞬時に離脱し、その後ろから衝撃砲による弾丸が一齐に降り注ぐ。しかしそれはいつもの不可視の弾丸ではなく、赤い炎を纏っている。しかも、福音に勝とも劣らない弾雨。増幅された衝撃砲 言うなれば、熱殻拡散衝撃砲と呼ぶべきものだった

「やりましたの!?!」

「まだよ!」

拡散衝撃砲の直撃を受けてなお、福音はその機能を停止させてはいなかった

「銀の鐘最大稼働 開始」

両手をいっぱい広げ、さらに翼も自身から見て外側へと向ける。

刹那、眩いほどの光が爆ぜ、エネルギー弾の一齐射撃がはじま

った

「くっ!!」

「第！僕の後ろに！」

前回の失敗をふまえて、紅椿は機能限定状態にある。展開装甲を多用したことから起きたエネルギー切れを防ぐため、現在は防御時にも自発作動しないように設定し直したのだった
もちろん、そう設定し直したのは、防御をシャルロットに任せられるからこそである。集団戦闘の利点を最大利用した役割分担であった

「それにしても・・・これはちょっと、きついね」

防御専用パッケージであっても、福音の異常な連射を立て続けに受け続けるのは危うかった

そうこうしている間にも物理シールドの一枚、完全に破壊される

「ラウラ！セシリア！お願い！」

「言われずとも！」

「お任せになつて！」

後退するシャルロットと入れ替わりにラウラとセシリアが左右から射撃を開始する

「足が止まればこっちのもんよ！」

そして直下からの鈴の突撃。双天牙月による斬撃のあと、至近距離からの拡散衝撃砲を浴びせる。狙いは、頭部に接続されたマルチスラスタ―銀の鐘

「もらったあああつ!!」

エネルギー弾を全身に浴びながら、鈴の攻撃は止まらない
同じく拡散衝撃砲の弾雨を降らせ、互いに深いダメージを受けなが
ら、ついにその斬撃が福音の片翼を奪った

「はっ、はっ……!どうよ　ぐッ!？」

片側だけの翼になりながら、それでも福音は体勢を立て直し、鈴の
左腕へと回し蹴りを叩きこむ。脚部スラスタで加速されたそれは、
一撃で鈴の腕部アーマーを破壊し、海へ墜すとす

「鈴!おのれっ　!!」

箒は両手に刀を持ち、福音へと斬りかかる
その急加速に一瞬反応を失った福音の、右肩へ刃が食い込んだ

「(獲った　!!)」

その思った刹那、左右両方の刃を手のひらで握りしめる

「なっ!？」

刀身から放出されるエネルギーで装甲が焼き切られるが、お構いな
しに福音は両腕を最大にまで広げ、残ったもう一つの翼が砲口を開
放して待っていた

「箒!武器を捨てて緊急回避しろ!」

しかし、箒は武器を手放さない

「（・・・ここで引いて、何のための・・・）」

エネルギー弾がチャージされ、光が溢れる。そして、それは一斉に放たれた

「（何のための力かつ！！）」

エネルギー弾が触れる寸前にぐるんと一回転する。その瞬間、爪先の展開装甲からエネルギー刃を発生させる

「はあああつ！！！」

かかと落としのような格好で残った片翼を切り落とし、福音は海面へ墜ちていった

「はっ、はあっ、はあっ・・・！！」

「無事か！？」

珍しくラウラの慌てた声を聞きながら、箒は呼吸をゆっくりと落ち着けていく

「私は・・・大丈夫だ。それより福音は」

「私たちの勝ちだ」と誰かが言おうとしたその時、海面が強烈な光の球によって吹き飛んだ

「！！？」

球状に蒸発した海は、まるでそこだけ時間が止まっているかのよう

にへこんだままだった。その中心、青い雷を纏った「銀の福音」が自らを抱くようにうづくまっている

「これは・・・!? 一体、何が起きているんだ・・・?」

「!? まずい! これは 『第二形態移行』だ!」

ラウラの叫んだ瞬間、まるでその声に反応したかのように福音が顔を向ける

「キアアアア・・・!!」

まるで獣の咆哮のような声を発し、福音はラウラへと飛びかかる

「なにっ!?!」

あまりに速い動きに反応できず、ラウラは足を掴まれる

そして、切断された頭部から、ゆっくりと、エネルギーの翼が生えた

「ラウラを離せえっ!」

シャルロットはすぐさま武装を切り替えて近接ブレードによる突撃を行う

けれど、その刃は空いた方の手で受け止められて止まった

「よせ! 逃げろ! こいつは」

その言葉は最後まで続かず、ラウラは眩いほどの輝きと美しさを併せ持ったエネルギーの翼に抱かれる

刹那、あのエネルギー弾雨を零距离で食らい、全身をズタズタにされてラウラは海へと墜ちた

「ラウラ！よくもっ・・・！」

ブレードを捨て、シャルロットはショットガンを呼び出す。福音の顔面へと銃口を当て、引き金を引いた

ドンッ！！

しかし、その爆音はショットガンのもではなかった

胸部から、腹部から、背部から、装甲がまるで卵の殻のようにひび割れ、小型のエネルギー翼が生えてくる。それによるエネルギー弾の迎撃がショットガンを吹き飛ばし、シャルロットの体も吹き飛ばした

「な、何ですの！？この性能・・・軍用とはいえ、あまりに異常な」

再び高機動による射撃を行おうとしていたセシリアの、その眼前に福音が迫る。瞬時加速

それも、両手両足の計四カ所同時着火による爆発加速だった

「くっ！？」

長大な銃は接近されると弱い。距離を置いて銃口を上げようとしますが、その砲身を真横に蹴られてしまう

そして、次の瞬間には両翼からの一斉射撃。反撃らしい反撃もできず、セシリアは蒼海へと沈められた

「私の仲間を　よくも！」

急加速によって接近した筈は、続けざまに斬撃を放ち続ける展開装甲を局所的に用いたアクロバットで敵機の攻撃を回避、それと同時に不安定な格好からの斬撃をブーストによって加速させる

「うおおおおっ!!」

お互いに回避と攻撃を繰り返しながらの格闘戦。徐々に出力を上げていく紅椿に、わずかに福音が押されはじめる

「(いける!これならっ)」

必殺の確信を持って、雨月の打突を放つ。しかし

キユウウウン・・・

「なっ!また、エネルギー切れたと!?　ぐあっ!」

その隙を見逃さず、福音の右手が筈の首を捕まえる
そして、ゆっくりとその翼が筈を包み込んでいった

「ぐっ、うっ……!!」

ぎりぎりと締め上げられ、圧迫された喉から苦しげな声が漏れる
福音の手は硬く筈の首を掴んで離さず、さらにはエネルギー状へと進化した銀の鐘が紅椿の全身を包んでいた

「(ここまでか……。情けない……。すまない、一夏、霧人)」

ぞあ、ぞあん・・・

さざ波の音を聞きながら、俺は飽きもせず女の子を眺めていた
その歌は、その踊りは、なぜだが俺をひどく懐かしい気持ちにさせる

「（・・・あれ？）」

ところが、ふと気が付くと少女の歌は終わっていた
踊りもやめて、少女はじいっと空を見つめている

俺は不思議に思って、座っていた木から離れて少女の隣へと向かう
ざあ、ざあ、と

波打ち際までやってきた俺を、涼しい水の調べが濡らす

「どうかしたのか？」

声をかけるが、少女はじいっと空を見つめたまま動かない
俺も何となく空を眺めると、ふと少女の声が耳に届いた

「呼んでる・・・行かなきゃ」

「え？」

隣に視線を戻すともうそこに少女の姿はなかった

あれ？

きよろきよろと左右を見るが、もう人影は見当たらない
歌も聞こえない、ざあざあと、波の音だけが聞こえる

「うーん・・・」

俺は仕方なく木のソファに戻ろうと身体を反転させる
すると 背中に声を投げかけられた

「力を欲しますか・・・？」

「え……」

急いで振り向くと、波の中 膝下まで海に沈めた女性が立っていた
その姿は、白く輝く甲冑に身を纏った騎士さながらの格好だった
大きな剣を自らの前に立て、その上に両手を預けている
その顔は目を覆うガードに隠されて、下半分しか見えない

「力を欲しますか……？何のために……」
「ん？ん……難しいこと聞くなあ」

ざあ、ざあんと、波だけが俺と女性の間にある

「……そうだな。友達を いや、仲間を守る為かな」
「仲間を……」

「仲間をな。なんていうか、世の中って結構いろいろ戦わないといけないだろ？単純な腕力だけじゃなくて、いろんなことさ」

俺は、いまいち自分の中でもまとまってないことなのに、妙に饒舌に喋っていた

話ながら「ああ、俺ってそう思っていたのか」と自分の驚きつつ、言葉は続いていく

「そういうときに、ほら、不条理なことってあるだろ。道理の無い暴力って結構多いぜ。そういうのから、出来るだけ仲間を助けたいと思う。この世界で一緒に戦う 仲間を」
「そう……」

女性は静かにうなずいた

「だったら、行かなきゃね」

「えっ？」

また後ろから声をかけられた

振り向くと、白いワンピースの女の子が立っていた

人懐っこい笑み。無邪気そうな顔でじいっと俺を見つめてる

「ほら、ね？」

手を取られて、にこりと微笑みかける

俺はひどく照れくさい気持ちになりながら

「ああ」

とうなずいた

すると、いきなり変化が訪れた

「な、なんだ？」

それが、世界が、眩いほどに輝きを放ち始める

その真つ白な光に抱かれて、目の前の光景が徐々に遠くぼやけて夢の終わり、何て言葉が不意に頭に浮かんだ

「（ああ、そういえば・・・）」

あの女性は誰かに似ていた

白い 騎士の女性

「大切な人を 仲間たちを守る力だ」

「誰の事だ？」

「決まってる、まずは箒、一夏、鈴、シャルロット、ラウラ、セシリア」

「まずは？」

「そりゃそうだ、一握りの人間しか守れない力なんて俺はいらない」

「ならどんな力を望む？」

「俺が守れる限りの人を守る力だ」

「・・・ほう」

「一握りの人が幸せになって、他の人が犠牲になるなんてまっぴらごめんだ、それでも俺だけじゃ救えない人もいるがな」

「それが、お前が学んだことが、あの事件で」

「そうだ」

俺は後悔したくない、失ってから後悔したって意味がないんだ
守れる人を見殺し何て出来るはずがない

「これ以上、愛する人を、大切な仲間を失いたくない」

「・・・」

「だから俺は失わないための守る力を欲する、そのためにこの三年間鍛え続けた」

「・・・やはり、お前を主にしてよかったよ」

「兩人」

「俺は作られた後すぐにこの人格が生まれた、そして世界を見るうちに女どもは俺等をファクションとしか見てないことに気付いた。

俺たちはそんなくだらしないものになるために作られたんじゃない」

「・・・」

「だからこそ、女どもを拒んだ、作り主の篠ノ之束さえ拒んだ、そんな時だ、お前に会ったのは」

「・・・」

「すべてのISコアは女の人格が多い、人格がまだ発現してないのもいるが、だから男が乗ることが出来ない」

「なぜだ？」

「東が男どもを拒絶しているからさ、もっともお前や一夏は別だがな」

「東さんは女でも興味のない奴は拒絶するが？」

「それでも東は女さ、だからこそコアたちは東と同じ性別の女しか認めない」

「俺はお前に気に入られた、しかし一夏はどうなんだ？」

「一夏の白式のコアはあいつを受け入れてんのさ、なにせ前に使われていたのが一夏の姉のISなんだから」

「まさか・・・白騎士か？」

「ご名答、だからこそ、姉の魂の半分と東の魂が半分入ってるあのコアが一夏を受け入れている」

「だから乗れると・・・」

「そつだ、話を戻すぜ」

「ああ」

「お前に会って初めてお前が俺を持った時あるだろ？」

「ああ、お前の世界に連れて行かれた時な」

「ああ、あれは強制的に起こったことなんだ、俺の意思じゃなく」

「・・・なんだと？」

「俺も驚いたぜ？だからこそ俺は思ったお前を主にしようと、そしてお前の揺るぎ無い決意をあの時間いてその考えは完全に決まった。そして今も、やはりお前は最高の主だ」

「褒めたところでなにもでないぞ」

「知ってるさ、さて話も終わったことだし、いい加減この海から出ようや」

「そつだな」

「俺たちは海の底に並ぶ森じゃない、陸地で堂々とした姿を魅せる森だ」

二人の言葉にうなずき、俺は前を向く

すると目の前が眩く光る

「俺たちは・・・もう負けない」

二人でそうつぶやき俺はただ前を歩く

福音が銀の鐘を放とうとした瞬間

「俺の仲間は！！やれせねえっ！！」

その声と同時に荷電粒子砲が福音に放たれた

福音は銀の鐘をしまい、距離をとった

筈はその粒子砲が飛んできた方へと向く

そこには

「一夏！！」

いつもの白式とは違う姿をした　白式第二形態、雪羅を纏った一夏がいた

「大丈夫なのか？一夏」

「おう、問題ないぜ」

一夏は大丈夫と言うように体をひとたたきした

「じゃあ行ってくるぜ、終わらせに」

そう言つと一夏は福音へと向かう

「箒、何ぼけつとしてんのよ」

「鈴!?大丈夫か?」

「あたり前じゃない、それより霧人」

「っ!!そうだったな」

一夏は福音と互角に戦っているが一夏のシールドエネルギーの減りが前よりも激しい

「すぐに探そう!」

「もちろんよ」

「急ぎましょう」

そう言つて海面に近づいた瞬間

ズドオオオオオン

轟音と共に目の前の海面に向けて極太のビームが突き刺さった
あまりの衝撃にみんなして飛ばされてしまった

「なによ!?!」

「っ!!あれを!!」

セシリアが指さした方向を見ると

「・・・!!大量虐殺の太陽」

すでに第二射を放てる状態になっている大量虐殺の太陽がいた

「まずいわね!散開!」

鈴の言葉に即座にみんなが反応して一斉に散らばる
太陽はそれを見て攻撃を止めビームサーベルとビームライフルを取り出し鈴に向かう

「このー!!」

鈴が青竜刀を振るい斬りかかる、しかし、ビームサーベルの一振り
で弾き飛ばされてしまった

「いったあ、なんて力してんのよ!」

鈴が距離をとりながら叫ぶ
すると太陽はビーム砲八門のうち一門を鈴に向ける

「いかん、鈴!そこからすぐに動け!」

「まじ!」

鈴が上へ飛ぶが太陽の銃身は鈴をとらえたままビームが放たれる
威力を落として速度を上げているらしく目には見えない速度だった

「は!?!」

鈴も見えなかつたようで驚きの声を上げながら吹っ飛ばされた

太陽は次に標的を箒に絞る

箒のシールドエネルギーは零

攻撃も防御できない状態である

太陽はバツクパツクから二門箒に向けてビームを溜めていく

「このー!!」

「やらせない!」

「喰らいなさい！」

ラウラ達が攻撃を仕掛けるが残りの六門からシールドが発生して攻撃がまったく通らない

箒はすでに動いても無駄なことを察してかまったく動こうとしないそして三人の攻撃もまったく通らずに太陽はビームを放つ

「（ここで終わるのか・・・）」

箒は少し悲しい表情でただ立っていた

「（霧人・・・すまない、お前に返事は・・・返せないようだ）」

迫るビームを眺めながら自分を三年間ずっと想っていてくれた、霧人の事を思い出していた

「さよなら、霧人」

そう言っつて箒は目を瞑った

「『居合』斬刀」

しかし、突然目の前から聞きなれた声がして驚きに目を開くと

「何が、さよならだよ？箒」

「あ・・・ああ・・・」

そこには真っ二つに斬られたビームとその前に二本の刀を鞘に納めている

そして前の緑式とは違い二門の大きな砲身を背負い腰にはビットが

前の倍近く装着されている
緑式第二形態 森羅を纏った霧人が立っていた

白と緑はさらなる高みへと昇る（後書き）

「作者と！」

「霧人の！」

「「雑談コーナー……！」

ドンドン！パフパフ！

「いや〜盛り上がってきたね〜」

「まったくだ」

「かつこいいよね、ビーム真つ二つ何て」

「なんてことやらせたんだ、まったく」

「まあいいんだよその方がかつこいいから」

「そうだけど」

「それにあの二振りの剣には耐ビームコーティングが施されてあつて、それでビームを斬ることが出来たんです」

「説明乙、次回は戦闘か？」

「そうですね、まあ圧勝予定ですが」

「おい……！」

「だって霧人がその気になったらあんな奴瞬殺でしょ？」

「いや、わからないから！お前のさじ加減だから」

「新たな技もあみ出すしね」

「もうネタバレやめろ……！」

「じゃあここら辺で」

「「今回はこれで終わります！ありがとございまして……！」

「「また来週……！」

長き想いはよじちやく寒る(前書き)

今回で臨海学校終了です

ぞいぞい

長き想いはようやく実る

く海上く

「霧人・・・本当に・・・無事なのか・・・？」

「じゃなきゃここにはいないぜ？」

俺がそういうと

「・・・霧人！！」

箒は俺に勢いよく抱きついてきた！？

「おわっ！／＼」

「霧人！よかった・・・っ」

「・・・心配かけてごめんな」

そう言っつて俺は箒を離す

「箒、みんなも下がってる。俺がやる」

「一人では無理だ！」

「箒、お前はシールドエネルギーがないだろ？俺の二の舞になる必要はない」

「ぐっ」

「でも、私たちは行けるわよ！」

「それでも今は邪魔だ」

「・・・なんで！？」

「あいつは一对多で圧倒的な力を発する、だったら一对一の方が戦いやすい。なにより福音の攻撃で消耗しているお前らでは太陽とは

戦えない」

「……たしかに……」

「だから、俺一人でやる」

俺の意見に誰も反論しなかった

俺はみんなに背を向けて太陽の方に向いた

「よお、久しぶりだな」

「……」

「無人だから返事なしか……当然だな」

太陽は問答無用で斬りかかってきた

俺は日本刀、イザナギとイザナミを抜き太陽と対峙する

太陽は腕のビームソード二本で左右から様々な攻撃をしてくるが冷静に俺は捌く

太陽の攻撃を受け止めそのまま蹴り飛ばした

太陽はバツクパツクから一門俺に向ける

俺は即座にイザナギをしまいビームライフル、タケミカツチを構える

太陽の砲身が光った瞬間タケミカツチを撃つ

するとちょうど俺と太陽の中心で爆発が起こった

即座に背中のレストラン二門、ツクヨミを構える

これはラウラとの模擬戦をもとに緑式が生み出した力

太陽は全く動いてないがおそらく沈黙を二門ほど構えてるはずだ

その直後前方の煙が少しいびつに揺れた

来る！！

「行くぞっ！！」

俺はツクヨミを放つ

それと同時に煙が吹き飛び二つのビームがこちらに向かってきたが俺のツクヨミとぶつかり相殺された

俺は即座にもう一度放った

その砲弾は構えたままの二門に当たり、沈黙の八門は六門になった

「……！」

「驚いた動作はするんだな……人格が反応してるってことだよな」

すると太陽は突然

「敵レベルSと判定、抹殺行動に移ります」

「なんだよ……それ！」

太陽は残りの六門を俺に向け、一門ずつ撃ってきた

一つ避けた瞬間にもう一つのビームが俺に直撃して後ろに飛ばされるとそのまま残りの四つのビームが連続して直撃した

「いっつく、きついぜこれ」

今のでエネルギーが結構減ったな、これじゃ一騎当千を使ってもとっておきが使えねえ

どうするか……

「霧人……」

「ただ見てることしかできないなんて……」

一人戦う霧人を見ていると胸が締め付けられる

一緒に戦いたい

あの背中を守っていたい

その思いが湧き出るがシールドエネルギーがない今霧人の邪魔に
かならない

「（紅椿・・・私とお前は・・・ここまでなのか・・・？霧人と・・・霧人の隣には行けないのか？）」

私は望む

霧人と一緒に戦う力を
霧人を仲間を救う力を

「（頼む・・・！紅椿！私に力を！）」

そう強く願った瞬間

「条件をクリア・・・『絢爛舞踏』発動」

「これは・・・？」

突然紅椿から声がしたと思ったら機体から黄金色の粒子が放出され
機体を覆った

すると、シールドエネルギーがみるみる回復していった

「これは・・・そうか紅椿、まだ・・・私たちは戦えるんだな！」

嬉しそうに私が言うとそれに反応するように紅椿がキュインと光った

「すまないが、私は行く！」

「・・・分かったわよ！行きなさいよ」

私は霧人の元へと急いで飛んだ

「ちっ！決定打が撃てねえじゃねえか！」

俺はビット、アマテラスを展開して攻撃のチャンスを狙っているが
奴の猛攻に攻めあぐねていた

森羅になったことで、ソードビット六基、ライフルビット十二基、
シールドビット十二基の計三十基のビットで攻防をしているが決定
打には程遠いため苦戦をしていた

「霧人！」

「箒？なぜ来た！？？」

「これを！」

そう言つて箒は右手を出してきた

俺はその手を掴む、すると箒の周りに放出されていた黄金色の粒子
が俺にも伝わってきた

そしてシールドエネルギーが一気に回復した

「これは！？？」

「私の単一仕様能力 『絢爛舞踏』だ」

「そうか・・・分かった」

「一緒に戦わせてくれないか？」

「・・・ああ、分かった。・・・ああ、そうだ」

「？」

もしものためにずっと持ってたんだっ
太陽の攻撃で無くなってなくてよかった

「これだ」

「リボン？」

「そ、今日誕生日だろ？それにリボンしてる方がお前は似合ってるからな」

「なっ・・・／＼」

赤くなってる箒にリボンを渡す

箒はそれで髪を縛り、真剣な表情になつた

ちなみにこの会話中も攻撃があつたわけだが

兩人が操作しているシールドビットにすべて防がれていた

本来なら俺一人でも三十基すべて扱えるのだが

集中しなくなれば操作は出来なくなる

その時は兩人が操作をするという役割分担をしている

イザナギとイザナミを取りだし、ソードビットを三基ずつ装着させ

箒とうなずき合い、同時に斬りかかる

太陽は六門をいまだに撃ち続けながら手の付け根あたりと肘からビ

ームソードを出して

応戦してきた

しかし、接近を許したことにより太陽の六門はシールドビットに完

封されライフルビットにすべてつぶされてしまった

「ここだー!!」

俺は両腕に隠されていた最後の武器を取り出す

シャルロットとの模擬戦をもとに緑式が生み出した力

パイルバンカー、カグツチ

太陽の肘にそれらをぶち当て容赦なく撃ち込む

その威力で太陽の肘から下が吹っ飛んだ

そういえば福音は捕獲しろと言っていたがこいつは最悪壊してもい

いんだっとな

「箒、離れてろ。とどめを刺す」

「ああ、分かった」

太陽は性懲りもなく胸についていたバルカンを撃ってるがそれに意味などない

「ISこれに乗ってるからこそできる雨裂流の技・・・そうだな『絶技』、これがいい」

「・・・!!」

俺は無敵瞬時を使って太陽のハイパーセンサーから消える
捉えきれて内容で太陽は周りをきよるきよる見渡している
仕掛けるか・・・『奥義』天裂と『秘技』千迅を組み合わせ、無限瞬時を使うことでしょうかやく完成する!!

「『絶技』天裂千閃あまなかくせこのひらめき」

太陽がハイパーセンサーで最後に見たものはおそらく
360度すべてを覆い尽くす千の斬撃だったろう
こちらでも千の斬撃が容赦なく太陽を包み込む様しか見えない
そしてすべての斬撃が消え、中心にはスタスタに切り裂かれた太陽の胴体だけが残っていた

「任務完了だな」

「いや、まだ一夏が福音と闘っている」

「ああ、そうか。よし、行くぞ」

「ああ」

「ぜらあああつー!」

白式の零落白夜の光刃がエネルギー翼を断つ

しかし、両方の翼を斬るのは至難の業で、またしても一撃目を回避されてしまう

そうしている間に失った翼は再度構築されて、こちらへと強力無比な連続射撃を行ってきた

「くっ！」

エネルギー残量二〇%

予測稼働時間、三分

(くそっ！このままじゃ)

白式の予測稼働時間を聞いて焦り出す一夏

「一夏！」

「霧人！？箒！？お前ら、ダメージは」

「大丈夫だ！それよりも、これを受け取れ！」

紅椿の手が白式へと触れる

その瞬間、一夏の全身に電流のような衝撃と炎のような熱が走り、一度視界が大きく揺れた

「な、なんだ ? エネルギーが 回復！？箒、これは

」

「今は考えるな！行くぞ、一夏！」

「さっさと終わらせるぜ」

霧人が不敵に笑う

「無事だったんだな、霧人」

「お前と同じだよ」

「太陽はすでに沈んだ、あとはこいつだけだ」

「そうか、分かったぜ！」

福音は銀の鐘を放ってきたが霧人のライフルビットとシールドビットにすべて防がれた

「こいつに時間はかけない、一気に決める」

「ああ！」

霧人の言葉に一夏と箒は同時にうなずいた

「俺が羽をもぎ取る、箒は銀の鐘の対処、一夏はトドメだ」

「ああ」

「わかった」

福音が銀の鐘を放つが箒の雨月と空裂により撃ち落とされ俺は一気に福音との距離を詰める

福音はエネルギー翼で霧人を包み込もうとしたがシールドビットで防ぎ福音の背後へまわりカグツチをエネルギー翼の根元に撃ち込んだその衝撃で前のめりになった福音の頭を一夏は左手のクロー、雪羅でつかみ砂浜に勢いよく突っ込んでいった

そのまま砂浜に突っ込んで煙が晴れると一夏は福音の頭から手を離しているところだった

「終わったのか？」

「ああ、終わったぜ」

「なら、帰ろう」

俺達はオープン・チャンネルで会話をして三人の元へ向かった
三人と合流して俺たちは織斑先生の元へと戻った
待ってたのは地獄だった（俺以外が）

「さてと、貴様らの言い分を聞こうか？」

「……………え」と……………

「……………」

旅館に帰ってきて玄關に向かうと腕組みをして仁王立ちしていた織
斑先生に捕まり

作戦室で正座を強制されていた（俺以外が）

俺？俺の場合、前の作戦の時から水中にいたから何とか免除された
らしい

「自分たちはこの判断を間違ってるとは思いません」

ラウラが皆を代表して言った

「……………そうか、しかし命令違反は命令違反だ。貴様らには反省文

30枚の提出と懲罰用の特別トレーニングだ」

「……………はい……………」

何か俺だけ何の罰もないって言うのは気が引けるな

「なんだ、雨裂。その罰を下さいというような顔は」

「気のせいです」

前言撤回、織斑先生のあのにやけ顔は絶対よからぬことを考えている

「じゃあ怪我とかしてないか検査しましょうか。・・・あ、男女別ですよ！もちろん」

「当たり前でしょう・・・」

「・・・」

「どうしました？織斑先生」

廊下に出ようとしたら織斑先生がこちらをじっと見ていた

「・・・しかしまあ、よくやった。全員、よく無事に帰ってきたな」「え？あ・・・」

なんだか照れくさそうな顔をしていたように見えたが、すぐに背中を向けられて表情は見えなくなる。さてと、部屋を出るとしよう

「ホントにいろいろあったな」

「ああ、お蔭で一日しか遊んでない」

「霧人はほぼ一日中海の底だったろ？」

「意識もない状態楽しめるか？」

「むりだな」

俺達は他愛無い会話を続けていた

〈海岸〉

「うん、やっぱり海は気持ちいいな」

俺はひとり夜の海を満喫していた

夜の外出禁止令？ムシムシ、絶対ばれると思うけど

そんなこと考えてると

「霧人・・・？」

「・・・箒？」

俺は後ろを向くとなぜか水着姿の箒がいた
水着のせいで豊満な胸がさらに誇張されていた

「どうしたんだ？」

「いや・・・ちよつとな」

「そうか・・・」

箒は俺の隣に腰下した

「「・・・」」

互いに無言が続いた

俺は決心をきめた

俺は立ち上がり箒の方を向く

「箒・・・篠ノ之箒。俺はお前が好きだ。付き合っ
てほしい」
「・・・」

箒にも一度告白する

箒は何も言わなかったがやがて立ち上がり

「こんな私でいいの・・・？」

「ああ、箒。お前じゃなければならぬ」

「・・・私も、お前の事が好きだ」

俺達は互いに向き合い

月光の下、俺達の影は重なった

長き想いはよつやく実る（後書き）

「今回はこんな感じですよ」

「なんだ、最後」

「俺の限界だ」

「・・・あ、そう」

「そう、もう駄目だ。ついでに話もする気が起きない」

「しつかりしろよ」

「燃え尽きたぜ・・・真っ白に」

バタツ

「あつ死んだ」

「まあいいや」

「また来週！！」

臨海学校終了（前書き）

前回書き損ねた続きを書きます
べしぞ

臨海学校終了

（海岸沿い）

「紅椿の稼働率は四二パーセントかあ。まあ、こんなところかな？」

空間投影のディスプレイに浮かび上がった各種パラメータを眺めながら、その女性は無邪気に微笑む

子供のように。天使のように

月明かりが照らすその顔は、いつもと変わらない

いつだって退屈そうな顔の、篠ノ之束その人だった

「んー・・・ん、ん」

鼻歌を奏でながら、別のディスプレイを呼び出す。そこでは白式第

二形態の戦闘映像が流れていた

それを眺めながら、束は岬の柵に腰掛けた状態でぶらぶらと足を揺らす

目の前にはただ海が広がり、高さは三〇メートル近い。落ちれば無事では済まないその場所でも、束の表情はけして変わることはない

「はー。それにしても白式には驚くなあ。まさか操縦者の生体再生がまで可能だなんて、まるで」

「まるで、『白騎士』のようだな。コアナンバー〇〇一にして初の実戦投入機、お前が心血を注いだ一番目の機体に、な」

森から音もなく千冬が姿を現す。漆黒のスーツを着た姿は、闇すべをを引き連れているかのような静かな威厳に満ちていた

「やあ、ちーちゃん」

「おっ」

お互いに振りむかない。背を向けたまま、東はさつきまでと同じようにぶらぶらと足を揺らし、千冬はその身を木に預ける

どんな顔をしているか、別に見なくてもわかる

そんな確かな信頼が、二人の間にはあつた

「ところでちーちゃん、問題です。白騎士はどこに行つたんでしょうか？」

「・・・白式を『しろしき』と呼べば、それが答えなんだろう？」

「ぴんぽーん。さすがちーちゃん。白騎士を乗りこなしたただけのこととはあるね」

かつて『白騎士』と呼ばれた機体はそのコアを残し解体され、第一世代作成に大きく貢献した。そしてそのコアは、とある研究所襲撃事件を境に行方不明になり、いつしか『白式』と呼ばれる機体に組み込まれていた

「それで、うふふ。たとえばの話、コア・ネットワークで情報をやり取りしていたとするよね。ちーちゃんが一番最初の機体『白騎士』と二番目の機体『暮桜』そうしたら、もしかしたら、同じワンオフ・アビリティーを開発したとしても、不思議じゃないよねえ」
「・・・」

千冬は、答えない。しかしそれに構わず東は続ける

「それにしても、不思議だよねえ。あの機体のコアは分解前に初期化したのに、なんでだろうねー。私がしたから、確実あのコアは初

期化されたはずなんだけどね」

「不思議なこともあるものだな」

確かにそれについては、わからないというのが本当のところである
それは、東にとっても同じ

しかし、東は別にわからなくても問題はない

「・・・そうだな。私も少したたとえ話をしやろう」

「へえ、ちーちゃんが。珍しいねえ」

「例えば、とある天才が一人の男子の高校受験場所を意図的に間違えさせ、そこにあるISをその時だけ動けるようにする。ことが出来るとして、そうすると、本来男子が使えないはずのISが使える、ということになるな」

「ん？でも、それだと継続的に動かないよねえ」

「そうだな。お前は、そこまで長い間同じことをしないからな」

「えへへ。飽きるからね」

「・・・で、どうなんだ？とある天才」

「どうなんだろうねー。うふふ、実のところ、白式がどうして動くのか、私にもわからないんだよねえ」

「ふん・・・。まあいい。次のたとえ話だ」

「多いねえ」

「嬉しいだろう？」

「違うね、と返して東は千冬の話に耳を傾ける

「とある天才が、大事な妹を晴れ舞台でデビューさせたいと考える。
そこで用意するのは専用機と、どこかのISの暴走事件だ」

東は答えない。そして、千冬も言葉を続ける

「暴走事件に際して、新型の高性能機を作戦に加える。そこで天才の妹は華々しく専用機持ちとしてデビューというわけだ」
「へえ、不思議なたとえ話だねえ。すごい天才がいたものだね」
「ああ、すごい天才がいたものだ。かつて、十二カ国の軍事コンピュータを同時にハッキングするという歴史的大事件を自作した、天才がな」

東は答えない。しばらく沈黙が続いた
そのとき突然千冬が口を開く

「東、紅椿の絢爛舞踏は一夏のための能力ではないのか？」

「そういうわけじゃないよ、緑式に並ぶための能力だよ」

「並ぶため？」

「そう、緑式の一騎当千は無限に戦える能力。そして絢爛舞踏は使い次第で無限に戦える能力」

「相性はバツチリと言うことか」

「そう・・・でもあつくんには驚きだよね」

「どういうことだ？」

「だってあの一騎当千、東さんも考えたことがあつたけど実現できなかつたんだよ？」

「なんだと・・・」

「緑式のコアも手伝ってるんだろうけどあつくんは本当に規格外だよ。篝ちゃんの心をいつくんから奪い取ったしね」

「お前はなんとも思わないのか？篠ノ之が雨裂と付き合うことに」

「むしろオツケーですよ」

「・・・そうか」

二人に沈黙が続いた

「ねえ、ちーちゃん。今の世界は楽しい？」

「そこそこにな」
「そうなんだ」

岬に吹き上げる風が、一度強くうなりを上げた。

「」

その風の中、何かをつぶやいて・・・束は消えた。
忽然と、突然と

「」

千冬は息を吐き出して、後頭部を押しつけるように木に寄りかかる
その口元から漏れる声は、潮風に流れて消えた

〈旅館内〉

「」

俺と箒はさっきから黙りこくっていた
何故かって？さっきのが恥ずかしかったからだよ！！
俺は何気なく窓の外を見た

「・・・あれ？一夏達だ」

「どこだ？」

「あそこ」

箒と一緒に外を見る

そこには、一夏がセシリアをお姫様抱つこで持ちながら鈴、シャルロット、ラウラから逃げていた

「相変わらずだなあ、あいつら」

「ああ」

「全くだね」

「「・・・は？」」

俺達は揃って後ろを向く・・・そこには

「やつ、二人とも付き合うことになったんだよね？おめでとう！」

何故か満面の笑顔の束さんがいた

「な・・・なんで知ってるんですか!？」

「だって聞いてたし」

「「な・・・/」」

「ふっふっふっ、初々しいねえ。それでいて羨ましいねえ」

「つかいつ入ってきたんだこの人？」

「ふすま開ける音聞こえなかったぞ？」

「素敵な女性には秘密があるもんさ」

「ああ、そうですね」

聞くのあきらめよう

「で？どうだった？紅椿の絢爛舞踏」

「とても素晴らしかったです」

「そうかい？うれしいね、篝ちゃんがあっくんと一緒に戦えるよう

にって考えて考えて思いついた能力だからね」

「いつから考えてたんです？」

「造ってる途中だよ？」

「と言うことはそんなに考えてませんよね」

「まあそうなんだけどさ」

・・・本当に箒と似ても似つかないなこの人

「じゃあそろそろ行くよ。次はいつになるかな？」

「それは束さん次第でしょ？」

「まあそうだね」

「・・・姉さん」

「ん？どうしたんだい？箒ちゃん」

「紅椿・・・本当にありがとう」

「・・・えへへ、嬉しいね。じゃあね」

そういつて束さんは窓から出て行った

そのまま窓を見ていると

「待て！！貴様ら！！」

「」「」「うわああああああ！！」「」「」「」

一夏達が織斑先生に追っかけまわされていた

「」「」

「寝るか」

「そうだな」

箒は自分の部屋へ帰っていった

臨海学校終了（後書き）

「次からは夏休み編だぜ」

「そうだな」

「まあほぼ原作どおりなんだけどね」

「まあそうだろうな」

「うん、いい会話が思いつかないから今日は切り上げよう」

「・・・大丈夫か？こんなんで」

「いいんじゃない？」

「「また来週」」

デート中に災難に巻き込まれるとは（前書き）

今回は霧人と筭が買い物に行く回です
どうぞ

デート中に災難に巻き込まれるとは

（寮内）

「あれ？もうきれてやがる」

「霧人、どうしたんだ？」

「ああ、シャンプーとボディソープがきれてんだ」

「そうか、なら買いに行かないとな」

「そうするか、ついでに買うものとかあるし」

「私もあるから一緒に行くか」

「そうだな」

俺達は着替えて部屋を出た

俺達が付き合うことになったということがなぜか学校内に広まっております。俺は羨ましそうな目で見られることが多くなった

そして俺を狙うような背筋がピシッと凍るような視線がなくなり、俺はホッとしている

その代わり一夏にその視線が集中してるけど

（レゾナンス）

「そう言えば聞いたか？鈴とセシリアが新しくできたプール場でIS起動したって」

「いや、聞いたことないが、いったい何をしてそうなったんだ？」

「ああ、何でもその日レースみたいなのやっててそれに参加した二人がゴールした後いきなりIS起動して暴れたらしい」

「少し曖昧だな」

「本人たちもあまり話したくないらしく詳しいことが聞けなかったんだと」

日常生活で必要なものを買ひ揃えつつ箒とそんな話をする
はつきり言つて周りの目がすごい集まつてる

男性半分、女性半分

まあ箒は美人だし、胸もあるから分かるけど
俺つてそんなにいい顔してないと思うんだが、顔に傷もあるし

「くそう、なんだあのカップル！似合ひすぎる」

「あの男の人かっこいい！顔の傷がよりかっこよさを引き出してる」

「あの女の子可愛いすぎる！くっ！一人なら絶対声をかけるのにあの野郎と合ひすぎて声がかけれない」

あ、そうですか

まあ自分がイケメンだなんて考える奴はナルシストぐらいなもんか
その他に服や筆記用具など様々なものを買つてるうちに昼になつたので昼食をとろうと言う話になり
店を探していると

「おい、聞いたかこの先の@クルーズで眼帯つけた銀髪的美少女が
メイドやつてるって」

「まじでか？！いこうぜ！」

「……、箒。俺の頭には一人の知り合ひが浮かんできてるんだが
奇遇だな、私もだ」

「ねえねえ！@クルーズに金髪的美少年執事があるんだって！」

「ホント！それは行くしかないわね！」

「なぜかシャルロットが頭を過つたぞ」

「……私もだ」

「……行つてみるか」

互いにうなずきその@クルーズとやらへ足を運んだ

「いらつしゃ・・・い・・・ませ」

「やっぱりシャルロットか」

「そうだな、ラウラもいるな」

「む、霧人に筈!? どうして?」

「いや、こちら辺で噂になつてるぞ? 金髪の美少年執事と銀髪眼帯美少女メイド」

「うう、なんでそんな噂が」

シャルロットはタパーと涙を出して呟いた

「さて、空いてる席はどこなんです? 執事さん?」

「うう、霧人のイジワル」

「接客をしないので?」

「ホントにイジワル!」

「ごめん、ごめん、案内頼むよ。シャルロット」

「まったく、筈なんかもう席ついてるよ」

「あ、ホントだ」

「うん、相当旨いなこれ」

「ああ、そうだな」

注文したものを食べ終わり二人してコーヒーを飲んでいると

「てめえら、うごくんじゃねえ!!」

銃を持った3人組がいきなり店に入ってきた

一瞬、何が起こったのか理解できなかった店内の全員だったが次の

瞬間に発せられた銃声で絹を裂くような悲鳴が上がった

「きゃあああつ!?!」

「騒ぐんじゃねえ! 静かにしろ!」

「(.....いや、撃ったから騒がしくなったんだろ)」

俺と筭は動じずにコーヒーを飲み干す

「あー、犯人一味に告ぐ。君たちはすでに包囲されている。大人しく投降しなさい。繰り返す」

さすがは駅前の一等地

警察機関の動きはこの上なく迅速で窓から見える店外ではパトカーによる道路封鎖とライオットシールドを構えた対銃撃装備の警官たちが包囲網を作っていた

「.....なんか」

「.....警察の対応も」

「.....古.....」

言うな、客

一世代くらい前の刑事ドラマみたいな感じだな

「ど、どうしましょう兄貴! このままじゃ、俺たち全員」

「うるたえるんじゃねえっ! 焦ることはねえ。こっちは人質がいるんだ。強引な真似はできねえさ」

リーダー格とおぼしき三人の中で髭をはやした男がそう告げると、逃げ腰だった他の二人も自信を取り戻す

「そ、そ、そうなんだな。お、おらたちには高い金払って手に入れたコレがあるんだな」

「ジャキツ！と硬い金属音を響かせてショットガンのポンプアクションを行う」

そして次の瞬間、威嚇射撃を天井に向けて行った

「きゃあああっ！！」

蛍光灯が破裂し、パニックになった女性客が耳をつんざくような悲鳴を上げる

それを今度は髭の男がハンドガンを撃って黙らせた

「大人しくしてな！俺たちの言うことを聞けば殺しはしねえよ。わかったか？」

女性は顔面蒼白になって何度もうなずくと声が漏れないようにきつく口をつぐむ

「（霧人、どうするんだ？）」

「（・・・よほどのことがない限り傍観でいいだろ）」

会話を聞きとられないように小声で話す

「（何もしなければ危害はくわえてこないとも限らんが）」

「（そこまで馬鹿じゃないだろ）」

「（そうか、なら）」

「（うん？どうし・・・た）」

箒の向いてる方向へ視線を動かす、すると

「……………」

「(何してんだ？ラウラの奴)」

店内で強盗以外にただ一人立っていたのはラウラだった
どこに消えたかと思っただら……

「なんだ、お前。大人しくしてろってというのが聞こえなかったのか？」

ラウラの元にすぐにリーダーがやってくる
その手に握ったままの銃を、ラウラは一瞬だけ見て視線から外した

「(予定変更、ラウラの動きしただいで俺が動く)」

「(そうか、無茶はするなよ)」

俺は箒にウィンクして組んだ足を戻す

「おい、聞こえないのか！？それとも日本語が通じないのか！？」

「まあまあ兄貴、いいじゃないツスカ！時間はたっぷりあるんスカ
らこの子に接客してもらいましょうよ！」

「ああ？何言ってるんだ、お前」

「だって、ホラ！すっげー可愛いツスよ！」

「お、オラも賛成なんだなっ。それにめ、メイド喫茶に入るのは、
初めてなんだな！」

ふたり揃ってテヘへと嬉し恥ずかしな表情を浮かべる手下にリーダー
は眉間にしわを寄せながらソファにどかっとな腰を下ろす

「ふん。まあいい。ちょうど喉が渴いていたところだ。おい、メニューを持ってこい」

ラウラはうなずくでもなく男たちを一瞥すると、カウンターの前にすたすたと歩いていく

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

重いような沈黙が続いた

すぐにラウラが持ってきたのは氷が満載された水だった

「・・・・・・・・なんだ、これは？」

「水だ」

「いや、あの、メニューを欲しいんすけど・・・」

「黙れ、飲め。　　飲めるものならな」

ラウラは突然トレーをひっくり返す

当然、氷水が宙に舞うがそれらを回転するような動作で掴み弾いた

「いつてええっ！？な、なっ、何しやがっ　　」

氷の指弾

それをトリガーから離れていた人差し指に突然の出来事に反応できずにいた瞼に、眉間に、喉に、一瞬で当てる

そして犯人の怒号より早く、ラウラはデブの懐へと膝蹴りを叩き込んだ

「ッざけやがって！このガキ！」

いち早く痛みから復活した髭がハンドガンをぶっ放そうとするが

「させないよ」

髭の後ろから現れ殴り倒したのはシャルロットだった

「あ、執事服でよかったかな。うん。思いっきり足上げても平気だし」

ラウラに視線を奪われていたためシャルロットが背後へと回っていたのに気づけなかったのだ

「あ、兄貴っ！？こ、こいつッ

「させはしない」

サブマシンガンでシャルロットを撃とうとしたチビの、その背後に迫っていたのはラウラだった

「なっ！？このっ

「この程度でひるむなど下らんな」

そんなことを口にしながら、ラウラはチビを制圧した

その対応はふたり揃って慣れている　　というようなレベルではもはや無い

より高度な戦闘を数多く経験している、その証明であった

ISの専用機持ちともなれば、どの国も『ありとあらゆる事態』を

想定した訓練を課している
それが候補生であっても変わりはない
ISが展開不能な状態にあっても、状況を打破できるように鍛えられて
いるのだ

無論、軍人であるラウラと非軍人のシャルロットでは、それぞれに
持っている技能・対応能力・肉体能力に開きはある
しかし、この程度の状況ならば、特に問題はない

「目標2、制圧完了。 ラウラ、そっちは？」

「問題ない。目標3、制圧完了」

「・・・！ふざけんなあ！ぼけがあ！！」

髭は気を失っておらず、デブが持ってたショットガンを二人に向ける
ラウラ達と髭の距離が離れすぎているため発射の阻止は出来な
いかわせることもできるが後ろには客がいるのだ

「「しまっ ！！」」

ドンっ！！

ラウラ達はとっさに目を瞑り痛みを耐えようとした
しかし、いくらたつても痛みが来ない
二人は目を開ける・・・すると

「・・・ふう！やっぱり手刀は使わない方がいいかも」

IS学園の制服を着た霧人の背中だった

「う・・・そ・だ」

髭は啞然としている、それもそうだ、自分は間違いなくショットガンを撃つたのだ
不発ではなくしっかりと弾が出たはずなのだ
なのに、目の前に立つ男は無傷
外したのかと思いい目で銃弾を探す

「お前の探し物は俺の足元だぜ」

霧人の声に驚き髭は霧人の足元を見る

俺の足元には散弾の玉がバラバラになって落ちていた

「雨裂手刀流『絶刀』十閃」

「ば・・・かな」

「馬鹿はお前だ」

霧人は髭に近づくと

「ひっ！来るなあ！」

髭の顔は恐怖に染まり、ポンプアクションもせずにショットガンを霧人に向ける

「雨裂手刀流『絶刀』一閃」

サンっ！！

「ひ、う、うわああああああ」

霧人はショットガンを真っ二つに斬った

「寝てる」

一言つぶやき髭の腹に一撃いれる
髭は声も上げずに床に倒れた

「うわぁ・・・」

「銃を素手で斬るなど・・・ありえん」

「お、終わった・・・？」

「助かったの、私たち・・・」

「い、一体何が・・・」

危機を脱したことはわかるものの、まだ状況を正しく把握できていない人々は、何度もまばたきを繰り返してラウラとシャルロットと霧人の姿を呆然と眺めている

「お、俺たち助かったんだ！」

「やった！あ、ありがとう！メイドさんに執事さんにあなた、ほんとうにありがとう」

助かった実感が今になってはつきりと自覚できたのか、突然店内はわっと騒がしくなる

その様子を見て、状況に決定的な変化があったのかと警官隊も詰めかけてくる

「ふむ、日本の警察は優秀だな」

「ラウラ、霧人、まずいつて代表候補生で専用機持ちなんだから、公になるのは避けないと！」

「それもそうだな。このあたりで失敬するでしょう」

案の定、警官隊の後ろには交通規制もなんのその、立ち入り禁止の

ロープを乗り越えたマスコミ関係者が大勢見えた裏口から出ようとカウンターに入ると

「今日はほんとにありがとうー！！これバイト代」

「え？誰、この人」

「店長だよ、この@クルーズの」

「ああ、そうなの」

「あなたたちの事は伏せておくから早くいきなさい」

「……では、ありがとうございます」「」「」

「ふふっ、礼儀正しい子達ね」

〈学園内〉

「いや〜災難だった」

「そうでもないと思うがな」

「そうだぞ、霧人。なにせ私たちがいたんだからな」

「でもありがとうね、あの時これで最後か、なんて思っちゃったよ」

「そうだよ、お前ら油断しすぎなんだよ」

「むう、それは申し訳なかったが」

「しかし、霧人。無茶はするなと言ったはずだが」

「あれは無茶じゃないぞ、筈」

「そうか？無茶にしか見えなかったが」

「何言ってるんだ？中学の時も見せたろ？」

「ああ、そうだったな。鉄筋を斬った時に見せてくれたな」

「だろ？だから、あれは無茶じゃないんだよ」

「そうか……ならいいのだが」

「……（羨ましい）……」「」

「じゃあ部屋に戻るか」

「そうだね」

「では、またな」

今日は楽しかったし、面倒くさい一日だった

デート中に災難に巻き込まれるとは（後書き）

こんな感じですよ

また来週

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3954x/>

IS 緑を纏うもの

2011年12月18日09時57分発行